

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10

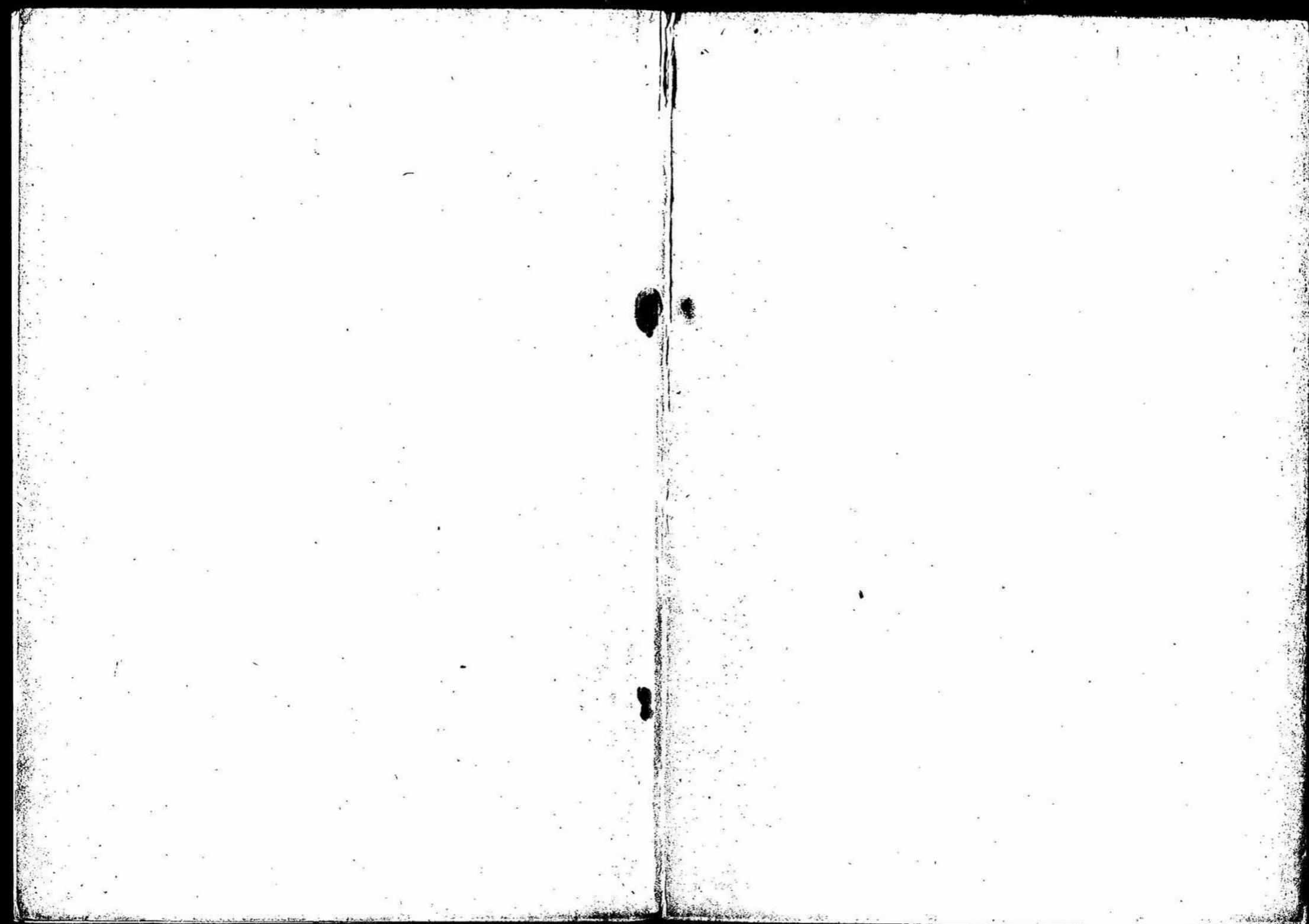


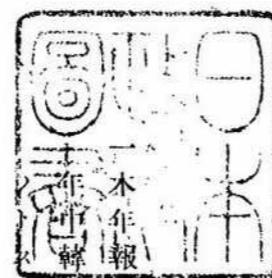
第三次韓國施政年報

明治四十一年

三三五〇、力行、二
統監府

文	閣	內
函		
架	九六〇號	和書類
冊		





例

和二九〇八年
辨

本年報ハ明治四十一年度中統監府、同所屬官署ニ於テ施行シ及明治四十一年
韓國政府ノ各機關ヲシテ施行セシメタル政務ノ大綱ヲ記述シタルモ
然レトモ事實ノ翌年度ノ初頭ニ入りテ完結ヲ告ケタルモノ及特ニ
必要アルモノハ次年度ニ亘リテ之ヲ記述セリ。

前項統監府及其ノ所屬官署ト韓國政府トノ間ニ記述期間ヲ異ニスルハ韓
國政府ノ會計年度ハ曆年ト同一ニシテ我會計年度ト同シカラサルニ由ル

一諸般ノ統計ニ關シテハ別ニ統監府統計年報ノ發刊アルヲ以テ本年報ニ於
テハ單ニ必要ニ應シテ其ノ要點ヲ摘錄スルニ止ム

一年號ハ主トシテ日本年號ヲ用ヰ韓國年號ヲ用ウル場合ニハ日本年號ヲ併
記シテ對照ニ便ス尙最近數年ニ於ケル兩國年號ヲ對照スレハ左ノ如シ

日本年號	韓國年號	西曆
明治三十七年	光武九年	一九〇四年
明治三十八年	光武九年	一九〇五年
明治三十九年	光武十年	一九〇六年
凡例		

凡例
明治四十年 隆熙元年
明治四十一年 隆熙二年
明治四十二年 隆熙三年
附錄ハ明治四十一年以降明治四十二年六月迄ニ發表セラレタル重要ノ條
約並統監府及韓國政府ノ公布シタル重要法令ヲ舉ク
一九〇九年

明治四十二年十二月

目次

第一章 概 説

一頁

第二章 統監府	三
第一節 官制	三
第二節 統監府臨時間島派出所	三
第三節 統監府特許局	三
第四節 経 費	四
(一) 豊原ノ所管	四
(二) 統監府	四
(三) 通信及鐵道	五
(四) 营林廳	五
(五) 立替金	六
第三章 韓國皇室	八
日 次	一

目 次

第一節 宮中肅清	二
第二節 內廷ノ改善	八
第三節 享祀ノ釐正	九
第四節 兀員淘汰	一〇
第五節 帝室財產整理	一一
第六節 帝室債務整理	一二
第七節 皇室費收支	一三

第四章 中央行政

第一節 内閣ノ更迭	一六
第二節 中樞院	一六
第三節 文官任用令ノ改正	一七
第四節 日本人任用	一八

第五章 地方行政

第一節 地方行政刷新ノ概要	一〇
第二節 地方官會議ノ創設	一〇
第三節 地方官會議ノ結果	一一
第四節 觀察使ノ更迭	一一
第五節 地方官任用法ノ刷新	一二
第六節 觀察道ノ移轉	一二
第七節 郡ノ廢合	一二
第八節 地方費法ノ制定	二七
第九節 民籍	二八

第六章 國際事項

第一節 間島ニ於ケル對清交涉	三〇
第二節 間島韓民ノ保護	三一
第三節 工業所有權及著作權保護條約	三二
第四節 元馬山露國租借地ノ買收	三四

目 次

目 次

第七章 司法制度

四

第一節 裁判所

三六

(一) 第二次ノ開庭

三六

(二) 地方裁判所支部ノ新設

三八

(三) 裁判所ノ成績

三九

(四) 警察官ノ司法事務補助

四〇

第二節 监 獄

四一

(一) 監獄ノ開庭

四二

(二) 司獄事務ト警察事務ノ分離

四三

第三節 法 制

四三

(一) 刑法大全ノ改正

四三

(二) 法令ノ制定、改正及廢止

四四

(三) 辩護士法

四五

第八章 警 察

四八

第一節 警視廳官制改正

四八

第二節 各道警察部ノ設置

四八

第三節 警務上歩調ノ統一

四九

第四節 警察部長及警察署長會議

五〇

第五節 警察官ノ任用

五一

第六節 警察機關ノ配置

五四

第九章 治 安

五五

第一節 暴 徒

五五

(一) 暴徒ノ狀況

五五

(二) 暴徒ノ歸順

五七

(三) 暴徒ノ損害

五八

目 次

第二節 暴徒討伐機關ノ統一	五八
第三節 憲兵	五九
(一) 憲兵ノ配置	五九
(二) 憲兵補助員	六〇
第四節 警備電話線ノ架設	六〇
第五節 新聞紙ノ取締	六一
第六節 結社取締	六二
第十章 財 政	
第一節 歳 計	六三
(一) 隆熙三年度豫算	六三
(二) 繼續費豫算	六八
(三) 特別會計豫算	六九
第二節 財務機關	七〇
(一) 地方財務機關	七〇
(一) 金 庫	七一
(二) 地方委員會	七二
(四) 徵收成績	七三
第三節 稅制整理	七三
(二) 結稅整理	七三
(二) 戶稅整理	七四
(三) 三稅新設	七五
(四) 人蔘稅法ノ制定	七六
(五) 紅蓼專賣法ノ公布	七六
(六) 國有移屬雜稅ノ整理	七八
第四節 國 債	七九
(一) 起 債	七九
(二) 使 途	八〇
第五節 貨幣整理	八一
(一) 舊白銅貨ノ回收	八一
(二) 菜錢其ノ他舊貨ノ整理	八一

目 次	
(三) 新貨幣ノ發行	八
(四) 貨幣流通額	八二
(五) 紙幣ノ發行準備	八三
第六節 金 融	
(一) 金融機關	八四
(二) 農工銀行	八四
(三) 普通銀行	八六
(四) 地方金融組合	八七
(五) 手形組合	八八
(六) 倉 庫	八九
第七節 國有移屬不動產ノ調査整理	九〇
第八節 財源調査	九一
(一) 鹽業調査	九二
(二) 煙草調査	九二
(三) 酒類醸造試験	九三
第九節 會計検査	九四
	九五

第十一章 外國貿易	
第一節 外國貿易ノ趨勢	九七
(一) 漢出入ノ減少	九七
(二) 日韓貿易	九八
(三) 對清貿易	九九
(四) 通商各國ノ位地	一〇〇
(五) 金銀及紙幣ノ輸出入	一〇一
第二節 稅 關	一〇一
(一) 稅關ニ關スル施設	一〇一
(二) 稅關工事	一〇三
第三節 清津ノ開港	一〇四
第四節 船 舶	一〇五
第五節 航路標識	一〇六
第十二章 產 業	一〇七

目 次

一〇

第一節 農 業

(一) 勸業模範場 一〇七

(二) 園藝模範場 一〇七

(三) 臨時棉花栽培所 一〇八

(四) 種苗場 一〇九

(五) 觀測所 一〇九

(六) 東洋拓殖株式會社 一一〇

(七) 國有未墾地ノ處理 一一一

第二節 商工業

(一) 普通會社及商事組合 一一三

(二) 市 場 一一三

(三) 商品陳列館 一一四

(四) 道府物產陳列場 一一四

(五) 航路補助 一一五

(六) 度量衡 一一五

第三節 鑛 菜

(一) 鑛業法ノ改正 一七

(二) 鑛業經營ノ現狀 一八

(三) 鑛產額 一九

(四) 鑛業ト外國人 一九

第四節 林 業

(一) 森林ニ關スル法令ノ公布 一一一

(二) 林業經營ノ機關 一一一

(三) 模範造林 一一一

(四) 森林調査 一一一

第五節 水産業

(一) 通漁協定ノ改正及漁業法規ノ制定 一二五

(二) 漁業ノ獎勵補助 一二五

目 次	一一一
(三) 韓國水産業ノ將來	一一七

第十三章 交 通

第一節 道 路	一一九
第二節 鐵 道	一二九
(一) 運輸ノ狀況及成績	一二九
(二) 建設改良工事	一二九
(三) 建設及改良費	一二九
(四) 資產及收支	一二九
第三節 通 信	一三五
(一) 通信機關ノ整備	一三五
(二) 通信機關ノ現狀	一三六
(三) 韓人郵便貯金ノ獎勵	一三八
(四) 通信業務ノ成績	一三九
(五) 缺損額ノ漸減	一四一

(六) 韓國々庫金取扱	一四二
-------------	-----

第十四章 官 業

第一節 營林廠ノ成績	一四三
第二節 官營礦山	一四五
(一) 平壤鐵業所	一四五
(二) 黃海道鐵礦	一四六
第三節 印刷局	一四六
第四節 建築所	一四七
第五節 煉瓦製造所	一四八
第六節 製鹽業	一四九
(一) 鹽業行政ノ轉管	一四九
(二) 鹽業試驗場ノ成績	一四九
(三) 鹽田增築	一五一

第十五章 教育

第一節 官公立學校

(二) 女子教育ノ創始 一五二

一 高等女學校ノ創設 一五二

二 普通學校女子部ノ創設 一五二

(二) 普通學校ノ増設 一五二

(三) 外國語學校 一五四

(四) 師範學校 一五四

(五) 高等學校 一五六

第二節 學部所管以外ノ教育機關

(二) 農林學校 一五六

(二) 工業傳習所 一五六

第三節 舊式教育機關ノ改善

(二) 成均館ノ改革 一五七

(二) 書堂ノ改良 一五八

第十六章 衛生

第四節 私立學校

(二) 私立學校令 一五八

(二) 私立學校補助規程 一六〇

第五節 學會令

第六節 教科用圖書ノ檢定及編纂 一六二

第七節 留學生規程ノ改正 一六三

第一節 傳染病	一六四
第二節 種痘	一六四
第三節 漢城衛生會	一六五
第四節 大韓醫院	一六六
第五節 醫育機關	一六七
第六節 水道	一六八

日 次

一六

第十七章 居留帝國民ニ對スル施設

一七〇

第一節 施 設

一七〇

(一) 居留民團法施行規則ノ改正 一七〇

(二) 民長官選制度實施ノ結果 一七〇

(三) 新聞紙規則ノ制定 一七一

(四) 教育事業獎勵 一七二

第二節 現 態

一七二

(一) 民團經營ノ事業 一七三

(二) 財 政 一七四

(三) 居留民公共團體ノ增加 一七五

(四) 戶 口 一七六

(五) 學 校 一七八

(六) 銀 行 一七九

附 錄



第十一 次韓國施政年報

明治四十一年

第一章 概 説

明治四十一年ニ於ケル韓國施政改善ノ要綱ハ前年締結ノ日韓新協約ノ趣旨ヲ承認シ明カニ之ヲ各般ノ施設ニ擴充シ保護政治ヲシテ一新生面ヲ開カシムルニ在リ即ナ一面從來ノ顧問制度ヲ全廢シテ政務機關全般ニ瓦ル官制改正ヲ斷行シ以テ行政組織ノ統一ヲ完成シ一面從來間接指導ノ位地ヲ保ツニ過キサリシ日本人ヲシテ直接施政改善ノ衝ニ當ラシメ以テ各般政務ノ刷新ト政機運用ノ敏活ヲ企圖シタリ是ニ於テ保護奉行ノ機能益充實シ之ヲ内ニシテハ宮中ノ肅清、内廷ノ改善ヲ遂行シ同時ニ國家財政ト宮中財政トノ分界ヲ正シ司法制度ニ就テハ明カニ之ヲ一般行政ヨリ分立セシメテ司法權ノ獨立ヲ確保シ財務整理ニ關シテハ愈改善ノ歩武ヲ進捗シテ財政ノ基礎ヲ確立セムコトヲ圖リ教育ニ關シテハ其ノ機關ノ擴張ト内容ノ改善トヲ努メ内務行政ニ關シテハ警察機關ノ整備及地方行政機關ノ改善ヲ企圖シ以テ地方行

政刷新ノ歩ヲ進メ産業行政ニ關シテハ金融其ノ他ノ必要機關ノ配置、産業振興ノ勸奨及治道ノ計畫ニ一層ノ力ヲ加ヘテ地方經濟狀態發展ノ企畫ヲ進メタリ初メ僱聘日本人官吏ノ中央及各地方官署ノ任務ニ就クヤ韓民中或ハ之ニ對シテ種々ノ誤解ヲ懷キ往々政務改善ノ進行ヲ沮礙セムトスルモノアリ改革ヲ喜ハサル地方行政官ノ如キ暗ニ其ノ勢ヲ助長スルモノアルニ至リタルモ韓國政府ヲシテ地方長官ノ更迭ヲ斷行セシメ日韓官吏ノ親和ト誤解迷想ノ融解ニ一層ノ力ヲ致サシメショリ人心茲ニ一新シ韓國多年ノ宿弊ハ未タ之ヲ割除シ盡スヲ得スト雖諸般ノ新施設概々其ノ緒ニ就キ積極的ニ整理改善ノ實ヲ舉ケタルモノ尠カラス則ナ本年ニ於ケル各般ノ施設事項ハ左ニ章ヲ分ケテ各其ノ梗概ヲ敍説スヘシ

第二章 統監府

第一節 官 制

明治四十一年度ニ於テハ統監府臨時間島派出所新官制及統監府特許局新官制ノ公布アリタルノミ其ノ他ハ統監府鐵道管理局官制及統監府通信管理局官制中職員ノ定員ニ關スル小改正アリタルニ過キス

第一節 統監府臨時間島派出所

前年度中間島地方在留韓民保護ノ目的ヲ以テ假ニ同地ニ開設セラレタル統監府派出所ハ明治四十一年四月勅令第八十六號ヲ以テ新ニ官制ヲ公布セラレ純然タル一行政廳トナレリ同官制ニ據レハ同所ハ統監ノ管理ニ屬シ間島ニ於ケル韓國臣民ノ保護ニ關スル事務ヲ掌ルモノニシテ其ノ職員ハ所長ノ外事務官専任二人、技師専任一人、屬技手、通譯生通シテ専任五人トス四十二年四月更ニ官制ヲ改正シ事務官一人、技師一人、屬以下判任官定員五人ヲ増シ新ニ通譯官専任二人ヲ加ヘタリ

第三節 統監府特許局

統監府特許局ハ韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作権ノ保護ニ關スル日米條約ニ基キ明治四十一年八月勅令第二百二號ヲ以テ公布セラレタル統監府特許局官制ニ依リ開設セラレタルモノニシテ同條約實施ノ當日即ナ同年八月十六日ヲ以テ之ヲ韓國京城ニ開局セリ

同官制ニ據レハ同局ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作権ニ關スル事務ヲ掌リ局長ノ外事務官、技師(通シテ專任二人)審查官(專任五人)審査官補専任五人屬、技手、通譯(專任計七人)ヲ置キ局長、事務官及技師ヲ以テ審判官トシ特許、意匠及商標ニ關スル審判ヲ掌ラシムルモノトス

第四節 經費

(一) 豫算ノ所管

明治四十一年度ニ於テハ豫算ノ所管ニ關シ何等變更ナシ

(二) 統監府

明治四十一年度經費ハ經常部現計百十六萬五千九百餘圓ニシテ本府、理事廳、法務院及臨時間島派出所ノ經費ヲ含ム而シテ臨時部現計ハ五百九十六萬八百餘圓ニシテ其ノ重ナル費用ハ韓國政府立替金五百二十五萬九千五百八十圓、東洋拓殖會社補助金三十萬圓、特許局諸費四萬三千九百十三圓、在韓居留民團教育費補助金三萬圓、朝鮮海水產組合補助金二萬圓等ナリトス其ノ內特許局諸費ハ第二豫備金ヨリ支出セラレタルモノニシテ同局經費現計總額ハ右ノ外追加豫算ノ支出ニ係ル現計額九千七百九十六圓餘ヲ含ム

四十二年度豫算ハ經常部百二十萬三千七百七十三圓、臨時部五百三十二萬七千六百三圓ニシテ經常部各廳別內譯ハ本府五十六萬百三十七圓、法務院四萬四千五百二十九圓、理事廳四十五萬二千二百八十二圓、臨時間島派出所七萬六千九百十五圓、特許局六萬九千九百十圓、臨時部內譯ハ韓國政府立替金四百六十萬三千五百四十圓、東洋拓殖會社補助金三十萬圓、在韓居留民教育費補助金四萬圓、朝鮮海水產組合補助金二萬五千圓其ノ他營繕費、傳染病豫防費等ナリトス

(三) 通信及鐵道

通信管理局及鐵道管理局ノ豫算ハ遞信省ノ所管ニ屬シ其ノ收支ハ別ニ通信及鐵道ノ項ニ於テ記載セルナ以テ之ヲ略ス

(四) 营林廠

韓國森林特別會計四十二年度豫算ハ收益勘定歲入森林收入七十六萬九千六百四圓歲出森林作業費七十六萬五千六十九圓ニシテ四十一年度末日現計資本總額八百二十二萬六百九十八圓ナリトス其ノ四十及四十一年度損益勘定決算ハ之ヲ營林廠ノ成績ノ項ニ掲ク

(五) 立替金

韓國政府立替金年割ハ從來六箇年割ナリシヲ明治四十一年日韓兩國政府ノ協議ニ依リ之ヲ五箇年割ニ變更シ隨テ其ノ最終年割額三百萬圓ヲ三等分シテ之ヲ四十二年度以降三箇年ニ各百萬圓宛振分ケタリ立替金改訂年割額ノ明細左ノ如シ

金百七十六萬九千五百三圓 明治四十一年度

金五百二十五萬九千五百八十圓 明治四十一年度

金四百六十五萬三千五百四十圓 明治四十二年度

金四百萬圓 明治四十三年度

金四百萬圓 明治四十四年度

計金千九百六十八萬二千六百二十三圓

立替金ノ總額及條件ニ就テハ變更ナシ

第三章 韓國皇室

第一節 宮中肅清

明治四十年十二月宮内府改正官制實施ト共ニ宮中ノ肅清、官紀ノ振肅、諸法規ノ制定及冗員ノ淘汰ヲ行ヒ韓國宮廷ノ面目ヲ一新シタルハ前年報記載ノ如シ而シテ之カ指導監督ノ衝ニ當ルヘキ同府傭聘ノ日本人官吏ハ初ハ大臣官房、内藏院、帑室財產整理局等府内ノ首腦部ニ配置セラレタルノミナリシモ四十一年ニ於テハ漸ク之ヲ擴張シ承寧府、皇后宮、修學院等ノ特殊ノ官廳ヲ除クノ外ハ宮内府中殆ト日本人ヲ配置セサル所ナキニ至レリ此ノ如クニシテ宮中ニ於ケル多年ノ積弊ハ漸ク其ノ跡ヲ絶ナ啻ニ諸般事務ノ刷新ヲ來タセルノミナラス五百年來因襲ノ陋習惡慣ハ日ヲ逐フテ改新ノ實ヲ擧ケツ、アリ又改正官制實施後大ニ宮内官吏服務紀律ノ勵行ニ力ナ致シ且皇宮警察ヲシテ益宮中出入ノ取締ヲ嚴ニシ宮禁令ニ依リテ宮中一般ノ保安ヲ確實ニセシメタル結果宮中ノ肅清漸ク其ノ目的ヲ達シ内廷改善ノ進捗ト相俟ツテ韓國皇室ヲシテ其ノ尊嚴ノ度ヲ増加セシメタリ

第二節 内廷ノ改善

從來久シク不規律ヲ極メタル内廷諸般ノ事項モ明治四十年末宮内府官制改正以後ハ漸ク其ノ面目ヲ改メ今ヤ日常ノ行事日ヲ逐フテ整頓シ御需ノ如キモ其ノ出納ヲ嚴ニシテ冗費ノ節約ヲ行ヒ大小ノ調度却テ往時ヨリモ豊富ナルニ至レリ而シテ其ノ改善ノ最モ著シキハ内廷ノ衛生状態ナリトス宮内府改正官制ノ施行セラルルヤ從來韓國舊醫ノ巢窟タリシ大醫院ヲ廢シ其ノ冗員ヲ淘汰スルト同時ニ日本人醫師ヲ典醫其ノ他ニ聘用シテ宮中ニ於ケル醫療保健ノ事ニ膺ラシメ井水ノ使用ヲ廢シテ水道水ヲ用ヒ御料器具ニ一切ノ消毒ヲ勵行シ浴室ノ設備ヲ改良シ下水道ノ掃除消毒ハ最モ嚴重ニ之ヲ行ヒ供御ノ膳部ノ如キ食料品ハ一切典膳司ニ於テ調理ノ上進御ノ際必ス醫師ヲシテ検査セシメツゝアリ

皇帝ノ健康ノ如キ從來長ク不良ノ状況ニ在リシカ官制改正後ニ於ケル宮中ノ肅清ト衛生状態ノ改善トハ其ノ四圍ノ陰鬱ナル事情及疑悞ノ憂念ヲ一掃シタルカ爲漸次回復ノ兆候ヲ呈シ加之公事ニハ韓服ヲ廢シテ洋裝ヲ用ヒ夜

間ノ祝務ヲ全廢シテ祝政時間ヲ一定シ春秋二季ニハ努メテ日々戸外ノ運動ヲ執ル等日常行事ノ規律ヲ正フシタル結果皇帝ノ性情自ラ快活トナリ其ノ健康モ亦著シク増進ノ結果ヲ現ハセリ

第三節 享祀釐正

從來宮内府ニ於ケル祭祀ニ關スル儀式ハ頗ル繁縝ニ涉リ帝室祀ト國祀トヲ混同シ且祭祀ノ名稱アルモノハ悉ク之ヲ宮内府ニ於テ舉行スルノ慣例ヲ爲シ其ノ回數ノ多キ一年中七百九十二回ニ及ヒ隨テ諸般ノ弊竇ナ釀成シ冗員冗費ヲ要スルコト甚シカリシヲ以テ本年ニ於テ斷然之カ釐正ヲ決行スルコトトシ隆熙二年即ケ明治四十一年七月享祀釐正ノ詔勅煥發セラレ宮内府ハ帝室ノ祭祀ニ限り之ヲ舉行スルコトニ定メ同時ニ勅令ヲ以テ帝室祀國祀及民祀ノ區別、享祀ノ回數及祭祀ニ關スル諸般ノ管理方法ヲ規定シ而シテ帝室ニ關係ナキ祭祀ニ供用セシ土地建物ハ一切之ヲ國有ニ移屬セシメタリ其ノ結果帝室關係ノ享祀回數ヲ二百一回ニ削減シ各壇廟社殿宮陵園墓ノ管理者三百五十四人ヲ二百五十三人ニ減シ女官四十人ヲ解職シ祭祀費年額約十五

萬圓ヲ三萬八千圓ニ減額スルヲ得タリ

第四節 冗員淘汰

宮中冗員淘汰ハ明治四十年末ヨリ四十一年ニ亘リテ數次ニ實行セラレ宮内府官制改正ノ結果トシテ廢官又ハ退官トナリタルモノ勅奏任官以下百六十六名、宮中肅清ノ爲メ解雇サレタルモノ前後通計員役三千八百九名、女官二百三十二名、權任、巡檢以下三百十七名ニ及ヘリ此等ノ淘汰總員ニ對シ支給スベキ一時賜金ノ總額ハ實ニ三十萬餘圓ニ達シ其ノ内四十一年中ニ於テ支給セ了セルモノ二十七萬九千餘圓ニ及ヘリ

第五節 帝室財產ノ整理

帝室財產整理ノ要旨ハ主トシテ帝室有財產及收入中當然國有ニ屬スヘキモノヲ調査判別シテ其ノ歸屬ヲ釐正シ以テ宮中府中財政ノ混淆ヲ匡スニ在リ由テ韓國政府ハ明治四十年十一月先ツ宮内府收租官ヲ廢シ十二月勅令ヲ以テ從來宮内府ノ所管ニ屬セシ紅蓼專賣事業、參稅、沿江稅及土地附帶ノ諸雜稅

並庖稅、銅鐵鑛稅等ヲ國庫ノ收入ニ移シ尋テ四十一年六月勅令ヲ以テ驛屯土賭租並賭錢及漁磯汎稅其ノ他從來宮内府ニ於テ徵收セル諸稅ヲ舉ケテ之ヲ國庫ノ收入トナシ同時ニ各驛屯土其ノ他元宮内府所管及慶善宮所屬不動產（宮殿、太廟ノ基址及現朝ノ陵、園、墓ノ内核字内ヲ除ク）ヲ舉ケテ之ヲ國有ニ移属ヒシムルコトセリ是ニ於テ帝室有財產及收入ト國有財產及收入トノ歸屬始メテ其ノ正ヲ得宮中府中ノ財政茲ニ截然其ノ範域ヲ分ナ帝室財產ノ整理モ債務ニ關スル事項ノ外ハ大體ニ於テ其ノ落着ヲ見ルニ至レリ由テ韓國政府ハ臨時帝室有及國有財產調査局並帝室財產整理局ヲ廢止シ七月度支部大臣掌理ノ下ニ臨時財產整理局ヲ設置シ國有移屬不動產ノ調査並帝室債務ノ整理ニ任セシムルコトトセリ

第六節 帝室債務ノ整理

帝室債務ハ期滿免除ノ規定ナク債務中甚シキハ十數年以前ノ發生ニ屬スルモノノアルノミナラス其ノ金額證據ノ明確ナラサルモノ多ク整理上困難少カラサルナ以テ明治四十一年四月法律ヲ以テ帝室一切ノ債務ニ會計法ノ時效

チ準用スルコト及債權者ニシテ同年九月三十日迄ニ債權存在ノ申告ヲ爲ササレハ債權ハ其ノ效力ヲ失フヘキコトヲ規定公布セリ

帝室債務ノ整理事務ハ帝室財產整理局ノ管掌スル所ナリシモ同年六月勅令ヲ以テ之ヲ度支部大臣ノ掌理ニ移シ其ノ後同部臨時財產整理局ノ調查ト帝室債務審查會ノ審議トニ經四十二年五月ニ至リ全ク之レカ審查決定ヲ遂ケ同會ニ於テ其ノ義務ヲ認メタル債務全部ノ仕拂ヲ了セリ
茲ニ所謂帝室債務トハ前皇帝禪讓前ノ發生ニ係ルモノ一切ヲ指スモノニシテ其ノ種類各宮債務、準單債務及雜債務ノ三種ニ分カレ其ノ請求金額總計二百三十八萬七千餘圓アリ其ノ内請求拒絶ト決定セラレタルモノ及現皇帝卽位後發生ノ債務ト認メラレタルモノヲ除キ其ノ義務ヲ認メテ支拂ヲ了シタル額ハ總計三十八萬三千餘圓ナリトス

第七節 皇室費ノ收支

皇室費ノ收支ハ元ト内藏司及經理院ノ分掌スル所ニ屬シ其ノ經理統一ヲ缺キタルノミナラス本來正確ナル觀念ニ基ク豫算ナルモノナキヲ以テ其ノ收

第三章 韓國皇室

一四

支ノ詳細明確ナル状況ハ之ヲ究ムニ由ナク其ノ紛淆ノ甚シキ當時財政顧問部モ亦指ナ之ニ染ムルヲ避ケタリシカ明治四十年十二月宮内府改正官制実施ノ結果經理院及内藏司ヲ廢止シテ内藏院ヲ置キ以テ皇室財政ノ處理ヲ統一スルト同時ニ適當ナル日本人ヲ同院要路ニ任用シテ經理出納ノ要務ニ當ラシメ以テ其ノ收支ヲ正確ナラシメショリ皇室財政モ茲ニ始メテ豫算確守ノ端ヲ開キタリ

皇室財政ハ斯ノ如クニシテ舊來ノ積弊ヲ一掃シ皇室一切ノ需用品ニ對シテモ舊時ト異ル所ナク其ノ供給ヲ潤澤ニシ宮殿ノ修築、乘御物ノ設備等ニ關シテハ巨費ヲ投シテ之カ改善ヲ遂行シ其ノ他解職者ニ對スル賜金、動植物園及博物館ノ新設等財政經理ノ正確ナ期スルト同時ニ皇室費ヲ有益ニ支出スルノ途ヲ開キタリ

皇室費額ハ明治三十八年ニ於テハ七十二萬餘圓ニ過キサリシモ統監府設置ノ後其ノ注意ニ依リ皇室ノ尊嚴ヲ保持セシムカ爲メ三十九年百三十萬圓ニ、四十年百四十一萬餘圓ニ、四十一年更ニ之ヲ百五十萬圓ニ増加シ以テ恒久ノ定額トナセリ

隆熙二年度即ナ明治四十一年ニ於ケル皇室費歲入決算額ハ皇室費定額百五十萬圓、現金及株金利子五萬二千餘圓、雜收入三千餘圓及帝室財產整理ノ結果トシテ臨時ニ得タル收入百八十八萬八千餘圓等總計三百四十四萬四千餘圓ニシテ同年度歲出決算額ハ經常部、宫廷費四十九萬六千餘圓、德壽宮費(太皇帝身邊ノ費用)三十三萬七千餘圓、宮內府費六十萬六千餘圓其ノ他享祀費等合計百六十三萬九千餘圓、臨時部、陶汰員一時賜金二十七萬九千餘圓、宮殿改築費、動植物園、博物館設備費等合計九十萬四千餘圓、此ノ歲出決算額總計二百五十四萬三千餘圓ナリトス

第四章 中央行政

第一節 内閣ノ更迭

李完用ヲ首相トセル現内閣ハ明治四十一年六月六日ヲ以テ一部ノ小更迭ヲ爲シ内部大臣任善準度支部大臣ニ、度支部大臣高永喜法部大臣ニ、法部大臣趙重應農商工部大臣ニ、農商工部大臣宋秉畯内部大臣ニ交互其ノ職ヲ轉セリ尋テ同月十六日宮内府大臣李允用宮中顧問官ニ轉シ侍從院卿閔丙奭其ノ跡ヲ襲ヘリ。

現内閣ハ統監府設置後ニ於ケル第二次内閣ニシテ其ノ秉政期間ノ長キ韓國近代ニ於テ類例ナシ其ノ間前記ノ如キ一部小更迭アリト雖唯閣員交互ノ異動ニ止マリ内閣全體ノ首腦ハ何等ノ變動ヲ見スシテ將來ニ存續スルノ情勢ニ在リ是レ韓國政機ノ統一ヲ全ウシ施政改善ノ實績ヲ收メムトスルノ方針ニ副フモノナリトス。

第一節 中樞院

韓國中樞院ハ我樞密院ト其ノ制ヲ異ニシ皇帝ノ最高顧問機關ニ非ス内閣ノ

檢事局書記課

書記課

書記課

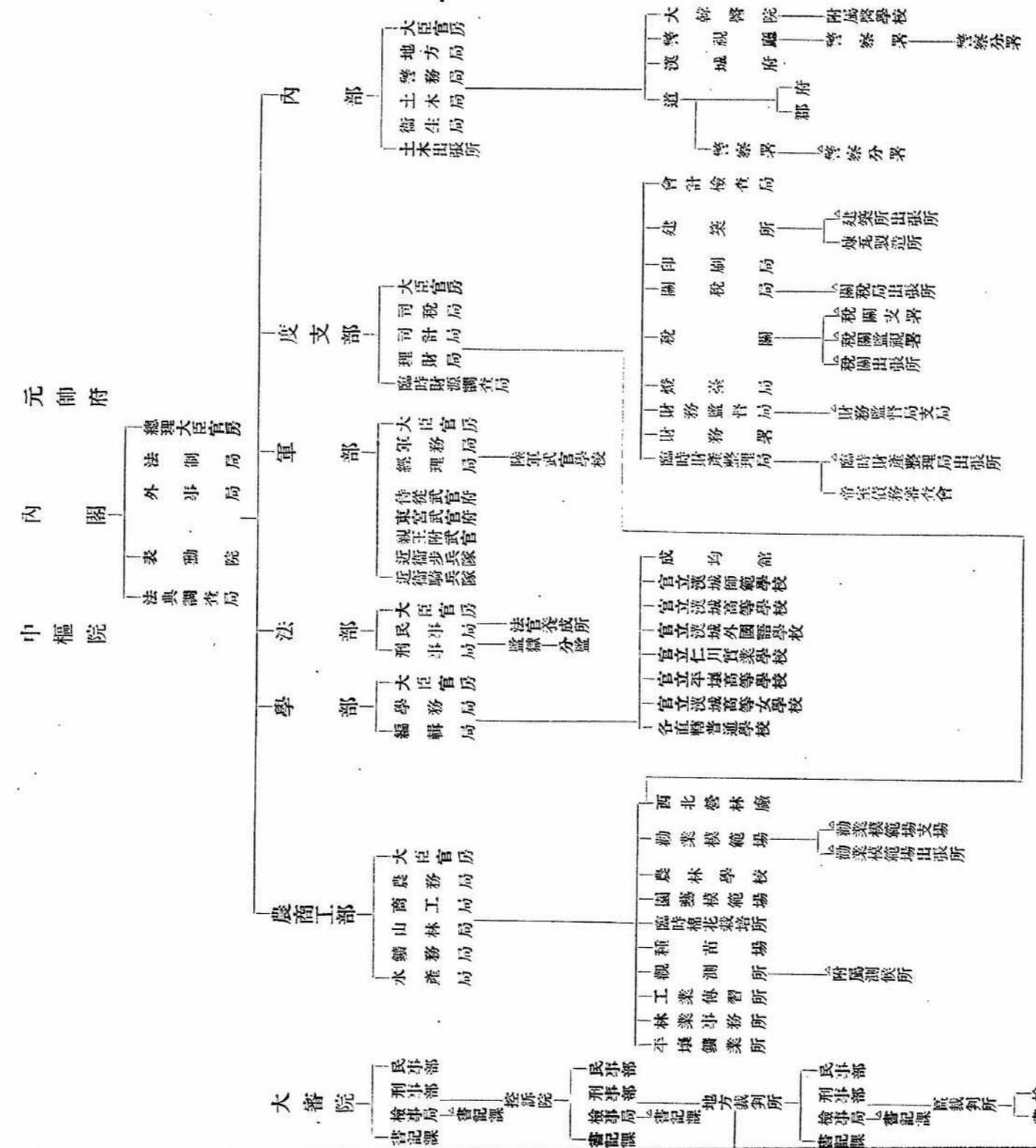
地方裁判所支部

園内ニ於テ設置スルコトヲ官制ニ於テ認タルモノトス

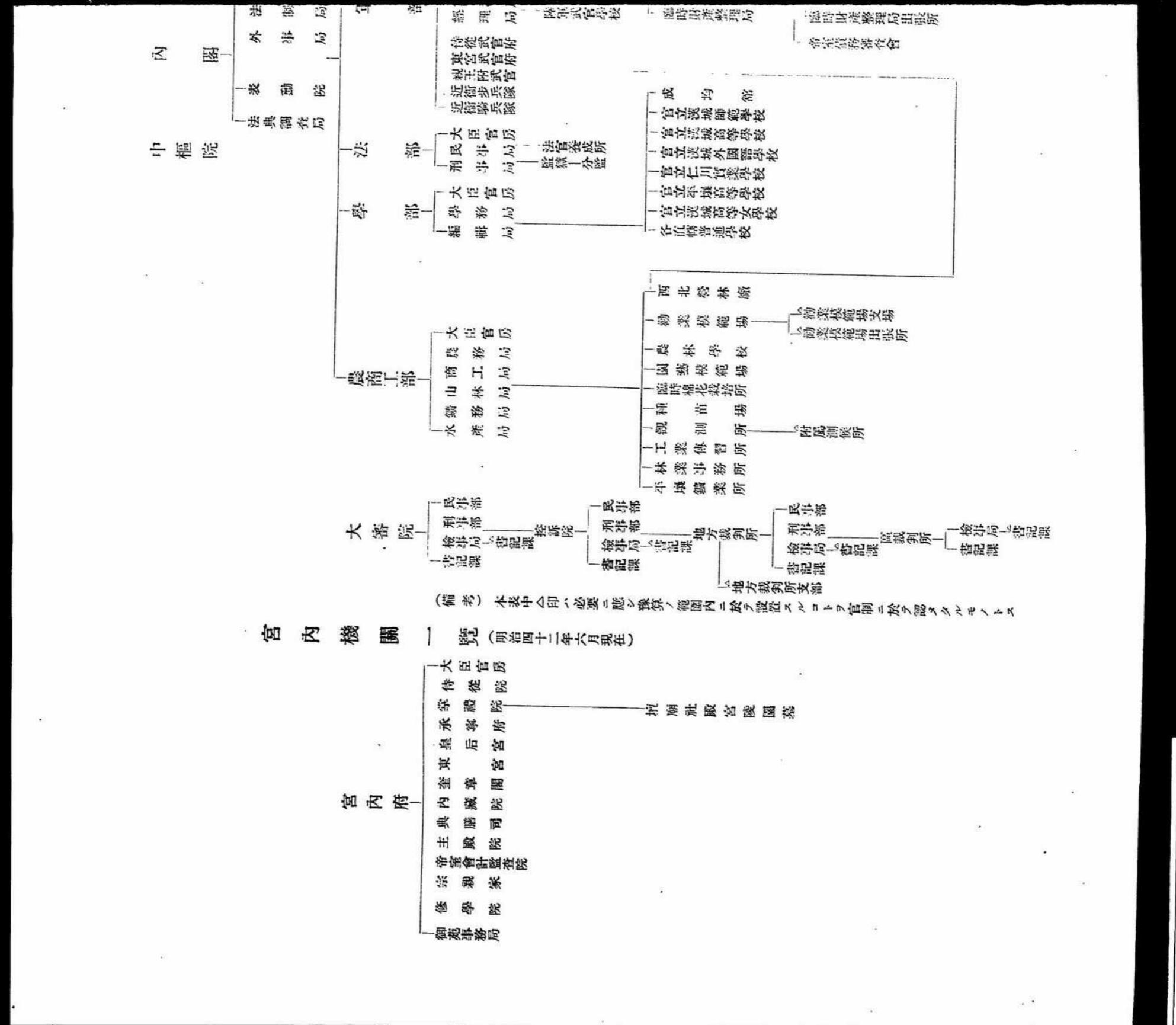
壯殿宮陵園墓

韓國政務機關一覽

(明治四十二年六月現在)



憲政廳



諮詢機關タルニ過キサルナリ明治四十一年中ニ於ケル同院職員ノ主ナル變動ナ歟スレハ四月同院議長徐正淳及同院副議長成岐運其ノ職ヲ去リ同月帝室會計監査院卿金允植同院議長ニ、修學院長申箕善同院副議長ニ任シ尋テ八月同院副議長申箕善其ノ職ヲ辭シ十二月李根湘之ニ代リ又同院顧問閔泳綺辭職シ其ノ他同院讚議一名副讚議五名更迭シ副讚議貳名減員セリ

第三節 文官任用令ノ改正

從來ノ文官任用令ハ不備ノ點少カラサルヲ以テ韓國政府ハ明治四十一年七月勅令ヲ以テ新ニ文官任用令ヲ公布シ十月更ニ勅令ヲ以テ之ニ多少ノ改正ヲ加ヘ以テ文官選敍ノ例規ヲ完整シ特ニ奏任文官ノ資格中ニ外國大學ニ於テ法律又ハ政治經濟ノ學科ヲ修了シテ其ノ卒業證書ヲ有スルモノ及内外國ノ政法專門學校ノ卒業證書ヲ有シ滿二年以上判任文官ノ職ニ在リ現ニ相當ノ俸給ヲ受クルモノノ二項ヲ加ヘ判任文官資格中ニ官立高等學校ト同等以上ト認ムル外國官公私立學校ノ卒業證書ヲ有スルモノノ一項ヲ加ヘ以テ外國特ニ日本ニ於テ新教育ヲ受ケタルモノヲ官途ニ任用スルノ途ヲ開キタリ

第四節 日本人任用

明治四十年日韓新協約第五條ノ規定ニ依リ韓國中央政廳並地方官署ニ聘用セラレタル日本人ハ四十一年末迄ニ於テ判任官以下ヲ除キ總計二千ヲ越エタリ今四十一年末現在聘用人員所屬別ヲ示サハ左ノ如シ

韓國政府聘用日本人官吏人員所屬別表

	高 等 官	判 任 官	合 計	
農 學 商 工	農 學 支 部	度 內 閣 府	宮 內 府	
	四 五 二 〇	一 八 七 〇	一 〇 二 〇	九 五 五 二
	一 六 二 〇	二 〇 六 〇	八 六 〇	二 七 八 〇
	二 〇 六 〇	三 九 三 〇	九 六 二 〇	三 七 三 一
				二 七 一 三

合 計

四六六

一六一四

二〇八〇

(備考) 各項人員中ニハ舊顧問部ヨリ轉借セラレタルモノヲモ含ム
各項人員ハ當該所屬官署在職ノモノヲモ含ム

第五章 地方行政

第一節 地方行政刷新ノ概要

明治四十一年ニ於ケル韓國地方行政各般ノ刷新ハ警察制度ノ改善ト共ニ主トシテ四十年ノ日韓新協約ニ基ク同年末ニ於ケル内部及地方官官制改正ノ趣旨ヲ紹述セルモノニシテ本年一月同改正官制實施ト共ニ韓國政府ハ各道書記官ニ日本人ヲ採用シテ之カ施設ノ衝ニ當ラシメ四、五兩月中逐次ニ道書記官會議及觀察使會議ヲ開催シテ地方施政ノ實況及之カ改善ノ綱目ヲ定メ地方政務刷新ノ趣旨ヲシテ一層緊切ニ徹底スル所アラシメタリ同年六月内部大臣ノ更迭ヲ行フヤ又觀察使ノ大更迭ヲ斷行シ同時ニ地方官吏ノ任用ニ關シ觀察使ノ權限ヲ擴張シテ其ノ責任ヲ重クシ且各道ニ警察部ヲ置キテ日本本人ヲ其ノ部長ニ任用シ著々地方行政並警察制度ニ關スル諸般ノ改革ヲ履行セリ

第二節 地方官會議ノ創設

地方官官制改正ノ結果明治四十一年一月一日各道書記官ニ日本人ヲ任用シ地方政治刷新ノ緒ヲ開キタルヲ以テ内部ハ四月二十七日各道書記官ヲ京城ニ召集シテ道書記官會議ヲ開キ各地方ノ狀態並各地方官執務ノ狀況ニ關シ直接ニ聽取諮詢セリ會議ハ土木、衛生、地方所在官有財產ノ種別及其ノ整理、地方稅則、稅制、勸業等ノ諸案件ニ就キ意見ヲ交換シテ討論研究シ五月九日ヲ以テ全ク之ヲ議了セリ越エテ十二日道書記官ハ一同韓國皇帝ニ謁見シテ優渥ナル勅語ヲ拜受シ同日午後統監官邸ニ収集シテ統監ノ訓示ヲ受ケ各自歸任ノ途ニ就ケリ

觀察使會議ハ各道書記官歸任ノ後ヲ俟ツテ直ニ之ヲ開催セリ是亦地方政務ノ實況並ニ之カ改善ニ關スル意見ヲ聽取諮詢スルヲ目的トセルモノニテ五月二十五日開會内部ヨリハ(一)地方行政組織ノ改善(二)政治ニ關スル各團體ノ現狀(三)地方稅賦課ノ得失(四)府尹郡守ノ任用法(五)暴徒歸順(六)沿道事業(七)種痘普及ノ方法(八)地方衛生狀態(九)會計法規ノ改善等ニ關スル諮詢事項ヲ提出シ其ノ他各部ヨリ各其ノ所管事項ニ關スル諮詢案ヲ提出シ逐日討議ノ後六月二日ヲ以テ閉會セリ其ノ閉會ニ先ナ統監ハ六月一日ヲ以テ特ニ各觀察使ヲ

其ノ官邸ニ召集シ地方政務ノ刷新殊ニ地方韓人ノ誤解冰釋ノ方法ニ關シ諸問スル所アリタリ其ノ會合ハ頗ル長時間ニ瓦リ夜ニ入りテ漸ク散會セリ越エラ五日統監ハ再ヒ各道觀察使ヲ召集シテ訓示ヲ與ヘタリ尋テ各道觀察使ノ更迭アルヤ同月十七日更ニ觀察使一同ヲ召集シテ將來ノ施政方針ヲ訓示シ同時ニ日韓提携ノ實ヲ舉タルノ急務タルヲ警告セラレタリ斯ノ如ク地方牧民官ヲ一時ニ中央政府ニ召集シテ會議ヲ開キタルハ韓國ニ在リテ未曾有ノ事ニ屬セリ各觀察使歸任後七月ニ至リ京畿、慶尙北、忠清南、全羅南、黃海、江原、平安北、咸鏡南ノ八觀察道ニ於テハ亦郡守會議ヲ開催シテ執務上諸般ノ訓示ヲ與ヘ且各郡守ノ意見ト各郡ノ狀況トヲ聽取セリ韓國ニ於テ郡守會議ヲ開キタルハ亦之ヲ以テ嚆矢トス

第三節 地方官會議ノ結果

道書記官及觀察使會議ノ結果トシテ地方施政ノ改善セラレ若ハセラレムトスル重要事項ヲ列舉セハ左ノ如シ

一、警視廳管轄區域ノ縮少

二、道警察部ノ設置

三、平安北忠清北兩觀察道ノ移轉

四、郡ノ廢合

五、府尹郡守會議ノ開催

六、郡守任用法ノ改正

七、地方判任官ノ進退ニ關スル規定ノ改正

八、面長職制及地方費法ノ制定(四十一年中ニハ發布ニ至ラス)

九、地方判任官定員ノ增加(同上)

十、日本官吏ノ地方廳配置(同上)

以上諸項中主ナルモノハ別項ニ於テ之ヲ説明ス

第四節 觀察使ノ更迭

明治四十一年六月韓國內閣小更迭ノ結果同月十一日ヲ以テ左ノ如ク觀察使ノ更迭ヲ行ヘリ

京畿道觀察使(舊轉任)金思默

慶尙北道觀察使(舊、轉任) 朴重
 慶尙南道觀察使(舊、轉任) 黃重
 平安北道觀察使(舊、留任) 柳赫
 咸鏡北道觀察使(舊、留任) 尹甲
 全羅北道觀察使(舊、留任) 李炳
 平安南道觀察使(新) 任 李斗
 全羅南道觀察使(新) 任 李範
 咸鏡南道觀察使(新) 任 李應
 忠淸北道觀察使(新) 任 雖
 忠淸南道觀察使(新) 任 崔鳳
 黄海道觀察使(新) 任 趙義
 江原道觀察使(新) 任 李圭
 恒道觀察使(新) 任 劍
 恒道觀察使(新) 任 龍
 恒道觀察使(新) 任 完
 同月十五日漢城府尹及各道觀察使ハ韓國皇帝ニ進謁セリ時ニ皇帝ハ維新ヲ
 國是トシ友邦ノ謀忠ニ賴ルノ趣旨ヲ體シ民心ノ誤解迷向ヲ轉スヘキ旨ノ勅
 語ヲ賜ハリタリ

第五節 地方官任用法ノ刷新

地方制度運用ノ中権タルヘキ地方官吏ノ任用方法ニ關シテハ從來適材舉用
 ノ趣旨ニ副ハサルモノアルニ由リ隆熙二年即ナ明治四十一年六月勅令第三
 十四、三十五、三十六及三十七號ヲ以テ之ヲ改正シ郡守ノ進退ニ就テハ從來內
 部大臣ニ於テ單ニ内閣總理大臣ヲ經テ上奏執行スルノ規定ナリシヲ爾後觀
 察使ノ稟申ニ依リテ之レカ手續ヲ爲スコトトシ又道府郡主事(日本人主事ヲ
 除ク)ノ進退ハ從來内部大臣之ヲ專行スルノ規定ナリシヲ道主事ニ就テハ觀
 察使之ヲ專行シ府郡主事ニ就テハ府尹郡守ノ稟申ニ依リテ觀察使之ヲ行フ
 ヨトトシ同時ニ郡守ハ觀察使カ其ノ管轄區域内ニ居住シ地方ノ情勢ニ通達
 シ品行端正ナル者ニ就キ適任ト認メテ推薦シタル者ノ中ヨリ之ヲ任用スル
 ヨトニ改正シ尙從來内部大臣ノ專行ニ屬シタリシ漢城府判任官(日本人判任
 官ヲ除ク)ノ進退ニ就テモ亦之ヲ漢城府尹ノ專行ニ委スルコトセリ
 右勅令ノ施行ニ因リ地方官廳ニ於ケル適材舉用ノ道大ニ開ケタリト雖郡守
 ノ選任ハ地方行政ノ運用ニ至大ノ關係ヲ有シ且其ノ適否ハ嚴密ナル審査ヲ

要スルヲ以テ同年十一月二十八日内部ニ地方官資格審査委員ナルモノヲ新設シ次官ヲ以テ委員長トシ内部高等官中ヨリ委員ヲ命シ其ノ審査決定ヲ經テ上奏ノ手續ヲ爲スコトトセリ

第六節 觀察道ノ移轉

平安北道觀察道所在地寧邊及忠清北道觀察道所在地忠州ハ皆其ノ位置僻偏ニシテ一道ノ中樞タルニ適セサルヲ以テ明治四十一年五月勅令ヲ以テ平安北道ニ於テハ之ヲ義州ニ、忠清北道ニ於テハ之ヲ清州ニ移轉スルコトトセリ

第七節 郡ノ廢合

從來各郡中區域狹小ニ失シ施政上之ヲ廢合スルヲ以テ便宜トスルモノアリ山ヲ各道ノ具申ヲ基礎トシテ之カ調査ヲ遂ケ明治四十一年九月ヨリ四十二

二月ニ至リ左ノ廢合ヲ施行セリ

京畿 楊根、砥平ノ二郡ヲ廢シテ楊平郡ヲ置ク

慶尙南道 鎮海、熊川ノ二郡ヲ廢シテ之ヲ昌原府ニ合ス

鎮南郡ヲ龍南郡ト改稱ス

全羅南道

(一)玉果郡ヲ廢シ潭陽郡ノ一部ト共ニ之ヲ昌平郡ニ合ス(二)和

順郡ヲ廢シテ綾州郡ニ合ス(三)樂安郡ヲ廢シ其ノ一部ヲ順天

郡ニ、他ノ一部ヲ寶城郡ニ合ス

平安南道

(一)三登郡ヲ廢シテ江東郡ニ合ス(二)慈山、殷山ノ二郡ヲ廢シテ

順川郡ニ合ス(三)咸從郡ヲ廢シテ之ヲ三分シ一部ヲ江西郡ニ

一部ヲ龍岡郡ニ、他ノ一部ハ順安郡ノ一部ト共ニ甑山郡ニ合

ス

黃海道 (一)康翎郡ヲ松禾郡ニ(二)長連郡ヲ殷栗郡ニ(三)文化郡ヲ信川郡ニ各廢合ス

第八節 地方費法ノ制定

韓國ニ於テハ從來地方自治體ヲ認メス從ツテ地方行政ニ要スル費用ハ地方各道ヨリ各府郡諸官廳ニ至ルマテ總テ國庫ヨリ其ノ支出ヲ仰ケリ而シテ此等ノ経費ハ年々增加ヲ爲シ明治三十八年四十一萬餘圓ヲ計上セシモノ三十

九年六十五萬餘圓、四十年七十七萬圓、四十一年百九萬餘圓ニ上レリ而カモ公
廢ノ經費地方公共費等ニシテ國庫ノ支辨ヲ受クル能ハサル地方政費ニ對シ
テハ郡守面長等ハ從來舊慣ニ依リ市場稅考ト債地稅附加稅戸籍債戸稅附加
稅旅閣稅浦口稅等ノ雜稅ヲ人民ニ賦課シテ其ノ用途ニ充當シタルヲ以テ之
ニ作フ弊害亦渺少ナラサルモノアリ由テ此等ノ雜稅ヲ整理シ且地方政費ノ
財源ニ資スル目的ヲ以テ地方費法ヲ制定スルノ必要ヲ認メ直ニ之カ準備ニ
著手シ四十二年其ノ調査ヲ完了シ同年四月法律ヲ以テ地方費法ノ發布ヲ見
ルニ至レリ

第九節 民籍

戸籍事務ハ從來府尹郡守ノ管掌スル所ナリシモ種々ノ弊害アリテ其ノ實績
ヲ舉クル能ハサリシヲ以テ四十一年一月内部官制改正ノ際之ヲ警察局ノ主
管ニ移シ同局内ニ民籍課ヲ置キ七月府尹郡守ノ手ヨリ之ヲ當該警察署長又
ハ同分署長ニ引繼カシメタリ民籍調査ノ方針ハ韓國國情及民度ノ現狀ニ鑑
ミ戸籍ト戸口調査ノ二者ヲ折衷シ先ツ戸主ヲ中心トシテ其ノ家族ノ關係ヲ

知ルニ止メ四十二年三月法律ヲ以テ民籍法ヲ公布シ四箇月間ノ豫定ヲ以テ
其ノ實查ニ著手セリ

第六章 國際事項

第一節 間島ニ於ケル對清交渉

清韓兩國間三十年來ノ懸案タリシ間島地方所屬問題ノ交渉ハ在北京帝國公使ニ於テ專ラ臨機折衝ノ任ニ膺リ我統監府ノ直接關與セサル所ナリト雖同地方在留韓人八萬有餘ノ救恤保護ノ事ニ至リテハ同地方所屬未定ノ故ナ以テ一日モ之ヲ忽諸ニ附スヘカラス是レ統監府派出所ノ設置セラレタル所以ナリトス然ルニ清國政府ハ始ヨリ自國領土主義ヲ以テ我ニ對シ我ノ派出所撤退ノ要求ニ應セサルヤ乃ナ同地ニ邊務公署ヲ設ケ十數箇所ニ其ノ派辦所ヲ置キ數次ニ四千以上ノ兵員巡警ヲ派駐シ加之清國ハ同地在留ノ韓人ヲ以テ清國民ト看做シ隨テ彼等ニ對スル裁判管轄權ヲ主張シ爲ニ種々ノ交渉案件ヲ惹起セリ之ニ對シ我派出所ニ於テハ常ニ所屬未定ノ主義ニ遵據シ現狀維持ノ方針ヲ確守シ在留韓民ノ裁判管轄權ニ關シテハ我ニ於テ嚴ニ之カ執行ニ任シ努メテ平和的態度ヲ保持シツツモ事有ル毎ニ清國官憲ノ反省ヲ促スコトヲ怠ラサリシカハ其ノ間幾多ノ小紛擾アリシニ拘ラス遂ニ能ク韓民

保護ノ目的ヲ全ウシ著大ナル危變ヲ惹起スルニ及ハスシテ懸案解決ノ彼岸ニ近接スルヲ得タリ

第二節 間島韓民ノ保護

初メ間島龍井村ニ於テ統監府派出所ノ設置セラルルヤ同所ハ保護警察施行ノ目的ヲ以テ同地新興坪、局子街、頭道溝外四箇所ニ逐次分遣所ヲ設ケ同所附近ノ邦人憲兵五十名韓人巡查十名中ヨリ適宜之ニ人員ヲ配置シ韓人中ヨリ村長、社長、都社長等ノ公吏ヲ選任シ以テ韓民綏撫ノ途ヲ開キ爾來或ハ模範農園ヲ設ケテ殖產ヲ獎勵シ或ハ郵便所ヲ設ケ或ハ學校病院ヲ興シ或ハ罹病者ノ施療、獸疫ノ豫防等ニ力ヲ致シ或ハ韓人ノ戶籍調査ヲ遂ケ在留韓人ノ犯罪者ハ之ヲ韓國內地ノ裁判所ニ送附シテ其ノ裁判ヲ受ケシメ韓人ヲ被告トスル民事上ノ訴ヲ爲スモノアラハ成ルヘク勸解ノ方針ニヨリテ紛議ヲ解決セシムル等只管韓民保護ノ實ヲ全ウスルニ努メタリ其ノ間事苟モ韓民ノ利權平安ニ危害ヲ及ボスカ如キモノアラハ事每ニ臨機適宜ノ措置ヲ執リ百方韓民ノ生命財產安固ノ道ヲ講シタルヲ以テ派出所存在期間ノ僅々二年三箇月

ノ日本ヲ出テサリシニ拘ラス韓民ハ悉ク派出所ニ信賴シテ其ノ生業ヲ樂ムニ至レリ因ニ同所附屬ノ病院ニ於テ同所撤廢迄ニ施療シタル患者ノ總數ハ一萬三千五百餘名ニ及ヒ之ヲ國別ニ分類セハ韓人一萬六百餘名清人千五百餘名邦人千三百餘佛人四名ナリトス

第三節 工業所有權及著作權保護條約

韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約ハ清國ニ於ケル關係各國商標相互保護ノ範圍ヲ韓國ニ擴張セムトスル米國政府ノ提議ニ基キ明治三十九年以來我帝國政府ト同政府トノ間ニ數次ノ交渉ヲ重ネタル結果明治四十一年五月十九日ヲ以テ調印成立ヲ見ルニ至リタルモノニシテ同年八月六日批准書ノ交換ヲ了シ十六日ヲ以テ實施セラレタリ

同條約ノ大意ハ帝國政府ハ發明、意匠、商標及著作權ニ關スル帝國現行諸法令ヲ韓國ニ施行シテ日韓米三國人ニ對シ均一ニ之ヲ適用シ同時ニ米國政府ハ韓國ニ於ケル前記四權ノ侵害ニ關シテハ合衆國ノ治外法權ヲ拠棄シテ韓國ニ於ケル日本國裁判所ノ裁判管轄權ヲ承認シ且同政府ハ韓國臣民ニ對シ合

衆國內ニ於テ前記四權ノ保護ヲ與フヘシト云フニ在リ而シテ該條約實施ノ結果右四權ノ侵害ニ關シテハ韓國臣民モ韓國内ニ於ケル我帝國裁判所ノ裁判管轄權ニ專屬スベキハ勿論ナリトスノ如ク米國カ右條約ノ締結ニ依リ進テ其ノ治外法權ノ一部ヲ拠棄セルハ韓國ニ於ケル各國ノ治外法權撤去ノ一楷梯ヲ爲スモノナリトス

右日米條約ノ成立スルヤ帝國政府ハ同年八月十二日條約ノ公布ト同時ニ勅令ヲ以テ韓國特許令以下關係諸法令ヲ公布シ統監府ハ右條約成立ノ旨ヲ韓國政府ニ通告シ同政府ヲシテ右條約批准書交換セラレタル旨及條約本文、韓國特許令以下關係諸法令、帝國現行特許法以下關係諸法ノ韓譯文ヲ告示セシメタリ

右條約ニ依リ韓國ニ於ケル工業所有權及著作權ノ保護ヲ當然享受スベキモノノ日韓米三國人ニ限ラルベキハ固ヨリ言フヲ須ヒ斯然レトモ我商標法第二條第三號ニ據レハ出願商標ニシテ世人ヲ欺瞞スルノ虞アルモノハ其ノ登録ヲ受クルヲ得サルノ規定ナルヲ以テ其ノ他ノ外國人ト雖此ノ點ニ於テ間接ノ利益ヲ享ケサルニアス然ルニ該條約ニ依ル前記權利ノ保護ヲ享ケサ

ル在韓外國人等ハ統監府特許局開廳ノ當時當局者ニ於テ偶韓國內ニ信用アル自己所用ノ商標ヲ模擬シタルモノノ登録出願ヲ受理シタルヲ見テ直ニ之ヲ許可スルモノトノ疑懼心ヲ懷キ甚シキハ當局者カ術策ヲ弄シテ強テ韓國ニ於ケル治外法權撤去ヲ促サムトスルモノナリトノ誤解ヲ懷クモノアルニ至リタルモ當局者ニ於テ前顯法規ノ趣旨ノ周知ニ努メ且其ノ後ニ於ケル處分ノ結果模擬商標ノ登録セラルコトナキ事實明白トナリタル爲彼等ノ誤解モ全然冰釋シ模擬商標ノ登録出願モ全ク其ノ跡ヲ絶ツニ至レリ尙在韓米國人ハ該條約實施ノ結果ニ就キ一般ニ満足セルノ狀アリ

第四節 元馬山露國租借地ノ買收

日露戰役ニ因リ韓露間租借約定自然廢止ニ歸シタル在馬山元露國海軍軍用租借地ニ關シ露國政府ヨリ同地及其ノ附近ニアル露人私有地ノ全部ヲ買收實費約五萬圓ニテ日本政府ニ賣渡シタキ旨在京城露國總領事ヲ經テ申込ミアリタルニ對シ統監ハ該地ノ海陸防備上我陸軍軍用地ニ編入ノ必要アルヲ認メ我外務及陸海軍大臣ト協議ヲ遂ケ好意ヲ以テ帝國政府ヨリ前記金額ヲ

支出スルヨトニ決シ明治四十二年四月十九日ヲ以テ統監及露國政府ノ任命セル兩國委員ノ間ニ右金額ノ授受ヲ了スルト共ニ露國政府ヨリ前記地所全部ヲ帝國政府ニ賣渡ス旨ノ約定ニ調印セリ

第七章 司法制度

第一節 裁判所

(一) 第一次ノ開廳

明治四十年十二月法律ヲ以テ公布セラレタル裁判所構成法、同施行法及同設置法ハ本年一月一日ヨリ施行セラレタリ該裁判所設置法ノ規定ニ依リ韓國各地ニ新設セラルヘキ裁判所ハ總數百二十五箇所ニシテ即チ大審院一、控訴院三、地方裁判所八、區裁判所百十三箇所ナリトス然ルニ是等ノ裁判所ノ全部ナ一時ニ開廳スルハ固ヨリ韓國財政及其ノ他ノ事情ノ許ササル所ナルヲ以テ之ヲ數次ニ分割設置スルコトトシ本年ニ於テ第一次ノ開廳ヲ爲スニ決シ之カ準備トシテ本年三月大審院長、檢事總長、京城控訴院長、京城控訴院檢事長京城地方裁判所長京城地方裁判所檢事長並ニ裁判所書記六人ヲ本邦人ヨリ聘用シ法部職員ト共ニ裁判所ノ開廳ニ必要ナル法令ノ編成、職員ノ選任其ノ他諸般ノ準備ニ關スル事務ヲ擔當處辨シ八月一日ニ至リ先ツ左記二十八箇所ノ裁判所ノ事務ヲ開始シ以テ第一次ノ開廳ヲ了セリ而シテ此等裁判所ノ

開廳ハ四十年七月日韓協約第三條實施ノ發端ニシテ韓國ニ於ケル司法權獨立ヲ嚆矢ナリトス

大審院	京	京	平	大	咸	公	海	元	忠	仁	川	原	鏡	城	咸	興	（京城控訴院管内）
控訴院			壤			州	州	山	州	州	州	州	城	（平壤控訴院管内）	（平壤控訴院管内）	（平壤控訴院管内）	（平壤控訴院管内）
地方裁判所				邱	州	邱	城		邱	州	邱	州	城	（京城地方裁判所管内）	（京城地方裁判所管内）	（京城地方裁判所管内）	（京城地方裁判所管内）
區裁判所					州	州	州			州	州	州	州	（平壤地方裁判所管内）	（平壤地方裁判所管内）	（平壤地方裁判所管内）	（平壤地方裁判所管内）
														（大邱地方裁判所管内）	（大邱地方裁判所管内）	（光州地方裁判所管内）	（光州地方裁判所管内）

(但シ前記ノ地名ハ直ナニ裁判所ノ名稱トナルモノトス)

前記ノ如ク區裁判所ハ全國ヲ通シテ百十三箇所ヲ置ク豫定ナリシモ四十一年十月樂安郡廢郡ノ結果樂安區裁判所ヲ設置セサルコトトナシタルニ因リ區裁判所設置ノ豫定總數一箇所ヲ減シ百十二箇所トナレリ

(二) 第二次ノ開廳

大審院、控訴院及地方裁判所ハ前項記載ノ如ク第一次ノ開廳ニ於テ既ニ豫定全部ノ開廳ヲ了シタルモ區裁判所ニ在リテハ尙未開廳ニ屬スルモノ九十六箇所ニ及フヲ以テ第一次ノ開廳ヲ終リタル後直ナニ第二次開廳ノ準備ニ着手セルモ廳舍ノ設備甚困難ニシテ一時ニ多數ノ開廳ヲ計畫スルヲ得サルヲ以テ第二次ニ於テハ左記二十四箇所ノ區裁判所ヲ開廳スルコトト爲シ四十二年一月以降逐次之レカ開廳ヲ了シタリ

區裁判所

開城	水原	春川
大田	洪州	清州
北青	津慶	興

(京城地方裁判所管内)
(公州地方裁判所管内)
(咸興地方裁判所管内)

鎮南浦	義州	龍川	寧邊	(平壤地方裁判所管内)
瑞興				(海州地方裁判所管内)
慶州	安東	尙州		(大邱地方裁判所管内)
蔚山	馬山	鎮南	居昌	(晋州地方裁判所管内)
群山	木浦	羅州		(光州地方裁判所管内)

(三) 地方裁判所支部ノ新設

韓國十三道中八箇所ノ地方裁判所アルバ其ノ數固ヨリ充分ナリト云フヲ得ス而カモ地方裁判所ノ増設ハ經費ニ限リアルヲ以テ先ツ急要地點ノ區裁判所内ニ地方裁判所支部ヲ設ケ殆ント地方裁判所ト同一ノ權限ヲ以テ事務ヲ取扱ハシムルコトトシ四十二年一月以後逐次左記八箇所ニ之ヲ開設セリ

仁川 春川 淸州 元山 鏡城 義州 釜山 全州

(四) 裁判所ノ成績

新裁判所ハ開廳日尙淺ク未タ以テ的確ニ其ノ成績ヲ表明スルコトヲ得スト雖從來ノ裁判所ニ於テハ動モスレハ裁判ヲ以テ不正ナ行フノ手段ト爲シタルニ反シ新裁判所ニ在リテハ誠實公平ナ旨トシ毫モ請託ヲ行フノ餘地ナカ

第七章 司法制度

四〇

ラシムルコトヲ務ムルヲ以テ漸次一般ノ信賴ヲ厚フスルノ傾向アリ今裁判所開廳後本年末ニ至ルマテ各裁判所ニ於テ受理シタル民事刑事ノ事件數ヲ舉クレハ左ノ如シ但シ大審院以外ノ各裁判所及檢事局ノ受理件數ニハ平理院其ノ他從來ノ裁判所ヨリ引繼ナ爲シタル事件ヲ包含ス

大審院 民事上告五十九件 刑事上告七十九件

三控訴院 民事控訴百九十九件 刑事控訴三百七十七件

八地方裁判所 民事千百六十七件 刑事一千三百二十二件

八地方裁判所檢事局 刑事二千五百五十八件

(五) 警察官ノ司法事務補助

區裁判所ノ開廳其ノ他裁判事務ノ擴張ニ伴ヒ檢事局ノ設置ナキ區裁判所ニ於ケル檢事事務ハ裁判所構成法ニ基キ警察署長タル警視、警部又ハ次席代理者ニ於テ之ヲ取扱ヒ又強制執行ニ伴フ執達吏事務モ亦警察官ニ於テ之ヲ取扱ヘリ

第二節 監 獄

(一) 監獄ノ開廳

監獄ハ各地方裁判所所在地ニ一箇所宛即ナ全國ヲ通シテ合計八箇所ヲ設置スルコトニ定メラレ本年一月一日監獄官制施行ト同時ニ先ツ從來内部ノ所管タリシ京城監獄ヲ法部ニ引繼キテ監獄事務ヲ開始シ其ノ他ノ監獄ハ所要法令ノ制定、獄舎ノ設備、職員ノ選任等ノ準備成ルヲ俟テ七月十六日ニ至リ左記七箇所ノ監獄事務ヲ開始セリ

平壤監獄 大邱監獄 咸興監獄 公州監獄

光州監獄 海州監獄 晉州監獄

此等監獄獄舎ハ韓國財政上急速ニ之ヲ新築スルコト能ハサルヲ以テ假ニ在來ノ獄舎ヲ改修充用シテ獄務ヲ執行スルコトト爲セリ但京城監獄ノミハ本年十月新築監獄ニ移轉シタレトモ設備尙不充分ナルニ由リ更ニ一箇所ノ新監獄ヲ京城ニ増築スルノ計畫ヲ爲セリ

前記八箇所ノ監獄ノミニテハ未タ以テ入監者ヲ收容スルニ足ラサルニ由リ地方裁判所支部設置ト同時に各支部所在地ニ一箇所宛監獄分監ヲ設置スルコトトシ其ノ地警察署ノ留置場ニ相當ノ設備ヲ加ヘテ之ニ充テ四十二年二

月以降逐次其ノ事務ヲ開始セリ

韓國現下ノ事情ハ監獄各般ノ事項ニ亘リテ急速ニ完全ナル改善ヲ爲スヲ得サルノミナラス其ノ改善ハ韓國良民生計ノ程度ニ相應セシムルノ必要アルヲ以テ監獄事務開始後ハ先ツ監房ノ清潔、監内ノ規律及囚人逃走ノ豫防等ヲ急務トシテ之カ設備ヲ爲シ其ノ他ノ事項ハ漸ナ逐フテ改善ニ着手スルコトトセリ

(二) 司獄事務ト警察事務ノ分離

監獄署新設ノ結果元ト警察署ニ附屬セシ舊監獄ハ總テ之ヲ留置場ニ變更シ地方裁判所々在地ハ明治四十一年七月ヨリ、地方裁判所支部所在地ハ同年十二月ヨリ孰レモ其ノ監獄事務ヲ警察官吏ノ手ヨリ分離シテ司獄官吏ノ管掌ニ移シタリ然レトモ未タ監獄署ハ監獄分監ヲ設クルニ至ラサル區裁判所所在地ニ在リテハ舊ノ如ク各警察署留置場ヲ以テ監獄ニ充用シ警察官吏ヲシテ監獄事務ヲ管掌セシメ刑期三箇月以下ノ犯罪者ニ對シテ刑ノ執行ヲ爲サシムルコトトセリ

第三節 法 制

(一) 法典調査

韓國法典調査ノ事業ハ明治四十一年一月ヲ以テ之ヲ開始シ主トシテ民法(商法ヲ含ム)刑法、民事訴訟法、刑事訴訟法及附屬法令ノ起案竝之、カ材料ノ調査ニ從事シ三月末民事訴訟法案ノ起草ヲ了ヘ八月委員會ニ於テ之ヲ議定セリ又民法編纂材料蒐集ノ目的ヲ以テ法典調査局ハ本年五月末ヨリ韓國各地ノ慣習調査ニ著手シ十二月末迄ニ京畿、忠淸南、忠淸北、慶尙南、慶尙北、全羅南、全羅北七道ノ調査ヲ了レリ尙同局ハ刑法及刑事訴訟法立案ノ目的ヲ以テ本年七月特ニ起草委員ヲ任命シテ其ノ起案ニ著手セリ

(二) 刑法大全ノ改正

韓國刑法大全ハ本年七月ヲ以テ改正セラレタリ其ノ改正ノ大綱ハ第一、法部大臣ニ於テ裁判ノ内容ニ涉リ指揮監督ヲ爲スカ如キ規定ヲ削除シ以テ司法権ノ獨立ヲ確保シ第二、法理上民法、民事訴訟法又ハ監獄則等ニ屬スヘキモノノ規定ヲ削除シテ刑罰法ノ範圍ヲ明確ナラシメタルニ在リ此ノ外舊法條ヲ

補正シ若ハ新ニ規定ヲ設ケタルモノノ主要ナルモノ左ノ如シ

第一、刑法大全中總則ノ規定ハ他ノ特別法規ニ依ル犯罪處罰上ニモ之カ適用ヲ爲スコト

第二、舊規定ニ於テハ一罪數罪ノ別ナ犯罪ノ種類ニ依リテ定メタルヲ改正シテ同一種ノ犯罪ト雖數回之ヲ犯シタルモノハ數犯者トシテ遇スルコト

第三、舊規定ニテハ酌量減刑ノ減等範圍ヲ一等又ハ二等ト規定セルヲ改正シテ一等乃至七等ニ擴張シ刑ノ裁量ニ十分ノ餘地ヲ與フルコト

第四、贖罪處分ノ範圍ヲ制限シ且贖罪金ノ率ヲ増額シタルコト

第五、保放ノ制ヲ廢シテ新ニ假放ノ制ヲ設ケ保放規則ニ在リテハ單ニ罪囚ノ事故ニ依リ臨時出獄セシムルノ制度ナリシヲ改正シテ罪囚ノ改悛ヲ期シ假ニ出獄ヲ許スコトト爲シタルコト

刑法大全改正ト同時ニ當然同法ノ規定内ニ屬スヘキ公貨欠逋人處斷例ハ之ヲ廢止セリ

(三) 法令ノ制定改正及廢止

裁判所ノ開廳監獄事務ノ開始其ノ他ノ事由ニ因リ創定、改正又ハ廢止セラレタル法令ニシテ明治四十一年中ニ公布ヲ了シタルモノ左ノ如シ	
一、法律ノ部	
民刑訴訟規則	四十一年七月
公貨欠逋人處斷例廢止	同上
裁判所構成法改正	同上
未開廳區裁判所事務處理ノ件	同上
刑法大全改正	同上
民事訴訟期限規則	同年十月
刑事裁判費用規則	同年十月
非訟事件手續規則	同年十月
裁判所設置法中改正	同年十一月
民事訴訟費用規則	同年十二月
裁判所設置法中改正	同年十二月
二、勅令ノ部	

第七章 司法制度

四六

土地家屋所有權證明規則 四十一年七月
已未決囚押送規則 同 上

及警察留置場ニテ行フ留置、拘留 同 上
及刑罰ノ執行ニ關スル件

判事檢事官等定員及俸給令 同 年八月
第二條改正

民事訴訟手數料規則 同 上

此ノ外部令十一件及訓令六件ノ公布アルモ今之ヲ略ス

(四) 辯護士法

韓國ニ於テ辯護士制度ヲ設ケタルハ明治三十八年十一月ノ公布ニ係ル辯護士法ヲ以テ嚆矢トス是ヨリ先キ二十八年四月ノ公布ニ係ル民刑訴訟ニ關スル規定中民事ニ就キ訴訟代理人ヲ認メタル規定ナキニ非サルモ刑事ニ就テハ全然代理人又ハ辯護人ノ出廷ヲ認メサルヲ以テ固ヨリ今日ノ所謂辯護士法ニ比スヘキモノニ非ス然ルニ四十年日韓新協約締結ノ結果韓國司法制度ノ革新漸次進捗メルニ從ヒ辯護士法モ亦改正ノ必要ヲ生シ隆熙三年即テ明治四十二年四月法律第十八號ヲ以テ同改正法ノ公布ヲ見ルニ至レリ
在韓本邦人ノ訴訟ニ關シテハ明治四十二年統監府令第九號ヲ以テ辯護士規則ヲ公布シ從來保安規則ニ依リ訴訟代理人トシテ理事官ノ許可ヲ受ケタル者ノ外純然タル辯護士法ニ依ル辯護士ヲ認ムルニ至レリ

第八章 警察

第一節 警視廳ノ官制改正

韓國警視廳ハ明治四十一年一月改正官制實施ノ際其ノ管轄區域ヲ京畿道全部ニ擴張シ皇宮、漢城府及京畿道ニ於ケル警察、消防及衛生事務ヲ掌理スルコトトナリシモ同年七月各道ニ警察部設置ノ結果同月勅令第四十八號ニ依リ更ニ其ノ官制ヲ改正シ同廳管轄區域ハ之ヲ漢城府ノミニ縮少シ其ノ定員ヲ總監、副監、外警視專任十人、警察醫專任二人、警部專任六十人ニ改メ京畿道ニ於ケル警察、消防及衛生ニ關スル事務ハ之ヲ京畿觀察道ニ移シタリ

第二節 各道警察部ノ設置

韓國政府ハ隆熙二年即テ明治四十一年七月勅令第四十九號ヲ以テ地方官々制ノ一部ヲ改正シ各道ニ内務部及警察部ヲ置クコトトセリ警察部長ハ觀察使ヲ補佐シ部下ノ官吏ヲ指揮監督シテ警察、衛生、民籍、移民ニ關スル事項ヲ管掌スルヲ以テ其ノ職務トセリ而シテ各警察部長ニハ當時現在ノ警視中ヨリ

適任者ヲ選擇任用シ以テ地方警察ノ監督機關ヲ完備セシメタリ各警察部配置人員ハ部長ノ外日本人警部一名、日本人巡查三名、韓人巡查二名トシ尙警察部兼警察部所在地警察署勤務トシテ韓人警視一名ヲ配置セリ

第三節 警務上歩調ノ統一

明治四十一年一月地方警察制度革新ニ際シテハ諸般ノ施設並秩序ノ回復ニ關シテ各道ノ歩調ヲ統一シ舉措機宜ヲ失ハサラシムルノ必要ヨリ觀察使ニ内訓ヲ與ヘ警務局長直接ニ地方警察官ヲ指揮スルコトシ爾來引續キ之ヲ實行シ來リシモ地方警察ノ施設漸ク其ノ緒ニ就キ且各道警察部設置ノ結果其ノ監督機關モ亦備ハリタルヲ以テ同年七月前記内訓ヲ廢シ警務局長ハ民心ノ動搖、匪徒ノ出沒其ノ他國事ニ關スル緊急ノ場合ニ於テノミ特ニ警察部長又ハ警察署長ヲ指揮スルコトニ改メ同時ニ巡查ノ道内配置、日韓人巡查ノ賞與、韓人巡查ノ懲罰等各道ニ於テ處理スルヲ便宜トスル事項ヲ觀察使ノ權限ニ委シ適宜攝行セシムルコトセリ

第四節 警察部長及警察署長會議

地方官官制改正ノ趣旨及新警察制度施行ニ關スル將來ノ方針ヲ訓示シ警務上施設改善ヲ要スヘキ諸般ノ事項ヲ指示スル爲内部警務局ニ於テハ四十一年八月三日ヨリ同月八日マテ警察部長會議ヲ開催シ同會議ニ於テ訓示及指示シタル事項ハ各道ニ於テ亦警察署長會議並郡守會議ヲ開キテ之ヲ傳達シ各警察署長ハ更ニ之ヲ管下ノ巡査ニ示達シタリ尙警務局長、警視、各道警察部長等ハ各地方ヲ巡視シテ地方警察事務改善ノ督勵ヲ圖レリ

第五節 警察官ノ任用

日韓警察合一以來韓國政府ニ於テハ警察事務刷新上警察官ノ選擇ニ最モ慎重ナル注意ヲ加ヘ内部新官制實施後多數ノ淘汰ヲ行ヒ警部ノ採用ハ四十年七月ヨリ試驗委員ヲ置キ試驗ノ成績優良ナル者ニ就キ更ニ慎重ナル考查ヲ經テ之ヲ任用スルコトトシ又巡査ノ採用ニ就テハ四十年十二月官制改正ト同時ニ巡査採用規則ヲ改正シテ四十一年一月ヨリ之ヲ實施シ學術體格ノ

試験、身元志操、實務等ノ考查ヲ一層嚴密ニシ韓國警察ニ特殊ナル訓練ヲ加フルコトトシ其ノ任免ノ手續ニ關シテモ各道日本人巡査ノ任免ハ内部之ヲ行ヒ韓人巡査ノ任免ハ所屬警察署長ノ稟申ニ依リ觀察使之ヲ攝行シ警視廳巡查ハ日韓人共ニ同廳之ヲ任免スルコトトセリ

第六節 警察機關ノ配置

明治四十一年一月改正官制實施ノ際ニ於ケル全國各道警察官署ノ總數ハ警察署二十八、同分署四十三、巡查駐在所三百三十七箇所ナリシモ清津開港ノ結果同年七月一日ヨリ同港ニ警察署ヲ新設シ又忠清北道及平安北道兩觀察道移轉ノ爲忠清北道ニ在リテハ忠州警察署ナ分署ニ、清州警察分署ヲ警察署ニ變更シ又平安北道ニ在リテハ新義州警察署ヲ分署トナシ同時ニ義州ニ警察署ヲ新設シ其ノ他巡查駐在所一箇所ヲ増設スルコトトシ即日之ヲ實施セリ其ノ結果警察署、警察分署及巡查駐在所ハ各一箇所ノ增加ヲ見タリ然ルニ同月末警視廳管轄區域ノ縮少、各道警察部ノ設置ニ依リ道ニ於ケル警察監督ノ機關備ハレルニ至リタルヲ以テ各道ノ警察分署ハ平安北道ノ龍巖浦分署ヲ

第八章 警察

五一

除クノ外總テ獨立ノ警察署ニ改メタリ今四十一年未現在ニ依リ警察官署及
巡查駐在所總數管轄別警察官配置定員並各道別巡查配置人員ヲ表示セハ左
ノ如シ

各道警務廳道局	管轄廳	管轄廳警察署	管轄廳警察分署	巡查駐在所
警官配置定員表	日人韓	日人韓	日人韓	日人
計	二九六一八五	七四三一	一三五二六八九一〇	七〇
各道	六三	六三	六三	六三
警視	一九	一九	一九	一九
務	一九	一九	一九	一九
廳	一九	一九	一九	一九
局	一九	一九	一九	一九

各道別巡查配置人員表

道名	巡	人	韓	查	人
京					
忠					
忠					
慶					
慶					
全					
全					
江					
江					
咸					
咸					
平					
平					
平					
安					
安					
鏡					
鏡					
尚					
尚					
羅					
羅					
清					
清					
原					
海					
南北					
南北					
南北					
北南					
北南					
南北					
道					
道					
道					
道					
道					
道					
道					
道					
道					
義					

右ノ外定員外トシテ韓人警視二人同警部二人及同巡查三十八人ヲ間島ニ配置シテ統監府臨時間島派出所長ノ指揮ニ屬セシメ又度支部ノ要求ニ依リ本年七月以降日本人警部巡查ヲ隨時開城紅蓼製造所及同蓼圃ニ配置セリ

第七節 郵便ノ護衛及官民ノ保護

郵便物ノ護衛ハ從來守備隊ニ於テ專ラ之ヲ擔任セシモ同隊各部隊ノ集中撤廢等ニ因リ四十一年九月ヨリ守備隊憲兵及警察官ニ於テ分擔スルコトナリ其ノ擔當區域ヲ協定セリ又地方ヲ旅行スル官民ノ要請ニ依リ其ノ都度憲兵及警察官ニ於テ出來得ル限り相當ノ保護ヲ與ヘタリ

第九章 治安

第一節 暴徒

(一) 暴徒ノ狀況

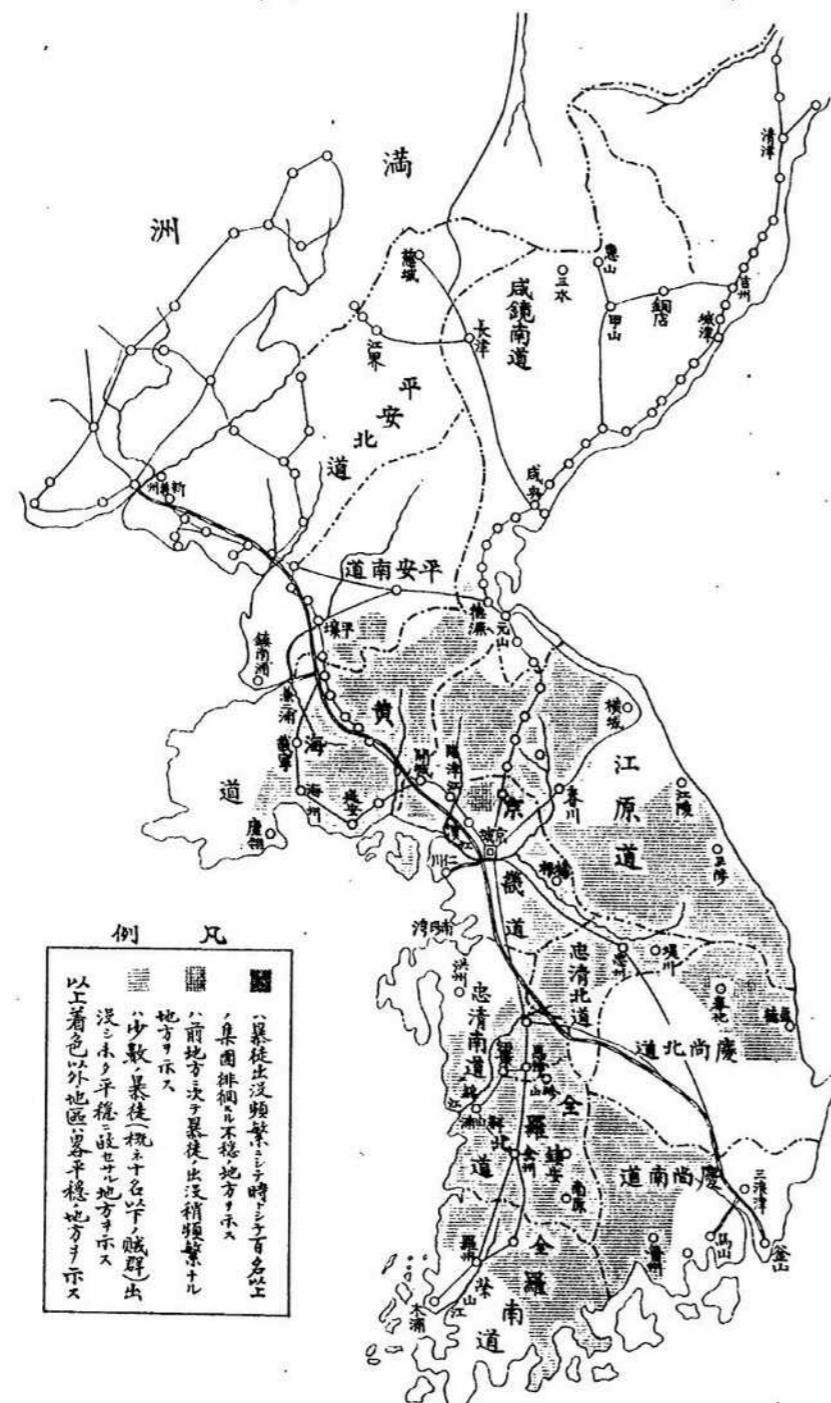
明治四十一年初頭ニ於ケル暴徒ノ情勢ハ歸順勸獎、討伐勵行ノ結果各地共比較的靜穩ノ狀況ヲ持續シ數名若ハ數十名ノ小團ハ依然隱顯出沒スルモノアルモ五六十名以上ノ大集團ニ至リテハ咸鏡南道甲山、長津地方及全羅南道光州、咸平、長城地方ノ外殆ト其ノ出現ヲ見ス二三月ノ交ニハ長城首魁李進士、甲山首魁車道善等相次テ歸順シ全北首魁奇三衍、江原道總魁閔肯鎬等ハ銃殺又ハ生擒セラレ賊勢更ニ一頓挫ナ來セリ四五月ノ交ニハ形勢稍變シ百名乃至四百名ノ賊群咸鏡南道文川、高原、平安北道厚昌、江界、平安南道祥原、黃海道延安、全羅北道茂長、江原道蔚珍等ノ各地ニ出動シ何レモ直ニ擊摧セラレタリト雖爲ニ一時各地賊勢ノ再燃ヲ見ムトスルノ虞アルニ至レリ此ノ時ニ當リ義ニ本邦ヨリ増派セラレタル千百餘名ノ憲兵ハ既ニ要所ニ配置セラレ且我各鎮壓機關ハ互ニ協力シテ賊徒ノ巢窟ニ對シ嚴峻ナル大討伐ヲ加ヘタルニ因リ

第九章 治 安

五六

匪徒ノ集團忽々潰滅シテ賊魁以下斃死スルモノ算ナク六七月以來賊徒ハ一層其ノ氣勢ヲ失墜シ許焉、李康年以下約三十名ノ匪魁陸續縛ニ就キ歸順スル者亦少カラズ是ニ於テ彼ノ江原道慶尙北道、忠清北道ノ如キ賊勢一時猖獗ナ極メタリシ地方モ漸々追フテ鎮靜シ平安南北道、黃海道ノ如キ其ノ一部ニ稀ニ草賊ノ出現ヲ見ルニ止マリ咸鏡兩道ハ一部ニ著名ノ匪魁ナキニアラサルモ其ノ部下何レモ少數微力ニシテ亦我警備ヲ侵スニ至ラス唯全羅南北兩道ニ在リテハ賊勢未だ減退セス穀類ノ收納期ニ際シ再燃ノ傾向ヲ示シ餘響延テ隣接忠淸南道ニ及ヒタルモ是亦財物掠奪ヲ旨トセル強盜的集團カ警備ノ間隙ニ乘シテ掠奪ヲ行ハムトスルニ過キサルナ以テ當局者ハ之ニ對シ一層其ノ警戒ヲ嚴密ニシ其ノ被害ヲ少カラシメタリ之ヲ要スルニ四十一年末ハ京畿、全羅ノ一部ヲ除クノ外ハ概シテ鎮靜ニ赴キ暴徒ノ性質モ概不財物掠奪ヲ旨トスル韓國古來ノ草賊ニ變シ遠ク山間溪谷ニ隱潜シテ纔ニ其ノ餘喘ヲ保ツニ過ギカリキ暴徒ノ状勢ハ斯クノ如クニシテ四十一年ヨリ四十二年ニ推移シ益沈靜ノ状況ヲ呈シ同年秋季南韓暴徒大掃蕩ヲ勵行スルヤ全羅兩道モ賊匪殆ント勤滅シ京畿道ニ於ケル永平楊州間ノ一局部及慶尙北道ニ於ケ

明治二十四年十月賊勢圖



ル順興英陽間ノ一局部ニ匪徒ノ出現スルヲ見ルノ外ハ全羅北道、全羅南道、北半部及其ノ隣接地域並京畿道東北部、江原道西半部、黃海道東半部ニ瓦ル地區二十名以下ノ賊群カ稀ニ出没スルノミニシテ一般ニ平穏ニ復シタリ

(二) 暴徒ノ歸順

明治四十年末歸順者免罪ノ詔勅公布以來暴徒ニ對スル歸順ノ勸奨ハ成績頗ル良好ニシテ歸順者日ニ多キナ加ヘ四十一年三月咸鏡南道甲山地方ノ匪魁車道善ノ如キモ部下二百名ト共ニ歸順シ八月末ニ於テハ歸順者ノ數六千ヲ越エタリ然ルニ暴徒ニ對スル警備機關ノ整備ト共ニ各地ノ賊情概シテ鎮靜ニ赴キタルヲ以テ韓國政府ハ同年同月詔勅ヲ以テ歸順者免罪ノ期限ヲ同年十月三十一日限ト定メ宣諭委員警察官、憲兵等ヲシテ特ニ限内歸順ヲ督勵セシメタルニ歸順者踵ナ接シテ續出シ遂ニ歸順恩典廢止ニ至ル迄ノ歸順者累計八千七百餘名ノ多キニ達セリ政府ハ此等歸順者ニ對シ道路改築工事ヲ起ス等之ニ生計ヲ授ケ正業ニ導クノ方法ヲ講シタルヲ以テ歸順者ニシテ再ヒ賊徒ニ投シ又ハ所在不明トナリタル者ハ極メテ僅少ニシテ其ノ大部分ハ皆正業ニ就キ成績頗ル良好ナリ

(三) 暴徒ノ損害

明治四十年七月暴徒蜂起以來四十一年末ニ至ル憲兵及警察官ノ損害ハ戰死、日本人百二十七名韓人五十二名負傷日本人二百五十二名韓人二十五名合計四百五十六名ニシテ暴徒ノ爲損害ヲ被ムリタル者ノ中其ノ被害ノ甚大ナルモノニ對シテハ韓國皇室ヨリ特ニ慰恤ノ目的ヲ以テ死者一人ニ付金拾圓、被燒戸一戸ニ付金拾貳圓ノ割合ヲ以テ恩賜金ヲ下附セラルユトナリ四十一年中死者韓國人千二百五十九名日本人百二十五名清國人一名及被燒戸數六千六百八十一戸ニ對シ合計金九萬四千二十二圓ヲ關係者ニ交付セリ

第二節 暴徒討伐機關ノ統一

韓國駐劄軍、憲兵隊及警察官憲ハ從來暴徒討伐ニ關シ其ノ步調ヲ一ニシテ各之カ進捗ニ盡瘁シツツアリタルモ尙指揮命令ヲ統一シ其ノ運用ヲ全ウスルカ爲メ明治四十一年五月ヨリ暴徒討伐ニ關スル事務ハ總テ軍司令官ニ於テ之ヲ統轄シ軍隊、憲兵隊、警察官ハ均シク其ノ節制ヲ受クルユトシ各方面ノ

情報モ一切之ヲ軍司令部ニ纏メ各機關ノ委員時々會合協議シテ諸般ノ方針ヲ決定シ討伐ノ事ハ主トシテ守備隊及憲兵隊之ニ任シ警察官ハ緊急ノ場合ノ外專ラ偵察招撫ニ力ナ盡スコトセリ

第三節 憲 兵

(二) 憲兵ノ配置

我韓國駐劄憲兵隊ハ明治四十一年三月釜山分隊ヲ廢シテ大邱分隊ヲ置キ同年七月韓人憲兵補助員配屬ノ結果其ノ分遣所數ヲ二倍以上ニ増加シ其ノ配置ヲ改メ六分隊(京城、平壤、天安、大邱、榮山浦、咸興)三十九管區、四百四十一分遣所九派遣所及間島ニ於ケル一分隊、十分遣所トナシ四十二年一月更ニ管區以下ノ配置ヲ改メ管區五十一、分遣所四百四十二、派遣所十三(間島ヲ除クトシ尋テ同年四月以降暴徒勦討ノ必要上榮山浦、天安兩分隊管下ニ逐次三十六箇所ノ臨時派遣所ヲ設置セリ間島分隊ニ於テハ同年七月新ニ四箇ノ派遣所ヲ設置セリ憲兵隊所屬兵員ハ四十一年末現在憲兵將校以下二千三百四十七名、憲兵補助員四千二百三十四名、四十二年六月末現在憲兵將校以下二千三百八十名

憲兵補助員四千三百九名ナリトス

(二) 憲兵補助員

韓國憲兵補助員ハ韓國政府カ木年六月勅令ニ依リ暴徒ノ鎮壓及安寧秩序維持ノ目的ヲ以テ創設シ之ヲ我カ韓國駐劄憲兵隊ニ委托シ其ノ指揮ノ下ニ憲兵ノ勤務ヲ幫助セシムルモノナリ憲兵補助員ニ關スル諸般ノ規則ハ我駐劄憲兵隊長之ヲ定ムルコトト爲レリ憲兵補助員ノ定員ハ之ヲ約四千人トシ主トシテ前年ノ解隊兵中ヨリ募集シ同年八月迄ニ全部ノ選拔採用ナリセリ此等補助員ハ日本憲兵一名ニ對シ二名乃至三名宛配屬シ其ノ指導監督ノ下ニ暴徒ノ搜索民情ノ偵察等諸般ノ任務ニ服スルモノニシテ其ノ成績概シテ好良ナリト認メラル

第四節 警備電話線ノ架設

韓國政府ハ暴徒鎮壓上警備機關ノ連絡ヲ敏活ナラシムカ爲電信未設地方中必要ノ箇所ニ逐次警備電話線架設ノ計畫ヲ立テ明治四十一年五月經費豫算額二十八萬五千圓ヲ支出シ之カ建設維持ニ關スル一切ノ事務ヲ統監府通

第五節 新聞紙ノ取締

信管理局ニ委託シ四十二年三月末迄ニ瓦長五百六十八里延長七百九十三里ノ架設ナリシ暴徒討伐上多大ノ效果ヲ奏シタリ

從來ノ韓國新聞紙法ハ外國ニ於テ韓人ノ發行スル新聞紙及韓國內ニ於テ外國人ノ發行スル新聞紙ノ取締ニ關スル規定ヲ闕ケルヲ以テ韓國政府ハ明治四十一年四月法律ヲ以テ新聞紙法中ニ改正ヲ加ヘ外國ニ於テ發行スル諺文或ハ漢諺文又ハ漢文ノ新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壞亂スルモノアリト認ムルトキハ内部大臣ハ該新聞紙ノ韓國內ニ於ケル發賣頒布ヲ禁止シ且之ヲ押收スルヲ得ルノ規定及之ニ附隨スル二三ノ條項ヲ追加セリ從來其ノ取締ノ必要ヲ認メタル米國桑港ニ於テ發行スル共立新報、大同公報、布哇^{ボノルル}ニ於テ發行スル合成新報、露國浦鹽斯德ニ於テ發行スル海潮新聞及京城ニ於テ發行スル英國人經營ノ大韓每日申報等ニ就テハ爾後其ノ記事治安ヲ妨害スルモノト認メタル時ハ嚴重ニ差押ノ處分ヲ執行スルコトヲ得之カ爲

第九章 治安

此等新聞紙モ稍其ノ鋒銳ヲ收ムルニ至レリ其ノ本年中ニ於ケル差押度數及押收紙數ヲ舉クレハ左ノ如シ

發賣額布ヲ禁シタル度數 同上押收紙數	大韓每日申報			共立新報	合成新報	海潮新報	大同公報	計
	諺文	漢諺文	五					
四九三三八	一九	二〇	二〇	二〇	三	六五	二四七〇六	六五

第六節 結社取締

韓國ニ於ケル政治ニ關スル結社中大同會ハ其ノ役員概々無賴ノ徒ヨリ成り治安ヲ妨害スルノ行動アルヲ以テ韓國政府ハ明治四十一年十月之カ解散ナ命シ其ノ他ノ政治的結社ニ對シテハ四十年七月公布ノ保安法ニ依リテ嚴重ニ之ヲ取締レリ又學會ト稱シ名ヲ教育ニ藉リテ政治ノ運動ヲ爲ス團體ニ對シテハ別項記載ノ如ク學會令ノ公布ニ依リ適當ノ取締ヲ爲セリ

第十章 財政

第一節 歲計

(一) 隆熙三年度豫算

隆熙三年度即ニ明治四十二年豫算ハ追加豫算ヲ合シ歲入總額二千六百三十八萬餘圓、歲出總額二千六百三十三萬餘圓、差引四萬七千餘圓ノ歲入超過ヲ示セリ之ヲ前年度ノ歲入出豫算ニ比較スルニ其ノ各增減ノ差左ノ如シ

年次	歲部	入		歲部	出(△印へ減)		歲部	出
		經常部	臨時部		經常部	臨時部		
隆熙三年度	二五五四〇三	一一三三二四	二二三五六四	二二三五二四	二二三五六四	二二三五二四	二二三五二四	二二三五二四
同二年	一七四五〇五六	一七四一〇三七	九八五二八九	一三六八三五三	一三三三三三六	一三三三三三六	一三三三三三六	一三三三三三六
比較增減								

(備考)兩年度共追加豫算ヲ合ム而シテ三年度豫算ハ同年五月末日現在額ヲ示ス以下同シ

隆熙三年度豫算ニ於ケル歲入ノ種類別ヲ舉クレハ經常部租稅收入千百三十三萬餘圓、印紙收入二十三萬餘圓、驛屯賭收入百三十七萬餘圓、官業及官有財產收入九十四萬餘圓、雜收入百二十五萬餘圓ニシテ臨時部日本政府借入金同年

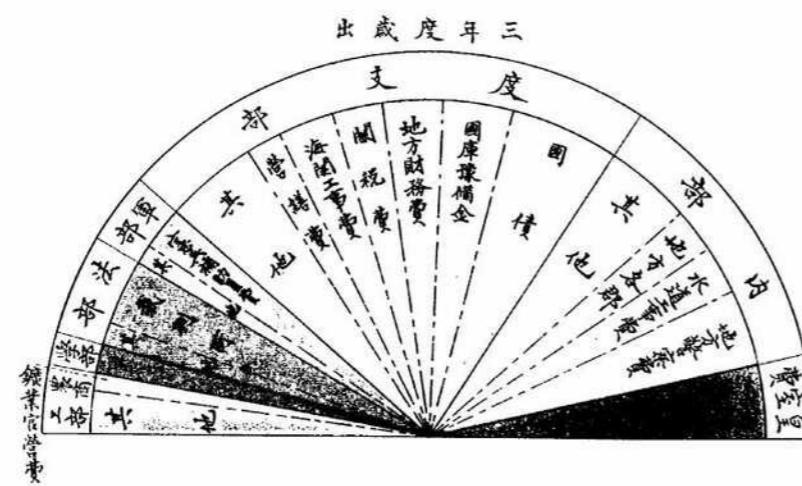
度年割額ノ外縁入金四百十六萬餘圓、公債金繰替二百萬圓、前年度編入金四十萬餘圓等ナリ又同上歲出種類別ヲ舉クレハ皇室費百五十萬圓、國債費四百三十二萬餘圓、行政費千九百二十・萬餘圓(内經常費千二百二萬餘圓、臨時費七百十九萬餘圓)軍事費百三十萬餘圓(内經常費三十二萬餘圓、臨時費即ナ憲兵補助員費九十七萬餘圓等ナリトス)

隆熙三年度歲入豫算增加ノ重ナル事由ハ經常部ニ在リテハ租稅收入ニ於テ稅率低減ニ基ツク地稅ノ減收ト既往年度未納稅收入ヲ豫算セサルトニ因ル減少アルニ拘ラス關稅戶稅鑛稅及雜稅ノ增收並追加豫算ニ於ケル家屋稅、酒稅及煙草稅ノ新稅收入ノ計上ニ因リ差引八十一萬圓ノ增加ナ見、官業及國有財產收入ニ於テハ營業衰退ニ因ル二十二萬餘圓ノ減收アルモ印紙收入驛屯土收入、雜收入ニ於テ合計百十五萬圓ノ增收ヲ計上シタルニ由ル臨時部ニ在リテハ日本政府借入金年割額ノ減少アルニ拘ラス繰入金二十五萬圓ヲ增加シ追加豫算ニ依リ新ニ公債金繰替二百萬圓及前年度編入金四十一萬餘圓ヲ編入シタルニ由ル

歲出增加ハ主トシテ經常部ニ在リテ存シ臨時部ニ於テハ却テ減少ナ見タリ

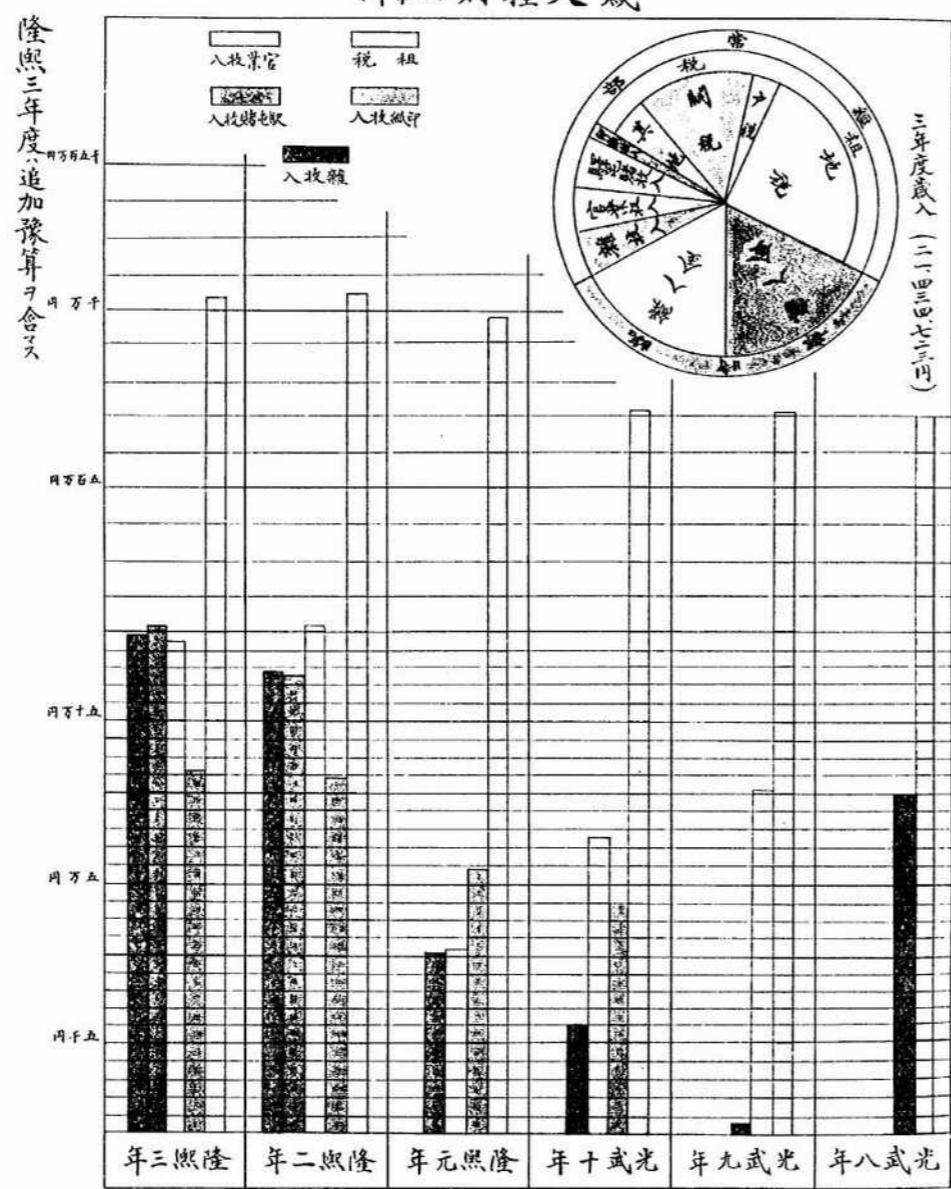
歲出		歲入	
年度		年度	
光武年			
光武元年			
光武十年			
隆熙元年			
隆熙三年			
隆熙三年	三千萬 支票 千萬円	五千萬 支票 千萬円	三千萬 支票 千萬円

隆熙三年度追加豫算ヲ含マス



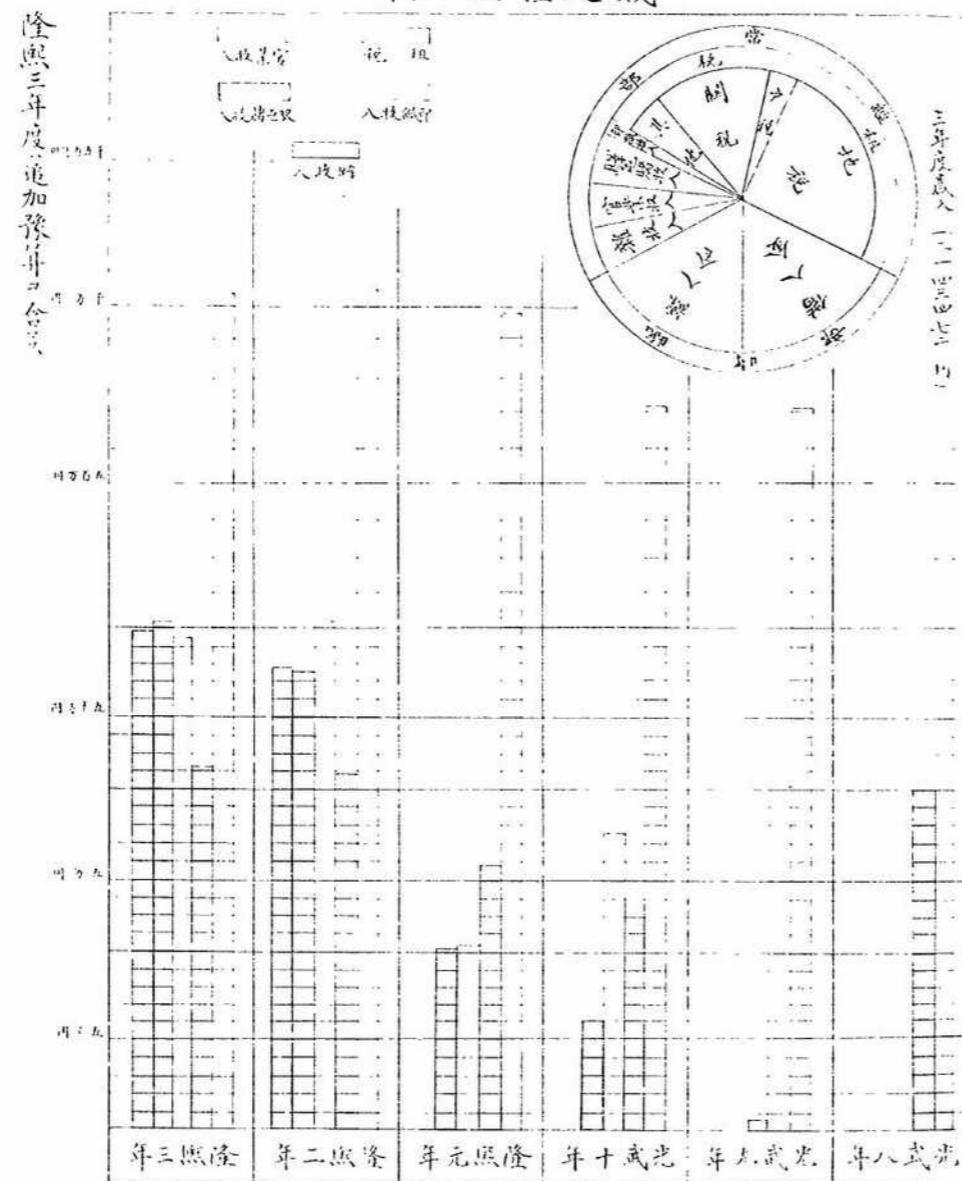
露光量違いにより重複撮影

(部常經) 別種入歲



露光量違いにより重複撮影

(部常經) 別種入歲



經常部歲出增加ノ事由ハ營業費、警視廳費、地方各府費等ノ減少アルモ行政機關ノ整備ニ伴フ俸給、廳費、旅費及雜給等ノ一般ニ増加シ又裁判所増設費、地方警察費、監獄費、地方財務費、各道行政費及教育費等著シク增加シ殊ニ國債費ニ於テ二百餘萬圓ノ增加ヲ爲シタルニ由ル臨時部歲出減少ノ原因ハ内部所管衛生費、度支部所管支出金、鹽田築造諸費新設定、臨時財產整理局費、驛屯土調查費新設定、軍部所管憲兵補助員費、學部所管教育補助費、農商工部所管林業費、勸業費其ノ他ニ於テ合計二百三十餘萬圓ノ增加アルモ内部所管治道費、水道工事費、度支部所管營繕費、海關工事費其ノ他ニ於テ合計二百七十餘萬圓ノ減少ヲ生シタル爲臨時部總計ニ於テ減少ヲ見ルニ至リタルモノトス然ルニ歲出臨時部減少額ハ遙ニ經常部增加額ニ及ハサルヲ以テ歲出總計ニ於テハ差引約三百萬圓ノ增加ヲ見ルニ至レリ

今豫算ノ内容ヲ概觀スル爲歲入科目別、租稅收入種別及歲出所管別ノ大要ヲ左ニ表示スヘシ

隆熙三年度歲入豫算科目別表 (△印八減)

科 目	三 年 度 豫 算 額		對 二 年 度 增 減	
	租 紙 收 入	稅	租 紙 收 入	稅
部常經	一、三三四、九八四	△	一、三七八、六四七	△
雜驛印	二三四、〇〇〇	△	九四八、七〇四	△
官業及國有財產收入	三九、〇〇〇	△	一、二五九、〇六八	△
屯賭收	八一六、五四〇	△	一、二五五、四〇三	△
收入	六二八、六四七	△	一、七四五、〇五六	△
稅	三九、〇〇〇	△	二五九、〇一八	△
部臨時	二二七、一七一	△	二三〇六〇四〇	△
綠本債	六二八、六四七	△	二、〇〇〇、〇〇〇	△
借入金	二二七、一七一	△	四一五、三七五	△
編入金	一、三六八、三五三	△	一、三〇六、〇四〇	△
替金	三、一二三、四〇九	△	一、三〇六、〇四〇	△
計	一、二三一、二四二	△	一、三〇六、〇四〇	△
計	二六、三八六、六四五	△	一、三〇六、〇四〇	△

隆熙三年度歲入租稅收入種別表 (△印八減)

稅 種	三 年 度 豫 算 額		對 二 年 度 增 減	
	稅	稅	稅	稅
地 戶 關 鹽 鐵 鹽 酒 家 雜 鹽 戶 稅 (新 稅)	六二八、三九〇、六四〇	△	一、八五九、八四〇	△
屋 稅 (新 稅)	五八四、九八三	△	六六八、三七六	△
草 稅 (新 稅)	三、一二三、〇一五	△	八一、〇三六	△
既往 年度 未納 稅 收入	六八、二六〇	△	六二八	△
計	一〇〇,〇〇〇	△	一〇一,〇〇〇	△
產	一三二、五三八	△	一三二、五〇〇	△
煙 草 稅 (新 稅)	七三、五〇〇	△	二二六、九七六	△
既往 年度 未納 稅 收入	一、二三四、九八四	△	一、二六、九七五	△
計	一八六、五四〇	△	一八六、五〇〇	△

隆熙三年度歲出豫算所管別表（△印ハ減）

所 管 別	經 常	部	臨		時 部
			三 年 度 豫 算 額	對 二 年 度 增 減	
皇 室	二 五 〇 〇 〇	一 九 三 一 二 四	三 五 二 一 四 八	一 六 八 五 八 〇 五	三 八 六 一 七 九
支 部	一 九 〇 〇 七 六 二	三 二 一 六 〇 七	二 二 三 八 一 四 三	四 九 二 〇 九 五 五	五 一 〇 四 九 八
農 學 部	九 五 二 〇 二 八	三 八 四 一 三 二 〇	七 三 二 一 五 一 〇	九 七 九 〇 九 〇	二 七 七 一 〇 〇
商 工 部	一 八 一 六 五 一 四 七 五	四 三 一 七 一 九	二 一 八 八 七 四	六 四 一 七 五 九	一 九 〇 八 五 〇
歲 出 通 計	二 六 三 三 九 四 三	三 四 五 〇 五 四 二	八 一 七 三 一 九 五 五	四 六 三 一 九 六 八	二 七 七 一 〇 〇
		比 較 增 減 通 計 增	二 九 八 六 一 五 七 三		

(二) 繼續費豫算

隆熙三年度ニ於テ新ニ計上シタル繼續費ハ總計二百五十萬餘圓ニシテ之ニ既定繼續費ヲ加算スレハ總額一千七百九十一萬餘圓ナリ此ノ金額中隆熙二

年度即ナ明治四十一年迄ノ支出額ハ千七十七萬餘圓ナリ右差引殘額中隆熙三年度ニ於テ支出スヘキ金額ハ三百三十萬餘圓ニシテ其ノ主ナル費目及年割額ハ治道費四十九萬四千圓(六年度結了)、海關工事費百九萬七千餘圓(七年度結了)、仁川水道工事費七十一萬九千餘圓(四年度結了)、平壤水道工事費二十四萬九千餘圓(三年度結了)、鹽田築造及廳舍新營設備費二十二萬九千餘圓(五年度結了)等ナリ右ノ内鹽田築造諸費ハ同年度ニ於テ新ニ設定シタルモノニ屬ス

(三) 特別會計豫算

隆熙三年度各特別會計豫算ハ度支部所管印刷局歲出入各十九萬九千餘圓、煉瓦製造所歲出入各二十一萬五千餘圓、工事基金歲入百八十四萬六千餘圓、歲出百三十六萬九千餘圓、起業資金歲入千八百四十三萬六千餘圓歲出三百三十六萬二千餘圓、金融資金歲出入各五十二萬圓、公債金(追加)歲入百萬圓、歲出三百十二萬九千餘圓、農商工部所管平壤鑛業所歲出入各三十五萬九千餘圓ナリトス右ノ内度支部所管公債金特別會計ハ同年度追加豫算ヲ以テ新ニ設定シタルモノニシテ農商工部所管棉花栽培特別會計ハ同年度ヨリ之ヲ廢止セリ

第二節 財務機關

(二) 地方財務機關

明治四十一年一月韓國政府ハ管稅官官制ヲ廢止シテ新ニ財務監督局官制及財務署官制ヲ實施シ同時ニ從來舊財政顧問部ノ系統ニ屬セシ財政顧問部監部、支部及分廳等ノ財務指導監督機關ヲ廢止セリ其ノ結果從來稅務監ノ職ヲ兼ネタル各道觀察使ハ全然稅務ト關係ヲ絶テ地方財務機關ハ茲ニ地方行政機關ヨリ獨立シ從來顧問制度必然ノ結果トシテ互ニ相對立セシ財務指導監督ノ機關ト財務執行ノ機關トハ茲ニ合一シテ首尾貫通セル一機關トナリ舊顧問部聘用ノ日本人官吏ハ財務監督局及財務署ニ入りテ直接財務ノ監督執行ノ衝ニ當ルニ至リ韓國財務機關ハ漸ク整備ノ域ニ到達セリ

財務監督局ハ内國稅務及地方財務ノ監督ヲ掌ル機關ニシテ元財政顧問監部所在地即ナ京城、大邱、平壤、全州及元山ノ五箇所ニ之ヲ置キ財務署ハ内國稅務及地方財務ヲ執行スル機關ニシテ元稅務署及同分署所在地二百三十一箇所ニ之ヲ置ケリ財務署ハ事務及定員ノ關係上之ヲ甲乙丙丁戊ノ五種ニ區別シ

甲種財務署ニハ日本人財務官及主事ヲ乙丙兩種ニハ日本人主事ヲ配置スルコトトセリ

大邱及全州ノ兩財務監督局ハ管轄區域廣闊ニ失スルヲ以テ四十一年八月財務監督局官制ヲ改正シ該區域中ヨリ忠淸南北兩道ヲ分離シ之ヲ漢城財務監督局ノ管轄トシ忠淸南道公州ニ公州財務監督支局ヲ設置シ該二道ノ財務ヲ監督セシムルコトトナセシモ四十二年三月更ニ同支局ヲ廢シテ之ヲ獨立ノ財務監督局トナセリ因テ財務監督局ハ合計六箇所ニ増加セリ財務署ハ郡廢合ノ結果四十一年十月大邱財務監督局管内ニ於テ漆原財務署、十一月全州財務監督局管内ニ於テ和順及樂安兩財務署廢止トナリ其ノ總數二百二十八箇所ニ減少セリ

(二) 金庫

本年中ニ於テ咸鏡道淸津外十箇所ニ支金庫設置ノ結果同十二月末現在金庫數二十六箇所ニ達セリ又國庫金ノ取扱ヲ爲ス郵便局所モ本年末ニ於テ百五十箇所トナレリ此等ノ金庫及金庫代用機關ニテ本年中ニ取扱ヒタル國庫金ハ歲入ニ於テ二千百九拾餘萬圓、歲出ニ於テ二千十餘萬圓ニシテ前年ニ比シ

歲入八百四十餘萬圓、歲出六百十餘萬圓ヲ增加シタリ

(三) 地方委員會

地方委員會ハ本年ヨリ一層其ノ會合ヲ頻繁ナラシム新法令ノ周知及官民意思ノ疏通ニ努メシムルノ外財政經濟ニ關スル新施設ノ利便ヲ一般ニ説示セシメ且特ニ旅費及手當金ヲ委員ニ支給スルノ規定ヲ設ケ該委員ヲシテ納稅ノ督勵及財務上ノ調査ニ從事セシムルコトトナシタリ委員會及委員數ハ前年ト異動ナク會數五十委員數三百六十餘名ナリトス

(四) 徵收成績

徵稅機關及徵稅手續ノ漸次完備スルニ從ヒ徵稅成績ハ逐年良好ニ向ヒツアリシニ前年夏以來各地ニ暴徒ノ蜂起シタル結果明治四十一年ノ租稅實收入ハ地稅ニ於テ少カラサル影響ヲ受ケシモ本年五月以降地方騷擾ノ鎮靜ニ赴ケルト臨機收納ノ便宜ヲ圖リタルトノ結果其ノ成績ヲ回復シ地稅實收額ハ豫算額ニ對シテ二十餘萬圓、前年度實收額ニ對シテ三十萬餘圓ヲ增加シ關稅實收額ハ豫算額ニ對シ七十二萬餘圓、前年度實收額ニ對シ十萬餘圓ノ增加ヲ示セリ其ノ他ノ租稅ノ實收額ハ豫算額ニ及ハサリシモノ多カリシト雖結

局租稅實收入總額ハ一千七十萬餘圓ニ達シ豫算額ニ對シ十八萬餘圓、前年實收額ニ對シ四十二萬餘圓ノ增收ヲ示スノ好況ヲ呈セリ而シテ稅外諸收入中印紙收入實收額ハ調定額ノ九割九分強ニ驛屯賭實收入ハ豫算額ノ九割三分強ニ達シ內驛屯賭實收入ハ前年度ニ比シ十五萬餘圓ノ增收ヲ示セリ因ニ國稅實收額累年增加ノ趨勢ヲ概觀スル爲最近五箇年間ノ各年總額ヲ舉クレハ三十七年四百七十八萬餘圓、三十八年五百七十五萬餘圓、三十九年六百三十二萬餘圓、四十年千二十七萬餘圓、本年ハ千七十萬餘圓ナリトス四十年ノ劇增ハ主トシテ地稅及關稅ノ增收ニ由ル

第三節 稅制整理

(一) 結稅整理

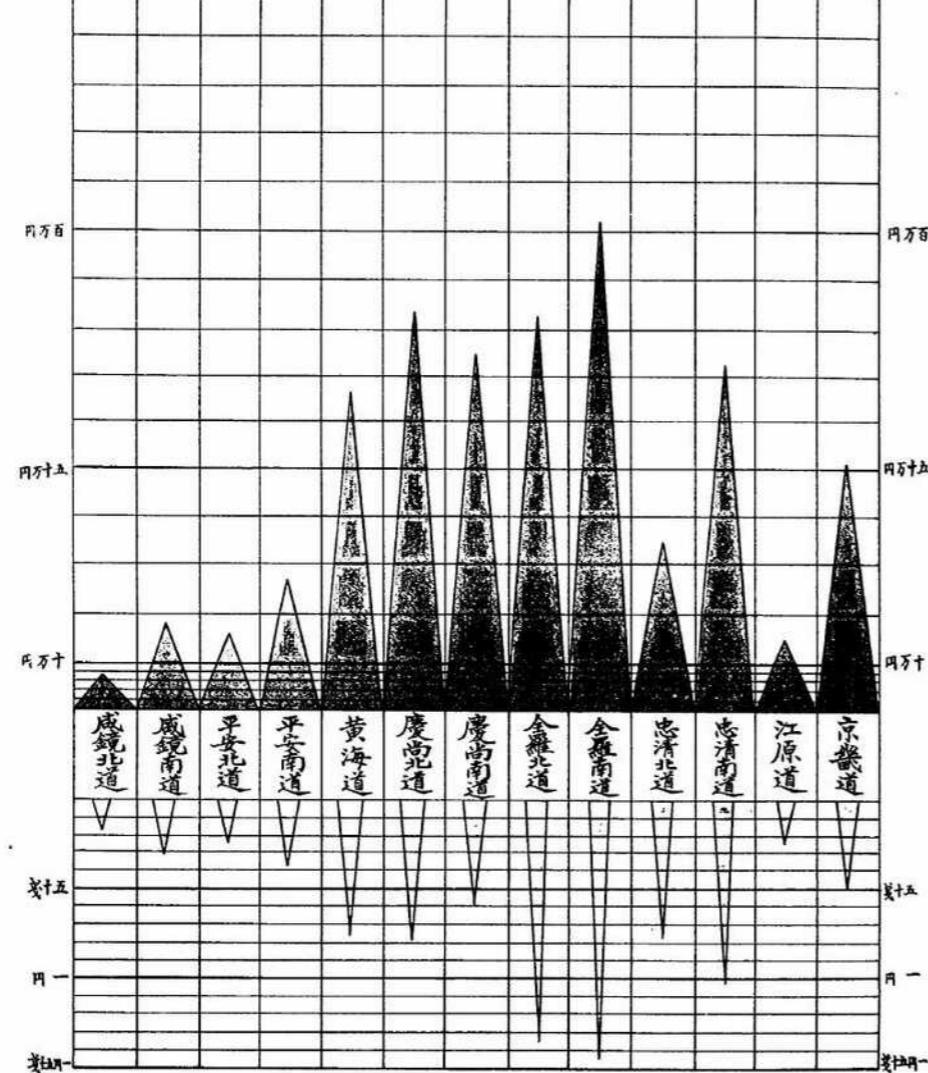
韓國ノ結稅即テ地稅ハ從來其ノ結價即テ稅率二十三等ノ多キニ分カタレ地方ニ依リテ其ノ率ヲ異ニシ其他慣習上土地所在面ハ我カ村ニ當ルヲ納稅地トセシテ納稅者居住面ヲ納稅地トナシ納稅義務者モ亦地主、小作人中一定セス加之地稅徵收ノ基礎タル臺帳ノ設備ヲ闕クナ以テ其ノ整理極メテ困

難ニシテ脱税ヲ容易ナラシムルノ弊アリ故ニ明治四十一年六月法律ヲ以テ地税ニ關スル件ヲ公布シ結價即ナ地税ノ税率ハ之ヲ新貨幣ニ換算シ其ノ等級ヲ十三等ニ減シ且全國ヲ通シテ一様ノ率ニ依ラシムルコトトシ同時ニ土地所有者ヲ以テ第一納稅義務者ト爲スコトヲ明カニシ尋テ七月度支部令ヲ以テ地税徵收臺帳調製規程ヲ制定公布シテ之ヲ調製ニ著手シ且土地所在面ヲ以テ納稅地ト爲スコトニ定メタリ

結稅整理ノ一要件タル隠結及漏結即ナ賦課洩ノ土地ノ發見ハ當局者カ稅制整理開始以來最も盡力スル所ナリシモ容易ニ其ノ效果ヲ舉ケサルニ由リ四十年三月以降隠結若ハ漏結ノ發見申告者ニ當該稅額ノ約四分ノ一ヲ施賞スルノ制ヲ設ケ之カ發見ヲ獎勵シタルヲ以テ發見結數漸ク多キヲ加へ同年末現在課稅結數ハ之ヲ前年末現在ニ比シ一萬八千五百三十結ヲ增加シ總結數百一萬七千八百餘結ニ達セリ此ノ結數總額ニ新稅率ヲ乗シテ算出セル結稅總額ハ六百六十四萬餘圓ナリトス

(二) 戶稅整理

戶稅ハ租稅收入中地稅、關稅ニ亞ク好財源ニシテ先年來逋脫戶數調查ノ結果



明治四十一年末現在課稅總戶數百九十三萬餘戶此ノ稅額五十八萬餘圓ニ達シ同年豫算額ニ比シ八萬圓ナ增加シ前年末ニ比シ戶數三十八萬餘戶、稅額十一萬餘圓ナ增加セリ然レトモ通脫戶數ハ尙少カラサルヲ認ムルヲ以テ爾後一層之カ整理發見ニ努メ免除ノ慣例アルモノ及極貧者ナ除クノ外ハ總テ課稅スルノ方針ヲ執リ以テ課稅ノ公平ナ圖ルコトトシ隆熙三年度即ナ明治四十二年歲入豫算ニ於テハ戶稅五十八萬四千餘圓ナ計上セリ其ノ他鑛稅、噸稅、雜稅等何レモ逐年增加ノ趨勢ヲ認メ四十二年豫算ハ各其ノ額ヲ增加セリ

(三) 三稅新設

韓國政府ハ政費膨脹ニ對スル財源ヲ開拓スルト共ニ一面租稅負擔ノ公平ヲ保ケ一面新ニ間接稅賦課ノ基礎ヲ闡クノ目的ヲ以テ明治四十二年ヨリ家屋稅、酒稅及煙草稅ノ三稅ヲ新設シ家屋稅年額二十一萬餘圓、酒稅年額十六萬餘圓、煙草稅年額四十八萬餘圓ノ歲入ヲ得ルノ計畫ヲ立テ本年ニ於テ其ノ施行ノ準備ニ著手セリ

韓國在來ノ戶稅ナルモノハ專ラ村落ノ家屋ニ賦課スルモノナルヲ以テ韓國

政府ハ從來戸税ヲ免除セル府郡衛所在地及其ノ他ノ指定地ノ家屋ニ對シテハ新ニ家屋税ヲ賦課スルコトトシ又韓國ニ於ケル酒類ノ造石高ハ約百七十萬石ニシテ其ノ製造場數十一萬戸以上ニ及フナ以テ酒類ヲ釀成、蒸餾及混成ノ三種ニ分ケ製造場毎ニ造石免許税ヲ課スルコトトシ葉煙草セ亦產額三百二十萬貫ニ上リ耕作者約五十七萬人販賣者約二萬五千人ニ及フナ以テ煙草耕作者及煙草販賣者ニ對シテ免許税ヲ課スルコトトシテ其ノ税法ノ制定ヲ了シ四十二年二月ニ至リ之ヲ公布セリ

(四) 人蔘税法ノ制定

紅蔘專賣法ハ人蔘ノ特別指定耕作區域ニ限り施行スルモノナルヲ以テ右地域以外ニ耕作スル人蔘ニ對シテハ權衡上一定ノ課稅ヲ爲スノ必要アルニ由リ明治四十一年七月法律ヲ以テ人蔘税法ヲ公布シ蔘圃一間(約我一坪ニ當ル)ニ付水蔘收穫ノ際金十錢宛ヲ課稅スルコトトセリ

(五) 紅蔘專賣法ノ公布

明治四十年十二月紅蔘專賣及蔘稅ノ所管宮内府ヨリ度支部ニ移屬ノ結果同部ニ於テハ同事業施行ニ關スル諸般ノ調査準備ヲ經四十一年七月法律ヲ以

テ紅蔘專賣法ヲ發布シ同時ニ同部司稅局ニ蔘政課ヲ增設シ便宜之ヲ開城ニ分置シテ紅蔘ノ製造及專賣並人蔘病源調査栽培法改良等ニ關スル事務ヲ掌ラシメ且紅蔘製造ノ原料ニ充ツヘキ人蔘ノ特別耕作區域ヲ左ノ如ク指定セリ

京畿道 開城郡 長湍郡 豊德郡
黃海道 金川郡 兔山郡 平山郡 瑞興郡 凤山郡

四十一年ニ於ケル納付水蔘總斤數三萬五百餘斤ノ内紅蔘原料トジテ收納シタル水蔘ノ總斤數ハ一萬三千二百餘斤ニシテ殘餘ハ總テ病害ニ罹リ紅蔘原科ニ適セサル爲之ヲ納付者ニ却下シ收納水蔘ニ對シテハ之ヲ優等品上等品及普通品ノ三種ニ分ケテ賠償價格ヲ定メ賠償金總計七萬一千餘圓ヲ納付者ニ交付セリ紅蔘製造ハ從來民間當業者ノ操作ニ係リシモ四十一年ヨリ之ニ關スル一切ノ作業ヲ蔘政課ノ直營トシ前記收納水蔘ヲ原料トシテ本蔘四千二百斤、尾蔘九百六十斤合計五千百餘斤ヲ製出セリ其ノ生産費ハ仕上千斤ニ付一萬八千餘圓ヲ要シタリ之ヲ前年ニ比スルニ製造高ハ其ノ半ニモ達セサルモ色澤其ノ他ノ點ニ於テ遙ニ優良ナルヲ認ムルノミナラス生産費ニ於

テモ仕上千斤ニ付三百七十餘圓ヲ減少セリ

近時韓國ニ於ケル蓼圃ノ病害ハ殆ト其ノ極ニ達シ一時十萬斤以上ニ達シタル紅蓼產額モ本年ニ於テハ僅ニ五千餘斤ノ少額トナリ耕作反別モ亦漸次減少ヲ見ルニ至レリ故ニ當局者ハ之カ挽回ヲ圖ランカ爲或ハ技術官ヲ日本ニ派遣シテ其ノ參考資料ヲ調査セシメ或ハ東京帝國大學農科大學講師等ニ病源及其ノ豫防治療法ノ研究ヲ囑託シ其ノ指導ニ依リ開城蓼政課構内ナル蓼圃ニ於テ人蓼ノ播種、播種、栽培、施肥並病害ノ治療及豫防ニ關シ二百有餘ノ豫備試驗ヲ行ヒ漸次耕作栽培法ノ改良ヲ實行シツツアリ

(六) 國有移屬雜稅ノ整理

元宮内府所管各種雜稅ハ別項記載ノ如ク前年末ヨリ本年六月ニ亘リ一部廢止ニ歸シタルモノノ外悉ク國庫ノ收入ト定メ庖稅、銅鑽稅外三種ハ之ヲ農商工部ノ管理ニ移シ沿江稅、竹田稅、漁磯稅、汎稅等殘餘一切ノ雜稅ハ之ヲ度支部ノ所管ニ移シタルニ由リ度支部ハ是等諸雜稅ヲ農商工部所管諸雜稅ト共ニ便宜地方財務機關ニ引繼キ之カ整理改廢ニ關スル調査並其ノ徵收ニ當ラシメタリ

第四節 國 債

(二) 起 債

明治四十一年中韓國政府ニ於テ借入若ハ募集シタル國債ハ第二起業資金債一千七百九十九萬圓、起業公債百萬圓、日本政府借入金七百二萬餘圓ナリトス第二起業資金債ハ第一起業資金借入未濟額五百萬圓及土地調查其ノ他財源啓發等ノ資金ニ充用スルモノニシテ本年十二月日本興業銀行ト其ノ借入ヲ契約シ同月中其ノ一部千九十九萬圓ヲ受入セリ

起業公債ノ募集ハ在韓日本通信官署ノ取扱ニ係ル日韓人預入レノ郵便貯金ヲ韓國ノ企業ニ利用セントスルニ在リ韓國政府ハ本年十一月勅令ヲ以テ起業公債條例ヲ公布シ本年内ニ於テ百萬圓ノ同公債ヲ發行シ内六十萬圓ヲ以テ各農工銀行發行ノ農工債券ヲ引受ケ殘額四十萬圓ヲ以テ地方金融組合資金ニ充用スルコトトシ十二月我大藏省ト募入契約ヲ了ヘ同省ヨリ該金額ヲ受入セリ

日本政府借入金ハ施政改善ニ必要ナル經費殊ニ傭聘日本人ノ俸給手當旅費

等支辨ノ目的ニ出テタルモノニテ韓國政府ハ本年三月二十日日本政府ト無利子無期限借入ノ契約ヲ了シ本年五月ヨリ十二月ノ間ニ於テ明治四十及四十一兩年度年割額合計七百餘萬圓ヲ受入セリ
四十一年末ニ於タル國債ノ現在額ハ國庫證券二百萬圓、貨幣整理資金三百萬圓、同資金借越六百二十餘萬圓、金融資金債百五十萬圓、第一起業資金五百萬圓其ノ他本年借入又ハ募集ノ諸債等合計三千六百七十餘萬圓ニシテ前年末ニ比シ二千百二十餘萬圓ヲ増加セリ

(二) 使 途

本年ニ於タル起業資金ノ使途ハ大體ニ於テ前年來ノ豫定配賦ヲ繼承シタルモノニシテ支出豫定額中仁川水道費二十四萬餘圓增加ノ結果豫定總額九百十一萬餘圓トナリタル外何等異動ナシ本年末募入ノ第二起業資金債及起業公債ニ對シテハ隆熙三年度即ケ明治四十二年支出豫定費目中土地調査費一千萬圓、金融機關設備費一百九十九餘萬圓及天日製鹽官營費百十餘萬圓ヲ計上セリ而シテ前記支出豫定總額中本年末迄ノ支出累計ハ六百二十餘萬圓ニ達セリ

本年末金融資金支出ノ現況ハ之ヲ前年末ニ比シ政府倉庫資金ノ八萬餘圓ニ減少シタルト地方金融組合資金ノ四十四萬圓ニ増加シタルト新ニ平壠手形組合貸下金三萬二千圓ヲ設定シタル結果預金ニ若干ノ減額ヲ見タルトノ外何等異動ナシ

第五節 貨幣整理

(一) 舊白銅貨ノ回収

舊白銅貨ノ回収ハ交換開始以來前年末迄ニ回収總額七百二十一萬餘圓ニ上リ流通殘額概算二百九十万圓内外ニ過キサルニ至リタルヲ以テ明治四十年二月度支部令ヲ以テ之カ交換期限ヲ本年十一月三十日限リトシ以後ノ通用ハ之ヲ禁止スルコトニ定メタリ爾來著シク其ノ回収額ヲ増加シ本年一月ヨリ十二月迄ニ於テ約百五十萬圓ヲ回収シ交換開始以來ノ累計八百七十一萬餘圓ニ達セリ其ノ市場ニ殘存スル額ハ尙百四五十萬圓ノ見込ニ付通用禁止後モ公納ニ限り四十二年末迄之ヲ使用シ得ルコトニ定メタリ

(二) 葉錢其ノ他舊貨ノ整理

從來葉錢ハ實價ヲ標準トシテ流通シ必シモ惡貨ト稱スヘカラスト雖其ノ流通額ヲ調節シテ準補助貨幣タルノ位地ヲ與フルコト最モ緊要ナルヲ認メ明治三十八年以來納稅、買上及交換等ノ方法ニ依リ漸次之カ回収ノ度ヲ進メ四十一年六月迄ニ於テ其ノ回収額二十萬餘圓ヲ算シ更ニ銅貨暴騰ニ基ツク輸出額累計百六十二萬餘圓ヲ控除スルトキハ其ノ市場殘存額三百萬圓内外ト爲レリ是ニ於テ本年六月勅令ヲ以テ其ノ通用價格ヲ一枚二厘トシ一圓迄ヲ限リ法貨トシテ通用ヲ認ムルコトトシ七月ヨリ之ヲ施行スルト同時ニ葉錢相場ノ取締ヲ嚴ニシタル爲其ノ相場モ二十割内外ニ略一定シ隨テ回収成績モ益良好トナリ本年七月以降十二月末ニ至ル半箇年間ニ於テ二十九萬六千餘圓ノ多額ヲ回収シ回収開始以來ノ累計四十九萬八千餘圓ニ達セリ舊銀貨舊赤銅貨其ノ他ノ舊硬貨ハ本年度ニ於テ特別ノ回収ヲ見ス

(三) 新貨幣ノ發行

舊貨回収ニ伴フ通貨ノ缺陷ヲ補充スヘキ新貨幣ハ明治三十八年鑄造開始以來四十一年末迄ニ總計金貨九十五萬圓、銀貨四百四十六萬餘圓、白銅貨百八十一萬圓、青銅貨五十二萬七千圓、合計七百七十四萬餘圓ニ達シ本年末現在發行額

金貨九十五萬圓、銀貨二百三萬餘圓、白銅貨九十八萬餘圓、青銅貨十九萬五千餘圓、合計四百十五萬八千餘圓ニ達セリ新貨幣中補助貨ノ流通ハ其ノ需用季節ニ依リ甚シキ不平均ヲ來タシ時トシテ流通ノ圓滿ヲ缺クノ虞アルヲ以テ各銀行其ノ他金融機關ヲシテ通用制限額ニ拘ハラス努メテ之ヲ受領セシメ且金庫ニ於ケル貨幣交換ノ便宜ヲ增大シ或ハ各地金融組合ニ對シ補助貨ノ無利子貸付ヲ爲シ或ハ納稅ニハ主トシテ新貨ヲ使用セシメ葉錢ノ通用制限ヲ勵行スル等舊貨回収ト相呼應シテ專ラ之カ普及ニ努メタル結果一般民衆漸次新貨ニ親炙シ重ナル市場ニ於テハ授上何等障害ヲ見サルニ至レリ

(四) 貨幣流通額

明治四十一年各月末平均各種貨幣市場流通額ハ新硬貨三百三十萬餘圓、第一銀行券八百三十八萬餘圓、舊白銅貨(概算)二百三十五萬餘圓、葉錢(概算)三百七萬餘圓、各日本通貨六十八萬餘圓、合計千七百八十萬餘圓ニシテ之ヲ前年各月末平均額ニ比スルニ新硬貨六十七萬餘圓ヲ增加シ其ノ他ハ第一銀行券六十萬圓、舊白銅貨八十五萬圓、葉錢二十七萬餘圓、各日本通貨二十二萬餘圓ヲ減シ通算百二十七萬餘圓ノ減少ヲ示セリ

(五) 紙幣ノ發行準備

日韓兩國政府ノ公認ニ依リ韓國法貨ノ代用紙幣タル第一銀行券ノ發行額ハ明治四十一年上半期ニ於テ金融緩慢ノ爲著シク減少シ同期末ニ於テ八百九十一萬餘圓ニ下降シタルセ下半期ニ入り漸次其ノ額ヲ増加シ同年末ニ於テ八千三十八萬餘圓ニ達セリ然レトモ之ヲ昨年末ノ發行額ニ比較スルトキハ尙二百餘萬圓ノ減少ヲ示セリ之レ内外經濟界ノ不振及米價下落等一時的原因ニ基ツクモノニシテ將來經濟上ノ發展ト共ニ益增加スベキハ明ナリ本年末ニ於ケル銀行券發行高ニ對スル準備高ハ正貨準備三百五十萬餘圓保證準備六百八十八萬餘圓ニシテ其ノ發行額ニ對スル比率ハ正貨三割四分、保證物件六割六分ノ割合ニ當レリ

第六節 金融

(二) 金融機關

韓國各種金融機關ハ施政改善ニ伴フ一般經濟狀態ノ發展ト民間經濟思想ノ變革ニ基ク資產隱慝ノ弊風滅退トニ因リ一般財界ノ不況ナリシニ拘ラス其

ノ膨脹頗ル顯著ニシテ明治四十一年末ニ於テハ普通銀行本店三、支店五、農工銀行本店六、支店二十二、日本側普通銀行本店一、支店二十八、合計六十五箇所、之ニ手形組合八、地方金融組合五十ヲ加フレハ各種金融機關通計百二十三箇所ニ及ヒ之ヲ前年末ニ比スルニ銀行本支店六、手形組合二、地方金融組合四十二、總計四十九箇所ヲ增加セリ右總數中京畿内ニ存立スルモノ二十七箇所ニシテ其ノ他ハ地方各道ニ散在シ慶尙南道ノ十五箇所、平安南道ノ十四箇所ヲ最多トシ江原道ノ一箇所ヲ最少トス

今前記金融機關中銀行ノ營業總況ヲ舉クレハ本年末ニ於ケル拂込資本金ハ韓國側銀行八十萬餘圓、日本側銀行(韓國支店元金)四百三十五萬圓、政府貸下金韓國側銀行百五十五萬餘圓、積立金韓國側銀行十七萬餘圓、日本側銀行七十萬圓、預金現在額韓國側銀行百四十九萬餘圓、日本側銀行千二百萬餘圓、貸出金現在額韓國側銀行三百九十八萬餘圓、日本側銀行千二百餘萬圓ナリ又本年中ニ於ケル入金ハ韓國側銀行六千百餘萬圓、日本側銀行七億四千餘萬圓、出金ハ韓國側銀行六千百餘萬圓日本側銀行七億四千餘萬圓ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ韓國側銀行ニ在リテハ前記各科目ニ於テ何レモ多少ノ增加ヲナシ日本側

銀行ニ在リテハ預金貸出金ニ少數ノ減少ヲ呈セル外何レモ多少ノ増加ヲ示セリ

(二) 農工銀行

韓國經濟界ノ發達ニ伴ヒ農工銀行ハ漸次運轉資金ノ缺乏ヲ感スルニ至リタルヲ以テ韓國政府ハ本年ニ於テ一面之カ合併ト支店ノ増設ヲ命令シテ資金疏通ノ効用ヲ増大セシメ一面政府貸下金十五萬六千圓ヲ増額シ且第二回農工債券六十萬圓ノ發行ヲ認可シテ資金ノ充實ヲ完カラシメ之ト共ニ農工銀行條例施行細則ヲ制定公布シテ執務ノ統一ヲ完カラシメタリ從來農工銀行ハ主トシテ各道政治的中心ノ簡所ニ設置セラレタルヲ以テ韓國政府ハ今回ノ農工銀行合併ニ方リテハ主トシテ經濟交通ノ關係ニ鑑ミテ之ヲ施行シ四十一年八月咸興、鏡城ヲ合併シテ咸鏡農工銀行ヲ元山ニ、平壤、海州ヲ合併シテ平安農工銀行ヲ平壤ニ、大邱、普州ヲ合併シテ慶尙農工銀行ヲ大邱ニ置キ咸興、鏡城、海州及普州ノ各本店ヲ支店ニ變更シ忠清北道大田ニ漢湖農工銀行支店ヲ、咸鏡北道清津ニ咸鏡農工銀行出張所ヲ增設セシメタリ尋テ各農工銀行ハ流動資金補充ノ目的ヲ以テ政府ノ保證ノ下ニ拾圓債券合計六

萬株ヲ發行シ本年十二月二十五日ヲ以テ之ヲ締切リタルモ民間ノ引受六千六株ニ過キサリシヲ以テ政府ニ於テ其ノ殘餘ヲ引受け結局債券發行額三十萬餘圓ヲ增加セリ又政府ハ農事經營ノ改良ヲ積極的ニ指導スル目的ヲ以テ前年來技師手ヲ農工銀行ニ配置シ本年ニ於テモ技師一名技手六名ヲ増派セリ

農工銀行營業狀況ハ一般農事經營法ノ幼稚ナルカ爲年賦貸付ハ未タ甚ダ振ハスト雖手形割引ハ著シキ劇增ヲ爲シ米價低落ノ爲一般經濟界ノ不況ナリシニ拘ラス預金貸出金共增加ノ趨勢ヲ示シ本年末日現在各行合計運轉資金二百六十二萬餘圓預金七十五萬二千餘圓、貸出金二百六十八萬餘圓ニ上リ前年末ニ比シ運轉資金三十八萬圓、預金二十四萬圓、貸出金四十七萬圓ヲ加シ增咸鏡農工銀行ノ一割ノ外ハ各行共一割二分ノ利益配當ヲ爲セリ

(三) 普通銀行

韓國普通銀行ハ依然其ノ本支店ヲ京城及其ノ附近ニ有スルノミニシテ未タ廣ク一般地方ノ金融機關タルニ至ラス然レトモ其ノ業務ハ漸々以テ整理發達シ漢城、天安ノ兩行ハ政府ノ補助ニ依リ其ノ基礎益固ク常ニ五十萬圓以上

ノ運轉資金ヲ有シ韓一銀行モ本年ニ於テ公稱資本金ヲ五十萬圓ニ増加シ運轉資金四十六萬圓以上ヲ有スルニ至リ加之三行共本年ニ於テ各一箇所ノ出張所ヲ增設シ其ノ營業成績モ頗ル良好ニシテ本年ノ總預金高及貸出高ハ財界一般ノ不況ナリシニ拘ハリス前年ニ比シ前者ニ於テ五割強後者ニ於テ六割強ノ増進ヲ示シ漢城銀行ハ一割五分他二行ハ各一割ノ利益配當ヲ爲セリ

(四) 地方金融組合

農工銀行ノ補助機關トシテ専ラ地方小農ノ融通ト農業ノ振興トニ資セシムルノ目的ヲ以テ明治四十年來度支部ニ於テ各地ニ設立勸誘中ナリシ地方金融組合ハ四十一年末ニ於テ漸ク設立豫定數五十箇所ニ満ツルニ至レリ度支部ハ之ニ對シテ各壹萬圓ノ基本金ヲ貸下ケ各壹名ノ理事者ヲ派遣シ組合員ニ低利ノ資金ヲ融通セシムル外委託販賣共同購入ノ業務ヲ兼營セシメシニ其ノ成績漸次良好ニ向ヒ本年末現在貸付金高二十一萬圓ニ達シ能ク農民ノ金融ヲ緩和シ地方經濟狀態ノ改善ニ資スル所尠カラス度支部ハ更ニ各組合ニ農業技手ヲ配置スルコトトシ本年内ニ於テ十三箇所ノ配置ヲ了シタルニ

農事改良上ノ效果亦顯著ナルヲ以テ來年度ニ於テハ技手ノ配置ヲ増加シ且更ニ五十箇所ノ金融組合ヲ增設スルノ計畫ヲ立テタリ

(五) 手形組合

手形組合ハ韓國在來ノ弊害多々於音票ヲ掃蕩シ完全ナル新手形ノ流通ヲ企圖スルナ以テ其ノ目的トシ表面組合員發行ノ手形ヲ保證シ裏面組合員ノ信用程度ヲ調査スルノ業務トシ其ノ事業年ヲ逐フテ益盛況ヲ呈シ手形ノ性質モ漸ク一般ニ了解セラレ在來融通手形タルニ過キサリシモノ漸ク真正ノ商業手形ノ性質ヲ具備スルニ至レリ殊ニ司法官憲ニ於テ於音票ノ授受ニ據ル債權債務ノ成立ヲ認メサルノ判例確定シタル以來於音票ニ對スル韓人ノ觀念漸ク一變シ新手形ヲ歡迎スルノ意愈強ク手形組合ニ於ケル手形保證額ハ漸ナ追フテ増進シ信用調査ノ事務モ漸次精密ヲ加ヘ不拂手形ノ現出亦極メテ少數ト爲リ其ノ成績益良好ニ向ヘリ漢城手形組合ハ本年十月ヨリ興信部ヲ創設シ十二月ヨリ水原ニ其ノ支所ヲ設置セリ

今全國ノ手形組合ノ業務成績ヲ舉クレハ四十一年中ノ手形保證總額三百八十五萬餘圓、手形回收總額三百九十九萬餘圓ニシテ前年ニ比シ保證額十二萬

餘圓、回収額七十四萬餘圓ヲ増加セリ同年末現在全國手形組合ノ基本金總額ハ三十三萬圓積立金總額ハ四萬一千餘圓組合員總數ハ五百三十六名ニシテ之ヲ前年末ニ比スレハ基本金ニ於テ一萬圓ヲ減シタルモ積立金ニ於テ二萬二千餘圓組合員數ニ於テ百三人ヲ増加セリ

(六) 倉庫

共同倉庫會社條例ニ準據シ韓國政府ノ保護監督ノ下ニ營業シツツアル漢城共同倉庫會社ハ其ノ後政府補助金ヲ二十八萬圓ニ増加セラレ近時韓國諸般ノ金融機關稍完備スルニ伴ヒ該會社一時ノ兼營タル不動產貸付及手形割引等ノ業務ハ漸次之ヲ廢止シ主トシテ會社本然ノ業務タル寄託貨物ノ保管ニ全力ヲ傾注スルノ方針ヲ執リ本店出張所共ニ倉庫ヲ增設シ益商民ノ利便ヲ増進スルニ努メツツアリ該社營業所數及資本額ハ前年ト異動ナク四十一年中ニ於ケル總貸出額ハ九十六萬餘圓ニシテ前年ニ比シ十萬餘圓ヲ減少シ其ノ中内國爲替額ハ受拂合計十一萬六千餘圓ニシテ上半期ニ年一割五分下半期ニ年二割ノ利益配當ヲ爲セリ

尙韓國政府カ商民ノ動產貨物ノ流通ニ便セシカ爲所在ノ金融機關ニ無料貸

下ヲ爲セル政府建設ノ中央及地方倉庫ハ本年末ニ於テ十一箇所ニ増加セリ

第七節 國有移屬不動產ノ調査整理

曩ニ國有ニ移屬シタル元宮内府所管及慶善宮所屬不動產竝該關係簿書ハ明治四十一年八月度支部臨時財產整理局ニ於テ全部其ノ引受ヲ了セリ引受不動產ノ概數ハ田二萬五千餘町歩、畑四萬六千餘町歩、田畑ハ驛屯土及宮庄土大部分ヲ占ム燒畑千二百餘町步、山林五十四箇所、原野二千三百餘町步、家屋百七十八戸、廢止ニ屬シタル宮殿、廟祠、壇三十箇所等ニシテ價格總概算一千七百三十餘萬圓ナリ此ノ外調査未了ニ屬スル陵闈、墓ノ位土及外核字アリ元來帝室財產ニハ原簿ノ設ナク一方民有地ノ混入奪入セルモノアルト共ニ一方秋租成冊ニ記載ナキ土地家屋等ニシテ人民ノ利用請願ニ依リ始テ其ノ存在ヲ知リ得ルモノモ少カラス又存在明白ナルモ其ノ所在、面積又ハ境域ノ正確ナラサルモノアリ由テ臨時財產整理局ハ國有移屬不動產竝其ノ關係簿書ノ引受ヲ了スルヤ一部ハ平壤大邱及全州三出張所ノ實地測量ヲ經テ之ヲ司稅局財務監督局、内部、農商工部等ノ當該主管廳ニ引繼ギ一部ハ各當該主管廳ヲシテ

自ラ實地踏査ヲ遂ケシムルコトトシ四十一年中ニ於テ田畠全部其ノ他不動產ノ大部分及所要關係簿書ノ引續ヲ了シ四十二年ニ於テ更ニ山林、草坪、原野並新發見ニ係ル田畠、家屋等計百六十件ノ整理引繼ヲ爲セリ尙其ノ所在數量等不明ノモノニ對シテハ地方財務機關ヲシテ之カ調査發見ニ任セシメ混入奪入ノ土地家屋ニ對シテハ異議ノ申請ニ依リ調査ノ上之カ還附ノ手續ヲ爲セリ

第八節 財源調査

財源調査ノ事務ハ元ト財政顧問部ノ管掌スル所ナリシモ明治四十一年一月同部廢止ト共ニ度支部臨時財源調査局ノ管掌ニ移レリ今其ノ調査ノ種類及結果ヲ記述セハ左ノ如シ

(一) 鹽業調査

鹽業調査ハ明治四十年之ニ著手シ翌四十一年末ニ於テ民間經營鹽田ノ約八分ノ踏査ヲ遂ケタリ調査結了鹽田總反別ハ三千二百餘町歩ニシテ此ノ一箇年製鹽豫想高ニ億四千餘萬斤ナリトス而シテ同年末ニ於テ猶未調査ニ屬ス

ル地方ハ忠淸南道、全羅北道、全羅南道及京畿道ノ各一部並ニ黃海道全部ニシテ四十二年ニ於テ悉皆結了ノ豫定ナリ
因ニ四十一年中ニ於ケル韓國輸入鹽額ハ日本鹽四百六十餘萬斤、臺灣鹽千五百餘萬斤、淸國鹽五千四百餘萬斤、獨逸鹽四千餘斤、合計七千四百餘萬斤ニシテ其ノ輸入總額累年比較ハ三十八年二千六百萬斤、三十九年四千餘萬斤、四十年五千四百餘萬斤ナリトス

(二) 煙草調査

煙草ニ對スル財源調査ハ明治三十八年十一月之ニ著手シ生產樞要地ニ出張所ヲ設ケ地方騷擾ノ危難アリシニ拘ラス四十一年末迄ニ產地及生產額ノ實地調査ヲ結了セシモノ各道ニ瓦リテ二百四十五郡ニ及ヒ此ノ煙草耕作地總反別一萬九百餘町歩ナリトス尙調査未了ノ殘餘九十七郡ハ四十二年中ニ之ヲ結了スル豫定ナリ其ノ他煙草ノ生產費額及消費集散狀況ニ關スル調查並各生產地ノ葉煙草及土壤標本ノ蒐集等ノ事務モ漸次其ノ步ヲ進メツツアリ

煙草ノ稅源涵養ニ關シテハ平安南道成川出張所ニ於テ前年來米國種並在來

種ノ試作及乾燥試験等著々其ノ企畫ヲ進メツツアリシモ四十一年四月暴徒襲撃ノ爲諸般ノ施設全然水泡ニ歸シタルニ由リ四十二年ニ於テ慶尚北道大邱ニ約二千坪ノ煙草試作場ヲ創設シ朝鮮葉、日本葉及米國葉各種ノ試作ヲ施行セリ

因ニ四十一年中ニ於ケル韓國輸入煙草ノ價額ヲ舉クレハ日本煙草七十萬八千餘圓、清國煙草十八萬三千餘圓其ノ他英、比、土、米、埃、露、佛、和、白、獨、壞等總計百十七萬餘圓ナリトス

(三) 酒類醸造試験

韓國在來酒ノ改良發達ヲ圖リ以テ酒造稅法施行ニ對スル財源涵養ニ資セシカ爲臨時財源調査局ハ明治四十一年ヨリ(一)在來酒ノ生産費減少(二)腐敗ノ防止(三)成酒歩合ノ増大ノ三方針ヲ以テ醸造試験ヲ行ヒ先ツ在來酒ノ麴子ヲ改良シテ朝鮮濁酒及燒酎ノ醸造ヲ試ミタルニ孰レモ其ノ香味在來品ノ特色ヲ失ハサル優良製品ヲ得タルノミナラス改良麴子ハ在來フモノニ比シ效力强大價格低廉ナルヲ以テ生産費減少、成酒歩合増大ノ二目的ニ稍適合スル好成績ヲ得タリ而シテ在來酒腐敗防止ノ目的モ麴子ヲ改良ニ依リテ之ヲ

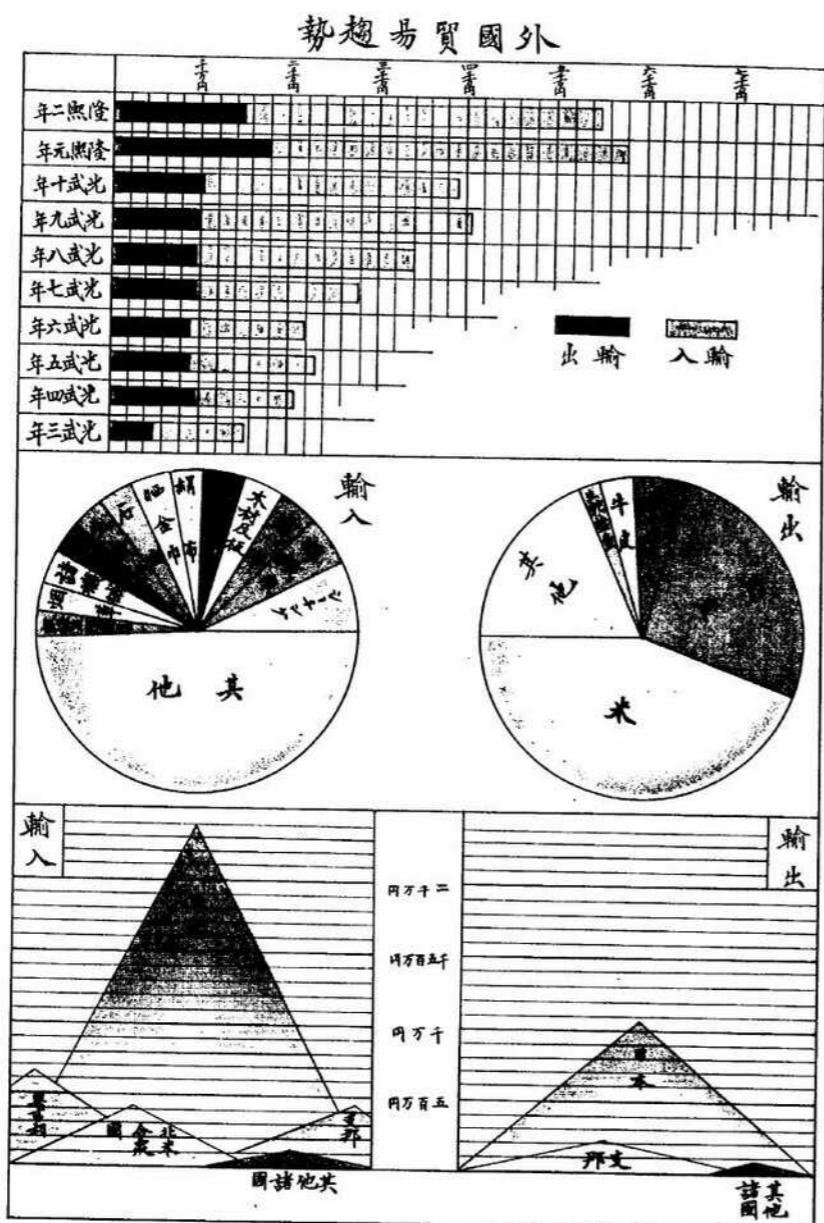
達シ得ヘキ見込アルヲ以テ更ニ研究ノ歩ヲ進メツツアリ同時ニ韓國產櫻桃實ニ就キ果實酒ヲ試釀シテ好成績ヲ得又蘆島園藝模範場栽培ノ葡萄實九種ニ就キ果汁ノ實性ヲ試験セシニ何レモ酵母ヲ含有シ且糖分及酸ノ含量共ニ優勝ナルヲ以テ佛獨產ニ劣ラサル葡萄酒ヲ製造シ得ルノ望アルカ如シ

第九節 會計検査

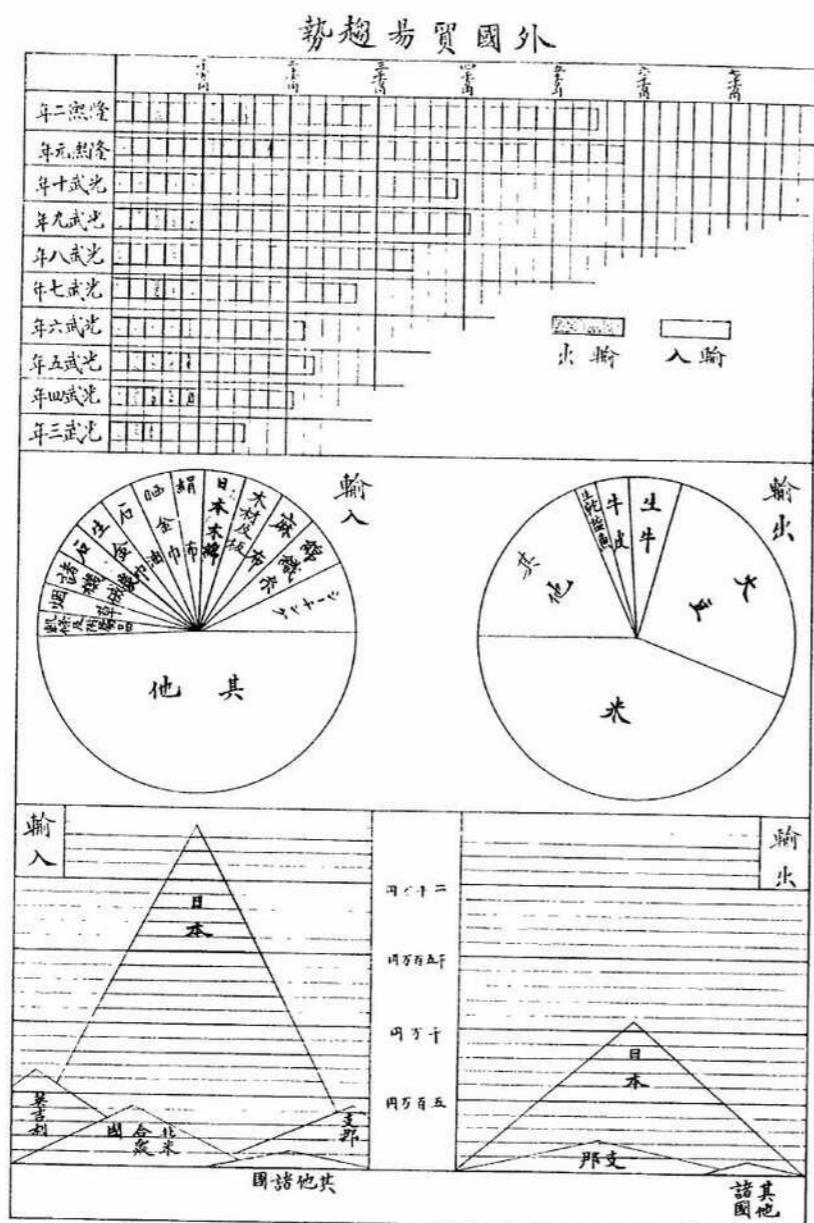
從來度支部内ノ一局タルニ過キサリシ會計検査局ハ明治四十一年一月ノ官制改正ニ依リ新ニ度支部大臣ノ管理ニ屬スル獨立ノ官廳トナリ爾來内ニ於テハ検査事務ニ關スル規定ヲ定メ外ニ對シテハ證明書類提出ノ督促ヲ嚴ニシ或ハ會計事務整理ニ關スル詳細ナル注意事項ヲ通達シ或ハ實地検査ヲ勵行シタル結果證明書類ノ提出漸次増加シ本年末ニ於テハ其ノ紙數三十萬枚ニ達シ實地検査ヲ行ヒタルモノ約九十箇所ニ及ベリ其ノ結果從來實効ヲ見サリシ會計諸法規ノ精神モ本年ニ於テハ日本人官吏ノ聘傭及諸般政務ノ刷新ト相俟テ漸ク各官廳ニ徹底シ歲出ノ經理ニ至リテハ各廳共其ノ手續帳簿等ノ整備ニ勵精シ不當支出極メテ少ク漸ク完成ニ近ツケルヲ見ル其ノ他歲

入ノ經理、物品會計、歲入出外現金出納ノ如キモ漸々整理ノ緒ニ就クニ至レリ

露光量違いにより重複撮影



露光量違いにより重複撮影

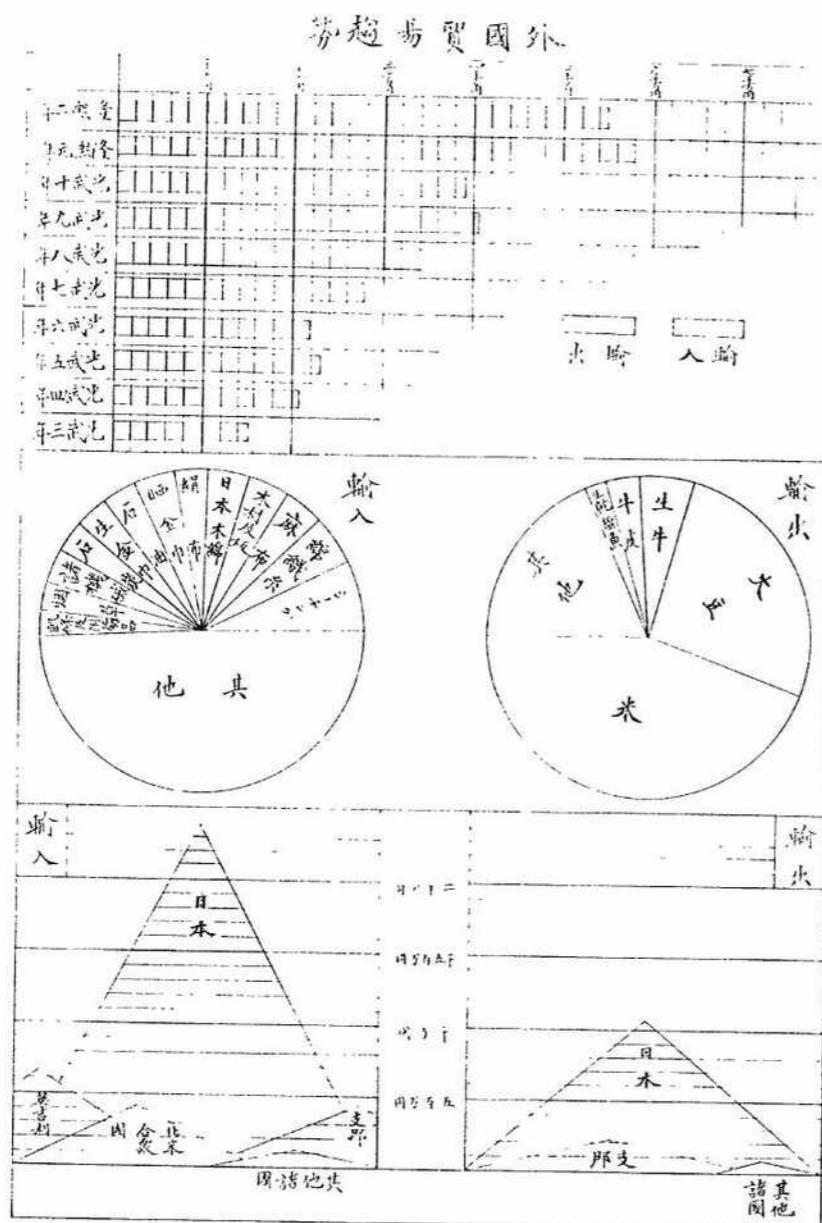


入の經理物品會計、歲入出外現金出納の如キモ漸々整理ノ緒ニ就クニ至リ

露光量違いにより重複撮影

外國貿易量合計、或は出港現金出納額、如く、官理の事項、就て、主として

第十一章 通



第十一章 外國貿易

第一節 外國貿易ノ趨勢

(二) 輸出入ノ減少

明治四十一年中ニ於ケル韓國貿易ハ其ノ總額五千五百十三萬餘圓、内輸出品價額一千四百十一萬餘圓、輸入品價格四千百二萬餘圓、輸入ノ輸出ニ超過スルコト二千六百九十一萬餘圓ニシテ依然韓國貿易ノ特色ナル輸入超過ノ趨勢ヲ持續セルノミナラス其ノ超過額ノ多キ韓國開港以來未曾有ノ巨額ニ達セルヲ見ル之ヲ前年ニ比較スルニ輸出ニ於テハ二百八十八萬餘圓即テ壹割七分弱、輸入ニ於テハ四十一萬餘圓即テ約壹分、總額ニ於テ三百三十萬餘圓即テ六分弱ノ減少ヲ示セリ韓國貿易ハ近年著シク増進ノ趨勢ヲ呈シ近クハ清津ノ開港、監視署ノ增設及日本移住民ノ增加等貿易増進ノ素因アリシニ拘ラス本年ニ於テ斯ノ如キ減額ヲ見ルハ主トシテ前年ノ貿易カ日露戰後ノ影響ニ伴フ特殊ノ膨脹ヲ爲シタル反動ト東洋諸國全般ノ不景氣トニ基因スルモノニシテ夫ノ暴徒騷擾ニ基ク交通運輸ノ支障、韓國徵稅方法ノ變動ニ伴フ地方

金融狀態ノ變調、韓國輸出貿易上ノ最重要品タル米穀ノ輸出ノ減少及紅蓼ノ輸出殆ト絕無ナリシヨト等ノ如キ亦其ノ原因ヲ爲セリ然レトモ各通商國ニ就キテ之ヲ觀察スレハ本年貿易額ノ減少ハ主トシテ日清兩國ニ對スル貿易ノ減退ニ起因シ其ノ他ノ通商諸國トノ貿易ハ輸出入共概シテ增進セルナ見ル殊ニ輸入貿易ハ日本ヨリノ輸入減少額三百三十萬圓ニ及ヒタルニ拘ラス總計ニ於テ輕微ノ減少ニ止マリタルナ見ルセ諸外國ノ輸入額增加ノ度ヲ知ルニ難カラス而シテ右貿易減退ノ諸原因ハ皆一時的的事情ニ胚胎セルモノナルヲ以テ日清兩國ノ商況回復セハ韓國貿易ノ再ヒ増進ノ趨勢ヲ持續スヘキヤ明ナリ況ヤ本年ノ貿易額ハ昨年ノ貿易額ヲ除外セハ之ヲ何レノ既往年次ニ對比スルモ多額ノ増加ヲ示シ更ニ之ヲ最近五箇年間平均貿易額ニ比スルモ輸出ニ於テ三割八分強、輸入ニ於テ三割六分八厘ノ増進ヲ表ハスニ於テオヤ故ニ本年ノ貿易モ商況ノ不振殆ト世界全般ニ瓦レル際ニ於テハ寧ロ好成績ト謂フヘシ

(二) 日韓貿易

明治四十一年ノ日韓貿易ハ其ノ價額前年ニ比シ多額ノ減少ヲ示シ本年ノ韓

國貿易減退ノ主因ヲ爲セリ其ノ減額ハ韓國ヨリノ輸出ニ於テ二百二十一萬圓即ケ一割七分強、日本ヨリノ輸入ニ於テ三百三十二萬餘圓即ケ一割二分強ニ達セリ而カモ日韓貿易額ハ韓國ノ貿易總額ニ對シ尙輸出ニ於テハ七割七分六厘、輸入ニ於テハ五割八分六厘、全額ニ於テ六割三分五厘ヲ占メ日本ノ韓國貿易ニ於ケル位地ハ依然トシテ諸外國ニ卓越セリ由來日韓貿易ハ年々増進ノ趨勢ヲ現ハシ來リシニ本年ニ於テ前記ノ減少ヲ見タルハ主トシテ日本ニ於ケル商況ノ不振ト米穀ノ比較的豐作トニ因ルモノナリトス即チ對日輸出重要品中其ノ價額ノ減少最モ多キハ米穀ニシテ米百四十二萬餘圓、大豆六十三萬餘圓、小麥二十五萬餘圓ヲ減シ其ノ他重要輸出品全般ニ瓦リテ多少ノ減額ヲ見サルナキノ狀況ヲ呈シ輸入重要品ニ在リテハ石炭ノ五十六萬圓、大豆六白木綿ノ四十萬圓、セメントノ三十七萬圓、材木及板ノ三十一萬圓、各種織物ノ九萬圓等輸入減少ヲ示スモノ亦甚多ク遂ニ前記ノ減額ヲ見ルニ至レリ

(三) 對清貿易

對清貿易ハ對日貿易ニ亞キ本年ニ於ケル韓國貿易減退ノ主因ヲ成シ清國ヨ

リノ輸入ニ於テ四十一萬圓ヲ增加シタルモ韓國ヨリノ輸出ニ於テ百一萬餘圓ヲ減少シ差引六十萬餘圓ノ減額ヲ示セリ輸出ノ減少ハ銀價低落ニ基ク清國商況ノ不振ニ起因セルモノニシテ即チ輸出重要品中米其ノ他ニ在リテハ前年ニ比シ多少ノ増加ヲ見タルモ紅蓼ノ輸出絶無ニシテ百二十萬餘圓ヲ減シタルカ爲遂ニ前記ノ減少ヲ來タセリ而シテ輸入ノ増加ハ絹紬七十四萬圓等ノ減少アリシニ拘ラス絹紬ノ二十九萬圓、材木及板ノ十三萬圓、食鹽ノ十一萬圓其ノ他增加ヲ示セシ重要品多カリシニ由レリ

(四) 通商各國ノ位地

日本ヲ除ク諸外國ノ本年ノ韓國貿易ニ對スル位地ハ輸出ニ於テハ清國第一位ヲ占ムルモ其ノ輸出額ノ輸出總額ニ對スル割合ハ尙一割六分ヲ出テス之ニ亞クハ露領亞細亞ナルモ其ノ割合ハ僅ニ五分強ニ過キス其ノ他ノ諸外國ニ在リテハ何レモ價額七萬圓ヲ超ユルモノナシ而シテ輸入ニ於テハ英國第一位ヲ占ムルモ其ノ輸入額ノ輸入總額ニ對スル割合ハ一割五分四厘強ニ止マリ清國ノ一割二分弱合衆國ノ一割強之ニ亞キ其ノ他ハ獨逸ノ三十九萬餘

圓ヲ除クノ外何レモ十三萬圓以下ノ少額ニ屬ス此等諸外國中歐米通商諸國ノ本年ニ於ケル貿易額ハ其ノ增進極メテ顯著ニシテ輸入ニ於テ獨逸ハ約六倍佛國ハ二倍半強、合衆國ハ二割七分、白耳義ハ二割五分、英國ハ二割三分ノ増進ヲ示シ輸出ニ於テハ日清及露領亞細亞ヲ除ク諸外國ノ前年ニ於ケル輸出額ハ總計一萬二千圓ヲ出テサリシニ本年ハ一躍十二萬圓ニ及ヘリ其ノ増進ノ斯ノ如ク顯著ナルハ輸入ニ於テハ邦人移住ノ劇增ト鐵道其ノ他文明機關ノ發展ニ伴フ諸機械類ノ需用増進並韓人間ニ於ケル歐米貨物ノ需用促進トニ因リ輸出ニ於テハ韓國最重要輸出品タル米穀ノ漸ク歐米市場ニ其ノ販路ヲ開キタルト韓國富源開發ノ進歩ニ伴ヒ金鑛、鐵鑛、石炭、黑鉛等ノ礦產物ノ漸ク重要輸出品ノ目ニ加ハリ累年増進ノ趨勢ヲ示スニ至レルニ由ル然レトモ韓國輸出品カ全ク天產物若クハ粗製品ニ限ラルルハ亦注目スヘキ一事項ニ屬ス

(五) 金銀及紙幣ノ輸出入

明治四十一年ノ金銀出入額ハ輸出五百二萬餘圓、輸入三百五十二萬餘圓ニシテ其ノ輸出超過額ハ百五十萬餘圓ナリ之ヲ前年ニ比スルニ輸出超過額ニ於

テ二百五十一萬餘圓ノ減少ヲ示セリ紙幣ノ輸出入高ハ輸出百八萬餘圓、輸入八百八十七萬餘圓ニシテ輸入超過額七百七八萬餘圓ナリ之ヲ前記金銀輸出超過額ニ通算スルモ尙六百二十八萬餘圓ノ輸入超過ヲ示セリ斯ノ如ク韓國ニ於ケル金銀及紙幣輸出入ノ外國貿易ノ大勢ニ並行セサルハ日露戰役以來馳致セル趨勢ニシテ日本ニ於テ鑄造セル韓國新金銀貨幣ノ輸入、在韓日本諸官署及駐劄軍隊ノ經費ニ充ツヘキ貨幣ノ流入、日本政府及日本興業銀行等ヨリノ韓國政府借入金ノ移入其ノ他日本移住民ノ劇増ニ伴フ投資金ノ増額等ニ基因ス

金銀及紙幣ノ輸出入ハ本年ニ於テモ日本ノ獨占ニ屬シ日本以外ニ於テハ清國ニ對スル輸出三十七萬餘圓、輸入七十五萬餘圓及露領亞細亞ニ對スル少額ノ輸出入アルノミ

第二節 稅關

(一) 稅關ニ關スル施設

稅關管轄區域ハ從來沿岸ノミニ限レルモ前年韓國鐵道連帶輸送開始以來之

カ爲關稅警察上少カラサル不便ヲ感スルニ至リタルヲ以テ本年一月ヨリ廣ク内地ニ瓦リテ區劃スルコトトシ仁川稅關管轄區域ヲ全羅北道、忠淸南道、京畿道、黃海道(長山串以南)ニ、釜山稅關管轄區域ヲ慶尙南北兩道、全羅南道ニ、元山稅關管轄區域ヲ江原道、咸鏡南北兩道ニ、鎮南浦稅關管轄區域ヲ黃海道(長山串以北)平安南北兩道ニ改正シ又本年四月一日淸津開港ノ結果同地稅關監視署ヲ廢シテ稅關支署ヲ設置シ尙同月十日慶尙南道沿岸ニ於ケル密貿易及密漁取締ノ爲同道蔚山、多太浦、舊馬山浦、長承浦及統營ノ五箇所ニ稅關監視署ヲ増設セリ

(二) 稅關工事

韓國稅關工事ハ本年一月ヨリ臨時稅關工事部ノ管掌ニ歸シタリシカ同年八月同部ノ廢止ト共ニ建築所ノ所管ニ移レリ本年末ニ於ケル工事進捗ノ程度ヲ示セハ群山、木浦及京城ノ三稅關工事ハ殆ト竣工ヲ告ケ鎮南浦稅關工事ハ舊設計ノ分九分弱、釜山稅關工事ハ六分弱、新義州稅關工事ハ五分強、元山稅關工事ハ五分弱、仁川稅關工事ハ四分強、淸津稅關工事ハ九厘強ノ功程ヲ示シ城津、大邱及馬山ノ三稅關工事ハ尙設計中ニ屬ス稅關工事ハ明治三十九年以降

五箇年ニ瓦ル繼續工事ナリシモ本年ニ於テ仁川稅關工事ナ一箇年、鎮南浦稅關工事ナ三箇年延長セシ爲四十六年ニ至ル八箇年繼續事業ニ變更シ工事費ハ特ニ鎮南浦工事擴張等ノ爲百二十五萬餘圓ナ增加シ總額四百九十萬餘圓トナレリ其ノ内四十一年末迄ノ支出額累計百五十三萬餘圓ナリトス

第三節 清津ノ開港

從來北韓輸入ノ貨物ハ元山若ハ城津ニ於テ一旦陸揚シ通關手續ヲ經タル後更ニ船舶ニ依リ西湖津、清津若ハ雄基ニ輸送セサルヲ得サル不便アリ加之咸鏡南北兩道ノ境域ニアル摩天嶺ノ天險ハ全然陸上ノ交通ヲ遮断セルヨリ物產豊富ナル北韓ノ地モ爲ニ適當ナル輸出ノ關門ヲ闕キ豆滿江沿岸及間島ニ於テ生産スル大豆粕ノ如キ年々遠ク浦鹽ヲ迂迴シテ日本ニ輸出セラルルノ奇觀ヲ呈スルニ至レリ由ツテ韓國政府ハ明治四十一年二月勅令ヲ以テ同年四月一日ヨリ咸鏡北道富寧郡清津ヲ開放シテ外國通商港トナスコトトシ尋テ勅令ヲ以テ清津土地規則及清津官有地賣下規則ヲ公布シ同地開港ト共ニ清津稅關監視署ヲ廢シテ清津稅關支署ヲ設置シ倉庫機橋等應急ノ開港設備

ヲ遂行シ以テ北韓及間島ニ對スル物資輸出入ノ途ヲ開キ兼テ北韓開發ノ前途ニ一大光明ヲ加ヘタリ爾來同港貿易ハ著々其ノ歩ヲ進メ四十一年末ニ於テハ(開港後九箇月間ノ貿易成績)輸出ニ於テハ二千四百餘圓ヲ出テサリシモ輸入ニ於テハ一躍四十三萬六千餘圓ニ達シ遙ニ馬山及城津ヲ凌駕スルニ至レリ

因ニ本年末現在開港場ハ京城、仁川、釜山、元山、鎮南浦、群山、馬山、木浦、城津、清津及平壤ノ十一箇所ニシテ龍山ハ京城ノ開港區域内ニ含マル

第四節 船舶

本年出入外國貿易船舶ハ入港ニ於テハ汽船三千七百五十隻、帆船八百二十八隻、ジャンク約四千隻、此ノ總噸數二百九十八萬餘噸、出港ニ於テハ汽船三千七百五十六隻、帆船七百四十六隻、ジャンク三千七百餘隻、此ノ總噸數二百九十七萬餘噸ニシテ前年ニ比シ出入港共各十萬乃至十一萬噸ノ減少ヲ示セリ但前年ノ船舶噸數ハ沿岸貿易船ノ噸數ヲ含メルモノナルヲ以テ實際ニ於テハ大差ナキモノトス

出入船舶中日本船舶ハ依然其ノ大部分ヲ占メ其ノ噸數出入共各二百六十七萬餘噸即テ總噸數ノ約九割ヲ占ム而シテ之ニ亞クハ英國船舶ニシテ其出入各十一萬餘噸ナリトス

第五節 航路標識

明治四十一年中ニ於テ起工竣成シタル航路標識ハ大同江口避島及纂島兩燈臺、慶尙北道冬外山燈臺、咸鏡南道城津燈臺、鎮南浦港内ビーバル島燈臺、忠淸南道モグダ島及格列飛島兩燈臺、全羅南道港門島燈臺、仁川内港港口浮標、群山港浮標、馬山浦藍浦灣浮標、慶尙南道見乃梁海峽航路標識、月尾島導標等ニシテ同年末現在航路標識數ハ燈臺二十三基、燈竿四基、挂燈立標四個、挂燈浮標三個、浮標五十二個等ナリトス

第十二章 產業

第一節 農業

(二) 勸業模範場

水原勸業模範場ハ本年一月群山及平壤ニ、四月大邱ニ各一箇所ノ出張所ヲ増設セシモ四十二年ニ於テハ全羅南北兩道ニ種苗場ノ新設アリタル爲群山、木浦ノ兩出張所ヲ廢止セリ

同模範場及各出張所ニ於ケル本年ノ稻作試驗ニ依ル試作水田一反歩平均收穫高ハ水原本場ハ撰種田糲二石九斗、原種田糲三石三斗六升、普通田一等區糲四石五斗、木浦出張所ハ日本種十種平均ニ於テ玄米二石三升、韓國種六種平均ニ於テ玄米一石八斗六升、大邱出張所ハ糲三石三斗五升、平壤出張所ハ玄米一石九斗七升、群山出張所ハ玄米一石八斗一升ナリトス

水原本場ニ於ケル畑作試驗ハ夏季中雨量過多ナリシ爲成績概シテ佳良ナラサリシモ其ノ主要畑作物ハ一反歩平均陸稻二石七斗四升、蕎麥一石五斗六升、大豆一石七斗八升、小豆八斗一升ノ收穫ナ得タリ同場ニ於ケル養蠶試驗ハ夏

蠶秋蠶共概シテ好良ノ成績ヲ舉ケ秋柞蠶山野放養ノ實驗モ成績佳良ニシテ五割八分ノ結蘭歩合ヲ示セリ

同場及各出張所ニ於テハ尙大小麥類蔬菜類ノ種子及草莓、果樹類ノ種苗、桑苗、家蠶種、柞蠶種及仔畜等ノ配付ニ力ヲ盡シ、畜產飼養ヲ試ミ、小作人稻作立毛品評會ヲ開キ又ハ各地ノ農產物品評會ニ各種ノ標本ヲ出陳スル等百方農事改良ノ獎勵ニ努メタルニ其ノ效果顯著ニシテ來觀者日ニ多キナ加フルニ至リ

(二) 園藝模範場

明治四十一年中蘇島園藝模範場ニ於ケル各種蔬菜生育ノ狀況ハ概シテ佳良ナリシカ殊ニ茄子、葱、瓜哇薯、南瓜、甘藍ノ成育ハ最モ良好ニシテ菜豆、豌豆、胡瓜胡蘿蔔ノ成績之ニ亞ケリ菜荳、萵苣ノ二種ニ就テハ速成栽培ヲ試ミタルニ氣溫最低零下十四度ニ下降シタルニ拘ハラス極メテ好成績ヲ得タリ果樹モ生育一般ニ佳良ニシテ殊ニ葡萄ハ未タ嘗テ見サル旺盛ノ結實ヲ爲セリ

同場ニ於テハ同年春季ニハ梨、桃、葡萄、苹果等ノ苗木計六千三百餘本ノ切接ヲ爲シ夏季ニハ桃、梨、苹果其ノ他諸雜種ノ苗木計九千七百餘本ノ芽接ヲ爲シ又

葱、玉葱、牛蒡、甘藍、大根、蕪菁、白菜、草苺、草花、瓜哇薯等ノ種苗ヲ配付セリ

(三) 臨時棉花栽培所

韓國政府ハ明治四十一年三月臨時棉花栽培所官制ヲ公布シテ從來棉花栽培協會ニ依嘱經營セシメタル棉花栽培事業全部ヲ同政府ニ於テ直營スルコトトシ從來ノ棉採種圃七箇所ヲ農商工部ニ移屬セシム更ニ京城東大門外、全羅南道南平、忠清北道永同、忠清南道燕岐、慶尙北道大邱及慶尙南道晋州ノ六地ニ各一箇所ノ棉採種圃ヲ增設セリ而シテ本年ノ栽培反別ハ各圃總計約百九十六町步ナリ

本年ハ棉作ニ對シテハ氣候不良ニシテ其ノ作況一昨年ニ比スレハ稍良好ナルモ昨年ニ比スレハ大ニ劣リ前記栽培反別ニ對スル收穫量十二萬四千三百餘斤ニ過ギス各採種圃ニ於テハ陸地棉ノ改良普及ヲ勸奨スル外米、麥、養蠶其他一般農事ノ改良ニ就テモ亦各地方適切ノ施設ヲ行ヘリ

(四) 種苗場

韓國政府ハ明治四十一年三月種苗場官制ヲ公布シテ農商工部管理ノ下ニ種苗場ヲ新設シ種子種苗ノ育成配付ノ事務ニ當ラシムルコトトシ咸鏡南道咸

興、慶尙南道晋州ニ各一箇所ノ種苗場ヲ設置シ四十二年二月更ニ同官制ヲ改正シテ全羅南道光州、全羅北道全州、黃海道海州、平安北道義州、咸鏡北道鏡城ノ五地ニ各一箇所ノ種苗場ヲ増設セリ。

一、晋州種苗場 同場ニ於テハ主トシテ稻ノ試作、桑及蔬菜ノ栽培並附近地方ノ農況調査等ニ努メ又農事試験ヲモ行ヘリ尙附近農民ニ對シテハ實地ニ就テ螟蟲驅除、稻扱使用等ノ方法ヲ説示シ又ハ早神力種ノ稻種ヲ配與シテ其ノ優良ナルヲ實驗セシメシニ農民ニ於テモ同場作物ノ概シニ成育優良ナルヲ目撃シテ漸ク農事ノ改良殊ニ種苗選定ノ利益ヲ覺リ進テ種子ノ分與ヲ乞フニ至レリ。

一、咸興種苗場 同場設置ノ當初附近農民ハ同場ニ對シ一種疑悞ノ念ヲ懷キシモ漸次農事改良ノ必要ヲ覺リ同場ヲ信賴スルノ傾向ヲ呈シ來レリ管内地方ハ概々蠶桑ニ適シ本春蠶種桑苗配付後ノ成績良好ナルヲ實見シ爲ニ其ノ下付ヲ出願スル者少カラサルニ由リ再ヒ桑苗二萬本ヲ購入配付セリ。

(五) 觀測所

韓國或府ハ明治四十一年四月觀測所官制ヲ公布シ其ノ際廢止ニ歸シタル六

箇所ノ統監府觀測所ヲ無償ニテ借受ケ從來ノ農商工部所管測候所三箇所ト合セテ之カ經營ニ著手シタルモ未タ以テ全韓ノ氣象ヲ詳悉スルニ足ヲサルニ由リ理事廳、鐵道管理局、模範場、燈臺局、陸軍病院等ニ依囑シテ簡易觀測ヲ施行シタルモノ四十五箇所ニ及ヒ爲ニ營農上多大ノ裨益ヲ與ヘタリ又同年九月ヨリ仁川港内月尾島ニ暴風雨標掲場ヲ創設シ尙暴風警報及天氣豫報ヲ船舶其ノ他公衆一般ニ普知セシムル爲メ京城龍巖浦及各開港地(淸津ヲ除ク)ノ十箇所ニ信號所ヲ設ケタリ此等信號所及測候所ハ日々觀測ノ結果ヲ相互交換シ且日本及淸國ニ於ケル觀測所トモ聯絡ヲ保テリ

(六) 東洋拓殖株式會社

日韓兩國政府ハ明治四十一年八月東洋拓殖株式會社法ヲ公布シ十月同會社定款ヲ認可シ十二月總裁以下理事及監事ヲ任命シ同社ハ茲ニ始テ其ノ成立ヲ告クルニ至レリ。東洋拓殖株式會社ハ韓國ノ富源ヲ開發シテ同國ノ財政經濟安固ノ基礎ヲ建ツルノ趣旨ヲ以テ同會社法ニ基キ設立セラレ韓國ニ於ケル農業、拓殖ノ爲必要ナル日韓移住民ノ募集及分配、拓殖上必要ナル資金ノ供給等ノ業務ニ從事

シ附帶事業トシテ韓國ニ於テ水產業、荷爲替業、其ノ他拓殖上必要ナル事業ヲ營ミ資本金ヲ壹千萬圓トシ設立後八箇年間ヲ限り帝國政府ヨリ毎年金三十萬圓ノ補給ヲ受クルモノニシテ四十二年一月其ノ事務ヲ韓國京城ニ開始セリ同社株式總數中韓國政府ノ引受ニ屬スル六萬株ハ土地出資法ニ依リテ之カ拂込ヲ爲スノ規定ニシテ同政府ハ四十二年四月第一回拂込トシテ驛屯土田一千八百三十町歩烟六百六町歩ヲ同會社ニ引渡セリ

(七) 國有未墾地ノ處理

農商工部ハ明治四十一年一月國有未墾地事務局ヲ廢シ同部農務局内ニ國有未墾地課ヲ設ケテ其ノ事務ヲ引繼ケリ同年中ニ於ケル國有未墾地貸付請願數ハ總計八百六件、此ノ面積六萬二千八百餘町步ニシテ同年中ニ許可ヲ與ヘタルモノ日本人十五件韓人五十一件合計六十六件此ノ面積四千餘町步ナリ此ノ外國有未墾地利用法公布前未墾地利用ノ許可ヲ受ケタルモノニ對シ四十一年中ニ於テ成規ノ認證ヲ與ヘタル件數總計韓人十四件ニシテ其ノ面積二千五百九十餘町歩ナリトス

第二節 商工業

(一) 普通會社及商事組合

韓國ニ於テハ普通會社設立ノ請願ヲ爲スモノ近年漸ク多キヲ加フルモ其ノ大部分ハ獨占的特許ヲ受ケムトスルモノ若ハ資力薄弱ノモノナルヲ以テ從來其ノ設立ヲ認許セシモノ極メテ少ク明治四十年中ニ於テハ請願件數四十四件中認許ヲ與ヘシハ僅ニ二件ニシテ四十一年中ニ於テハ出願件數五十三件中僅ニ八件ノ認許ヲ與ヘタルニ過キス此ノ外從前ノ認許ニ係ル會社六十九有餘ニ及フモ多クハ種々ノ弊竇ニ浸染シ有名無實ノモノ少カラス韓人ノ會社組織ニ關スル知識ハ極メテ幼稚ナルヲ以テ之ニ適切ナル法規ヲ制定セムカ爲目下其ノ調查考究中ニ屬ス商事組合ニ關シテハ本年七月典當業者商事組合ノ設立ヲ、八月紙物商組合ノ設立ヲ認可セリ其ノ他各種ノ商業ニ就テモ實地ノ狀態ヲ調査シ相當監督ノ下ニ同業組合ノ設立ヲ促スノ方針ナリ

(二) 市場

韓國ニ於ケル商業ハ主トシテ市場ニ於テ行ハレ其ノ數全國ヲ通シ八百ヲ超

エ京畿一道ノミニテモ其ノ取引高一箇月平均約四十萬圓ニ上リ其ノ消長ハ韓國經濟ニ影響スル所少カラス由テ市場ノ新設又ハ其ノ位置ノ變更ハ從來地方官限リ之ヲ處分セシモ本年末之ヲ改メテ總テ農商工部ノ指揮ニ依ラシムルコトトシ同時ニ市場ニ關シテハ成ルヘク舊慣ヲ尊重スヘキコトヲ各地方長官ニ訓令セリ

(三) 商品陳列館

商品陳列館ハ本年五月農商工部構内ニ開館セリ其ノ規模設備等未タ見ルヘキモノナキモ漸次内外ノ物產ヲ聚集シ特ニ日韓貿易ノ媒介者タラシムルノ企畫中ナリ

(四) 道府物產陳列場

農商工部ハ四十一年十一月產業獎勵ノ一端トシテ金一萬四千圓ヲ支出シ各觀察道及漢城府内ニ小規模ノ物產陳列場ヲ設ケシムルコトトシ爾來四十二年六月迄ニ略之カ設備ヲ了シテ一般ノ縱覽ニ供セルモノハ全羅北道、慶尙北道、平安南、北道及江原道ノ五觀察道ニシテ内外農產、林產、水產、礦產物及工藝品等ノ出品點數總計三千九百餘點ニ達セリ

(五) 航路補助

農商工部ハ四十一年五月釜山汽船株式會社經營ノ釜山、迎日灣、木浦、濟州間ノ沿岸航路ニ對シ本年ヨリ向フ三箇年間一箇年三萬圓宛ノ補助金ヲ下付スルコトトシ又八月末個人經營ニ係ル釜山、元山、雄基灣間及西湖津、江陵間ノ沿岸航路ニ對シ向フ三箇年間一箇年一萬七千十九圓宛ノ補助金ヲ下付シ且五百噸以上ノ汽船一隻ヲ貸與スルコトト爲シ越エテ四十二年一月末個人經營ニ係ル木浦、群山、萬浦、濟州、長興、法聖浦間ノ沿岸航路ニ對シ向フ三箇年間一箇年一万四千八百圓ノ補助金ヲ下付スルコトト爲セリ此ノ補助金合計一箇年六萬一千八百十九圓ナリトス

(六) 度量衡

明治四十一年現行ノ韓國度量衡法ハ三十八年改正ノモノニ係ルト雖條文尙不備ノ點多キナ以テ四十二年九月更ニ之ヲ改正シテ新度量衡法ヲ公布シ其ノ名稱命位ハ總テ日本ノ制度ト同一ト爲シ、度量衡器ハ政府ノ專賣トシ、日本官廳ニ於テ検定シタル度量衡器ニシテ政府ノ特許ヲ受ケタルモノニ限り之ヲ輸入販賣スルヲ得ルコトトシ同時ニ本府令ヲ以テ同法ハ之ヲ在留本邦人

第十二章 產業

一一六

ニモ適用スルコトセリ

(七) 特許登録

明治四十一年八月統監府特許局開廳當日ヨリ同年度末ニ至ル特許、意匠、商標及著作権ノ登録出願數ハ總計七百二十四件ナリ其ノ内出願數ノ最モ多キハ商標ノ登録ニシテ總數ノ約七割五分ヲ占ム出願件數ノ國籍別明細左ノ如シ

自明治四十二年三月三十一日登録出願件數國籍別表

國籍別	米韓日	米韓日
特許	人	人
意匠	一五	一六四
匠商	一三	一三
標著作權	四五〇	四七三
計	七三四	六五四

右ノ内同年度ニ於テ處分ナシタルモノ四百七十四件、内登録ヲ許可シタルモノ二百七十六件、登録ヲ拒絶シタルモノ百八十一件、無効又ハ取消トナリタルモノ十七件ナリトス今登録許可件數ノ國籍別明細表ヲ舉クレハ左ノ如シ

至同明治四十二年三月三十一日登録許可件數國籍別表

國籍別	米韓日	米韓日
特許	人	人
意匠	八六一	八五
匠商	九一九	一
標著作權	一七五	二三七
計	六一四	二三五
	二七六	四
	三七	

再審査及審判ノ請求ハ開局後日尙淺キナ以テ其ノ數極メテ少シ
本年度ニ於ケル特許局收入ハ總計六千二百餘圓ニシテ其ノ内商標料二千五百餘圓、商標出願手數料千四百餘圓ナ以テ最多額トス

第三節 鑄業

(二) 鑄業法ノ改正

韓國政府ハ隆熙二年即テ明治四十一年七月法律第十一號及第十二號ヲ以テ
鑄業法及砂鑄採取法ノ一部ニ改正ナ加ヘ鑄業權ノ讓渡及其ノ抵當權ノ設定

ニハ主務大臣ノ許可ヲ要セアルコトトシ且舊法中政府カ鑛業許可ノ取消ヲ爲ス場合ヲ削減セリ又八月法律第二十一號ヲ以テ金、銀及銅ノ鑛業ニ必要ナル機械、器具、爆發藥及化學藥料ノ輸入稅并銅及金、銀、銅鑛石ノ輸出稅ハ其ノ鑛業者ノ輸出入ニ係ル場合ニ限り當分ノ間之ヲ免除スルコトトシ以テ韓國鑛業ノ發展ヲ安固ナラシメ兼テ斯業ニ對スル外資輸入ノ便宜ヲ圖レリ

(二) 鑛業經營ノ現狀

明治四十一年中ニ於ケル鑛業出願數ハ總計二百二十八件ニシテ其ノ内同年中許可セラレタルモノノ國籍別表ヲ示サハ左ノ如シ

明治四十一年中許可鑛業并砂鑛採取權國籍別表

種別 國籍 別 計	鑛業 權許可數	砂鑛 採取權許可數	種別 國籍 別 計	人 韓人 人 共日 韓人 人 同 米人 人 共日 獨人 人 共日 獨人 人 計
	二三九	三四	二	五
			八	四
			一	一
			一	一
			一	一
			一	一
			一	一
			一	一
			三七	三三
			一六〇	一六〇

四十二年上半期ニ於ケル許可シタル件數ハ百件ニシテ同年六月末日現在ノ鑛

業及砂鑛業許可件數ハ總計四百三十八件ニ達シ内砂金採取ノ百六件ヲ最多トシ黒鉛鑛ノ六十五件金鑛ノ六十四件鐵鑛ノ三十八件及銅石炭ノ各三十件順次之ニ亞カリ今鑛業及砂鑛業ノ許可ヲ受ケタル者ノ國籍別表ヲ示サムニ左ノ如シ

四十二年六月末日現在鑛業並ニ砂鑛業許可國籍別表

種別 國籍 別 計	鑛業 業 人 韓人	人 韓人 共日 同 米人	人 韓人 共日 獨人 人 伊人	人 韓人 共日 獨人 計
	二四六	四八	一〇七	三三一
砂 鑛 業	二四六	四八	一〇七	三三一
計	三二三	七〇	一〇七	三三一
	六六	一三	二二	三三一
		七〇	二五	三三一
		一三	二六	三三一
		五二	一四	三三一
		一七	八一	三三一
		六	一六	三三一
		一六	六	三三一
		六	一六	三三一
		二	一一	三三一
		一一	一	三三一
		一一	一	三三一
		四三八	一〇七	三三一
			三三一	三三一

(三) 鑛產額

明治四十一年中ノ鑛產價額ハ金鑛(概算)三百七萬一千八百餘圓、鐵鑛三十五萬九千八百餘圓、砂金二十四萬一千三百餘圓、石炭二十一萬一千五百餘圓、黑鉛鑛十五萬二千七百餘圓等ヲ其ノ主ナルモノトシ價額合計四百四萬八千七百餘圓ニ達セリ鑛業法施行後ニ於ケル民營鑛山ノ鑛產價額ハ(但シ雲山金鑛ノ產

額ヲ除ク四十年ニ於テハ十五萬八千八百餘圓ナリシニ四十一年ニ於テハ五十萬四千八百餘圓ニ増進セリ各鑛物中黑鉛產額ノ增加ハ特ニ注目スヘキモノアリ即ナ四十年ニ於テ百三十六萬九千斤ナリシモノ四十一年ニ於テハ殆ト其ノ十倍ニ達シ千二百九萬九千餘斤ヲ採掘セリ是レ韓國產ノ黑鉛カ漸ク海外ニ知ラレタルノ結果ナリトス黑鉛產地ノ主ナルモノハ忠清北道ノ沃川、青山兩郡ヨリ慶尙北道ノ尙州、咸昌、聞慶ノ諸郡ニ連亘セル地域江原道江陵郡及咸鏡南道永興、定平ノ二郡ナリトス

(四) 鑛業ト外國人

鑛業法施行前ヨリノ外交懸案タリシ歐米人要求ノ諸鑛山ハ英國滿州「シンデイグート」要求ノ明太洞鑛山ヲ除クノ外ハ皆本年内ニ於テ同法ノ適用ヲ受ケシムル條件ノ下ニ當該要求者ニ其ノ權利ヲ附與スルコトニ協定セリ四十二年ニ於テ「ユールブラン、ボストウヰック」商會ハ咸鏡南道甲山郡ニ於テ鑛區四箇所ノ選定ヲ伊國鑛山會社ハ平安北道厚昌郡ニ於テ鑛區三箇所ノ選定ヲ終リ孰レモ更ニ五箇年ノ期間ニ於テ逐次鑛區選定ヲ爲スノ權利ヲ與ヘラレ尋テ佛國人「サルダレル」モ亦平安北道昌城郡ニ於テ鑛區ノ選定ヲ終レリ

第四節 林業

(一) 森林ニ關スル法令ノ公布

韓國森林山野ノ保護經營及植林獎勵ノ目的ヲ以テ本年一月以降森林法、國有森林山野部分林規則、國有森林山野及產物處分規則、森林法施行細則等ヲ公布シ森林行政ニ關スル根本法規ヲ定メタリ又同年八月更ニ國有土石採取規則ヲ公布シテ國有森林山野及其ノ他ノ國有土地ニ於ケル土石採取ハ總テ農商工部ニ於テ處理スルコトセリ

(二) 林業經營ノ機關

明治四十一年一月農商工部改正官制實施ノ際新ニ山林局ヲ同部内ニ設置シ林業並國有林野ニ關スル事項ヲ掌理セシメ同年三月林業事務所官制ヲ公布シテ京城平壤大邱及水原ノ四箇所ニ林業事務所ヲ設置シ造林及森林調查ノ業務ヲ掌ラシムルコトトシ四十二年四月更ニ同官制ヲ改正シテ木浦及鏡城ノ二箇所ニ林業事務所ヲ增設セリ

(三) 模範造林

模範林ノ植栽ハ前年ノ成績良好ナリシヲ以テ四十年ニ於テハ更ニ其ノ事業ヲ擴張シ京城方面ニ五十町歩、平壤方面ニ七十九町歩、大邱方面ニ一百町歩合計二百二十九町歩ノ土地ヲ選定シ經費一萬三千三百餘圓ヲ投シテ樹木九十五萬四千三百餘本ヲ植栽セリ其ノ樹種ハ櫟、赤松、黑松、落葉松、山赤楊、擬明石屋等ニシテ成績何レモ佳良ナルカ就中大邱琵瑟山ニ於ケルモノ最優良ナリトス濟州島ハ其ノ氣候他ノ地方ニ生育セサル貴重樹種即ナ樟、杉、扁柏等ノ成育ニ適スルモノアルヲ以テ本年ニ於テ此等樹木ノ種子一斗二升ヲ同地方ニ播種セリ

四十二年春期ニ於テハ京城内外及開城、平壤、水原、大邱ノ各方面ニ於テ模範林ノ植栽ヲ施行シ其ノ大半ハ木式若ハ簡易式砂防植栽法ヲ用ヰタリ此ノ植栽面積二百四十九町歩、播種面積五十七町五反步、經費九千三百八十圓ニシテ植栽樹種ニハ赤松、黑松、山赤楊、杜松、明石屋、櫟、^{ボブラ}等ヲ、播種ニハ專ラ櫟ヲ選ヒ其ノ苗木數七十五萬九千餘本、種子量十九石ニ及ヘリ

苗圃事業ハ四十一年ニ於テ所定ノ擴張ヲ遂ケ平壤、水原及大邱ノ三苗圃ニ於

テ經費七千六百餘圓ヲ投シ櫟、黑松、赤松、赤楊、山檻、落葉松、山赤楊、樅、栗、擬明石屋等計三十餘種ノ種子四十五石餘ヲ播種シ赤松、黑松、櫟、山檻等計十種ノ苗木百四十八萬餘本ヲ床替シ^{ボブラ}、白楊、櫻、楓等合計一萬餘本ノ挿條又ハ移植ヲ爲セリ四十二年春期ニ於ケル苗圃事業ハ京城、木浦、鏡城ノ三箇所ニ苗圃ヲ新設シ新舊六箇所ノ苗圃ニ於テ三十三種ノ種子總計二百三十三石餘ノ播種、三種ノ苗木總計三百十七萬五千八百餘本ノ床替及白楊、^{ボブラ}兩種ノ挿穗二十一萬六千本ノ挿木ヲ行ヒ經費總計一萬三百餘圓ヲ支出セリ

(四) 森林調査

國有森林ハ從來其ノ所在面積等明ナラス且濫伐放火ノ爲年々荒廢ニ傾ケルヲ以テ明治四十一年ヨリ林業費中ニ林業調査費ノ目ヲ設ケ特ニ技師ヲ置キテ之ヲ調查ニ着手セシメ同年中ニ於テ京畿道花山、全羅南道莞島、平安北道雲山及江原道麟蹄四箇所ノ調査ヲ了セリ今調査ノ結果ヲ表示スレハ左ノ如シ

場所	樹種	林地面積	立木地面積	材積	價格
花山	赤松	一、四〇〇	一、四〇〇	一、四〇	一、四〇〇
山赤					
業					二、三三

第十二章 産業	
麟雲莞	蹄山島
新赤羅赤	木松木松木松
五〇〇〇	五〇〇〇
二八〇〇	三〇〇〇
七四四〇	六〇〇〇
三〇四〇	一五〇〇〇
九四二	一〇三五〇〇
四〇〇六〇〇	四四一〇〇
一一四	一一四
計	

四十二年ニ於テハ濟州島漢羅山及全羅北道扶安郡邊山ノ森林調査ニ著手セリ

(五) 土地貸下及部分林設定

四十一年一月森林法公布以來四十二年六月ニ至ル迄ノ土地貸下許可件數ハ日本人ニ對スルモノ十九件、韓人ニ對スルモノ六件、合計二十五件此ノ總面積三百一町歩餘ニシテ其使用目的ハ植樹、水源涵養、造林、柞蠶模範飼養等ニ在り又同期間ニ於ケル部分林設定許可件數ハ日本人ニ對スルモノ三件、韓人ニ對スルモノ四件、合計七件此ノ總面積六百七十二町歩餘ニシテ植栽數三百一萬餘本ニ及ヘリ

第五節 水産業

(一) 通漁協定ノ改正及漁業法規ノ制定

明治二十二年締結ノ日韓通漁規則其ノ他兩國通漁ニ關スル協定ハ韓國漁業發展ノ現情ニ適合セサルモノアルヲ以テ韓國政府ニ照會シテ全部之ヲ廢止シ新ニ日韓通漁協定ヲ締結シ日韓兩國ノ通漁區域及期間ニ關スル從來ノ制限ヲ撤去シ日本人カ韓國ニ於テ漁業ヲ營ム場合ニハ司法裁判權ニ屬スヘキ事項ヲ除クノ外ハ漁業ニ關スル韓國法規ノ適用ヲ受クヘキヲ定メ明治四十一年十月三十一日ヲ以テ協定書ノ調印ヲ了シ四十二年四月一日ヨリ之ヲ施行スルコトセリ從來韓國ニハ漁業ニ關スル法規ノ制定ナキヲ以テ韓國政府ハ本協定ノ施行ニ先ナテ四十一年十一月漁業法及同法施行細則ヲ、四十二年三月漁業稅法及同稅法施行細則ヲ公布シ同時ニ從來ノ水產稅則ヲ廢止セリ此等諸法規ハ前記通漁協定ト共ニ四十二年四月一日ヨリ之ヲ施行セリ

(二) 漁業ノ獎勵補助

從來日本人ノ設立ニ係ル朝鮮海水產組合ハ朝鮮近海ニ於ケル日本漁業者ノ保護取締ニ任シ傍ヲ日韓人漁業者間ノ紛議ノ調停和解ニ努メ其ノ効績尠カラサリシヲ以テ韓國政府ハ該組合ニ對シ明治四十一年ニ於テ組合巡邏船購

入費補助金五千圓ヲ交付セリ而シテ日韓通漁協定ノ改正及韓國漁業法並其ノ附屬法令ノ公布以來日韓兩國漁業者間ノ關係ハ一層緊密ヲ加ヘ其ノ漁業經營上ノ手續等モ更ニ複雜ニ赴クモノアリ然ルニ韓人漁業者ニ對シテハ未タ水產組合ノ如キ保護取締ノ機關ヲ闕クナ以テ韓國政府ハ朝鮮海水產組合ヲ利用シ該組合ナシテ韓人漁業者ニ對シ組合費ヲ徵收スルコトナク其ノ保護取締並諸般ノ代辦ヲ爲ス等日本人ニ對スルト同一ノ便宜利益ヲ圖ラシメ之カ代償トシテ四十二年以降年々相當ノ補助金ヲ該組合ニ下附スルコトトシ同年ニ於テハ補助金一萬五千圓ヲ交付セリ依テ該組合ハ其ノ趣旨ニ基キ四十二年上半期中新ニ城津及新義州ノ二箇所ニ組合支部ヲ設ケ沿海必要ノ漁村八箇所ニ出張所ヲ置キ且從來使用セル巡邏船六隻ノ外更ニ三隻ノ巡邏船ヲ新造シテ沿海漁場ノ巡航ヲ頻繁ニシ以テ日韓漁民ノ保護取締ニ努メツツアリ

韓國漁民ノ沖合漁業ハ極メテ幼稚ニシテ磯附漁業ニ使用スル漁船ヲ專ラ之ニ使用スルヲ以テ難破溺沒ノ厄ニ罹ルモノ甚多ク且其ノ漁具漁法モ一般ニ規模狹小操縱粗拙ナルカ爲其ノ漁獲ノ僅少ナル一人一箇年平均日本通漁者漁法改良ノ實行ヲ促シ進テ沖合漁業ノ獎勵ニ努メタリ

(三) 韓國水產業ノ將來

於テハ二百六十餘圓ナルニ韓人漁業者ニ在リテハ僅ニ四十二圓内外ニ過ギサルヲ以テ四十二年ヨリ新ニ漁船補助費ヲ支給スルコトシ漁船並漁具規模狹小操縱粗拙ナルカ爲其ノ漁獲ノ僅少ナル一人一箇年平均日本通漁者漁獲高ハ一人平均二百六十四圓ニ達シ其ノ五倍ニ相當シ韓人ノ漁獲高ニテモ尙一人平均四十二圓ニ及フノ狀況ナルヲ以テ韓海水產ノ豐富ナルハ推知スルニ難カラス將來韓海全般ノ漁利ヲ啓發シテ之レヲ日本ト同一程度ニ増進セシムルトキハ韓國一箇年ノ水產額ハ優ニ之ヲ六千萬圓以上ニ達セシムルヲ得ヘシ因ニ日本漁業者ノ韓國ニ移住セルモノハ本年六月末現在概計戸

第十二章 產業

一一八

數四百六十六戸口數二千三百三十人ナリ其ノ明治三十年以後ニ於ケル韓海日本通漁船數、人員及漁獲高ノ比較概表ヲ舉クレハ左ノ如シ

年次	漁船數	人	員漁獲概算高	
			明治三十一年	同四年
明治三十一年	二、二〇〇	五、六九一	九六〇、〇〇〇	一一四、二二〇
同四年	二、三九四	六、一二二	一、四一八二	三、七三九、二五〇
同四年	三、二三三	一、六六四	三、四一八、八五〇	一一六、四四四
同四年	三、八九九	一、四一八二	一一六、四四四	一一六、四四四

(備考)四十一年漁獲概算高ハ捕鯨ノ價額ヲ闕ク

第十三章 交通

第一節 道路

明治四十一年ニ於ケル治道工事ハ三十九年ノ第一次計畫ニ係ル既定四線路ノ改修ヲ續行セル外暴徒歸順者ニ生業ヲ與フル爲第二次計畫トシテ京畿道水原、利川間外六線路改修工事ヲ起スコトトシ同年五月之ニ著手セリ前記繼續事業ノ功程ヲ表示セハ左ノ如シ

第一次計畫ニ係ル四道路工事成績表

四十年起工

線路名	全距離	竣工年未現在		備考
		竣工年	距離	
大邱慶州線	二七、二八	四十年	二二、三二	
木浦光州線	二三、〇五	四十年	二二、一三	
群山全州線	二一、二四	四十年	二一、一六	
鎮南浦平壤線	二三、二八	四十年	五、〇〇	
計	六五、〇三	四一年	三、二九	四十三年竣工ノ見込
		四一年	〇、〇八	四十二年九月完成
		四一年	三、一三	四十三年竣工ノ見込
		四一年	一〇、〇四	

此總工費 金百五拾四萬七千四百七拾二圓

一一九

第十三章 交通

第十三章 交 通

一三〇

第二次計畫ニ係ル七道路工事成績表

四十一年五月起工

線 路 名	全 距 離	竣 工 年 末	竣 工 距 離	備	考
馬 山 晉 州 線	一六〇〇	四十一 年	八十二年一月ヨリ		
公 州 小 井 里 線	九〇六	同	四十三年竣工ノ見込		
水 原 利 川 線	二〇八	同	四十二年六月竣工		
海 州 龍 塘 浦 線	二、二	同	四十二年内ニ竣工ノ見込		
黃 州 同 停 車 場 線	一、二	同	四十一年十一月竣工		
安 州 寧 邊 線	一、五	同	四十一年十一月竣工		
新 義 州 麻 田 洞 線	〇、二三	同	四十一年十一月竣工		
計	四七、一九	同	四十一年十一月竣工		
		四二、一九	四十二年六月竣工		
		五、二九	四十二年内ニ竣工ノ見込		
		一、五、一九	四十一年十一月竣工		

此總工費 金七拾萬二千九百八十七圓

第二節 鐵 道

(一) 運輸ノ狀況及成績

明治四十一年四月一日釜山草梁間ノ聯絡工事新ニ成リ同日ナ以テ釜山驛ヲ

開設シ同時ニ運輸上諸般ノ改善ヲ行ヘリ是ニ於テ韓國縱貫鐵道ハ首尾一貫シ日韓交通上多大ノ利便ヲ加ヘタリ
韓國鐵道京義、馬山兩線ハ從來便乘便載線タリシモ本年四月一日ヨリ京釜線ト同シク營業線トシテ一般運輸ノ營業ヲ開始セリ同時ニ關釜聯絡船ノ增航ト共ニ全線列車運轉時刻ノ改正ヲ行ヒ列車回數ヲ増加シ釜山新義州間直通旅客列車ノ運轉ヲ開始シ尙乗車貨率ヲモ改正セリ
韓國鐵道ニ於ケル内地トノ連帶驛ハ從來京釜線各驛ト京義馬山線主要驛トニ限定セルモ曰韓聯絡旅客貨物ノ增加ニ伴ヒ本年度ヨリ全線各驛釜山ヲ除クニ於テ連帶ノ取扱ヲ爲シ直通輸送ノ便ヲ圖レリ
四十一年度ニ於ケル運輸成績左ノ如シ

運輸成績表

種 别	四 十 一 年 度	前 年 度 比 較 (△印ハ減)
平 均 營 業 哩 數	六四一、五	
列 車 走 行 哩 數	二、一九五、三六〇	
旅 客 乘 車 人 員	二、一七二、七四一	

第十三章 交 通

	小手荷物輸送斤量	貨物輸送噸數	客車收入	貨車收入	計
同上一哩一日平均	七、八八四、四七八 七三七、六九三 二、三三六、五三二 一、六三〇、三二二 三、九五六、八五四 一〇、〇三五 六、九二〇 一六、八九九	一、二九〇、〇八三 三四六、五一八 二、二六、八七四 四七七、二九四 六九四、一六八 二、〇三六 九、五六四 二、九五七	一三二	一三二	
總平均	一六、八九九	二、九五七	一六、八九九	一六、八九九	
(備考)一哩一日平均ノ科目中種別平均合計ト總平均ト合致セアルハ客貨二車其ノ哩程ヲ異ニスルニ山ル					

(二) 建設改良工事

韓國鐵道線路改良工事中馬山線ニ在リテハ前年度ヨリ繼續セル同線全部ノ改良ヲ竣ヘ京義線ニ在リテハ龍山一山間新幕及物開附近興水沙里院間肅川萬城古邑郭山附近ノ線路總計約六十六哩餘ノ改良ヲ竣ヘ其ノ他改良工事中ニ屬スルモノ十七哩半未著手ニ屬スルモノ九十哩半アリ

京釜線中三十九年以來起工セル永登浦仁川間改良工事ハ四十一年度ニ於テ

恩典附近一哩ノ土工ヲ殘ス外全線ノ改良ヲ竣ヘ其ノ結果同線路ハ最小半徑二十鎖最急勾配百分ノ一ノ良線トナリ舊線ニ比シ約一哩ヲ短縮シ其ノ延長十八哩三分トナレリ

建設工事中架橋工事ハ四十一年度内ニ於テ洛東江城山里川興水院川第一第二普通江郭山川橋等ノ架設ヲ竣ハリ新ニ清川江大寧江二橋梁ノ工事ニ著手シテ其ノ大半ヲ竣ヘ第一第二大同江橋梁ハ既ニ九分ノ成工ヲ告ケタリ此等未竣ノ四橋梁ハ臨津江橋梁ト共ニ次年度ニ於テ竣工ノ豫定ナリ鶴綠江架橋工事ハ四十二年度ヨリ著手ノ豫定ニシテ同工事ハ二百呎及三百呎ノ橋桁十二連ヨリ成リ其ノ延長三千百八呎内三百呎一連ヲ舟楫ニ便スル爲開閉橋ト爲スノ計畫ナリ隧道工事ハ四十一年度内ニ於テ平山郭山ノ二隧道ヲ竣工シ新ニ樓洞泛雁ノ二隧道開掘ニ著手セリ破洞隧道ハ次年度ニ於テ竣工ノ豫定ナリ京義支線タル平壤鎮南浦間即ナ平南線ノ建設工事ハ四十一年度乃至四十三年度三箇年繼續事業ニシテ延長三十四哩餘ニ亘リ既ニ線路ノ選定ヲ了セシモ本年度ニ於テハ未タ起工スルニ至ラス

(三) 建設及改良費

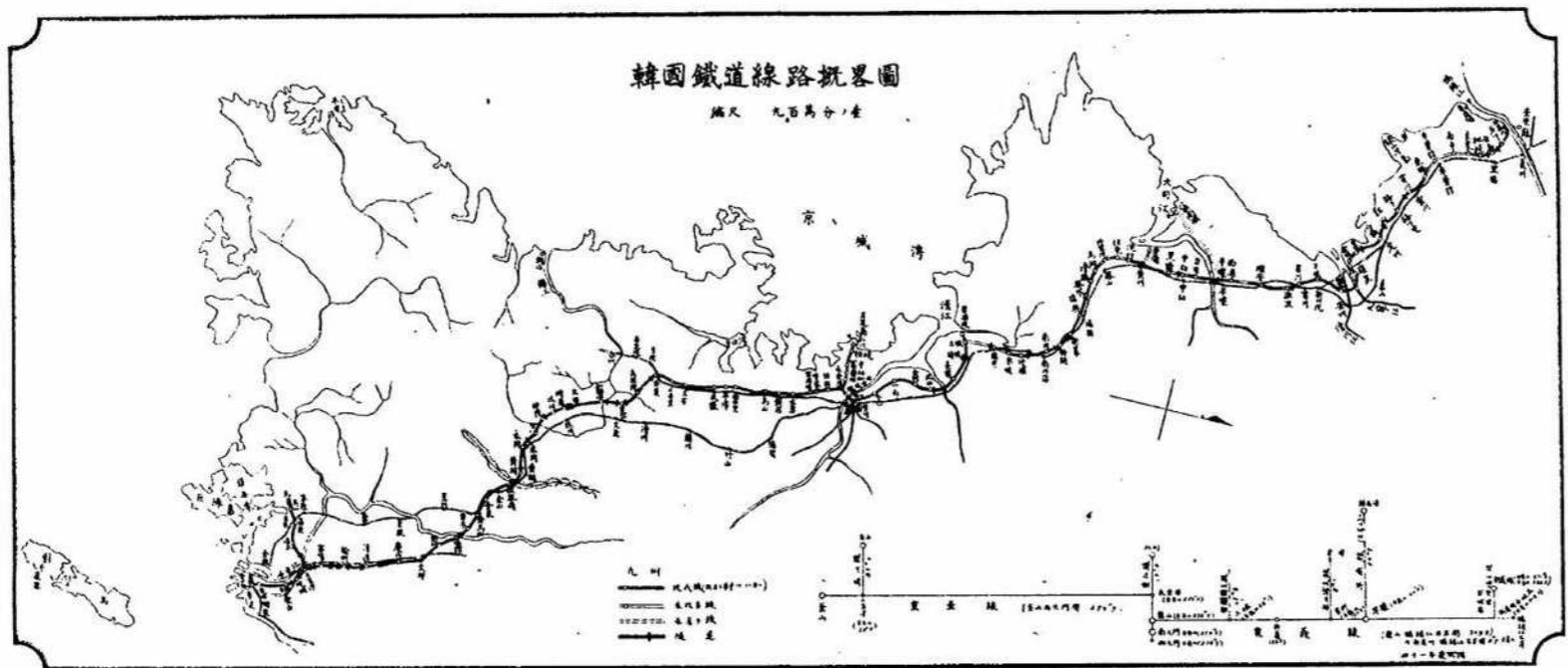
韓國鐵道建設及改良費ハ四十年度ニ於テ決定シタル繼續費豫定總額二千二百五十七萬三千餘圓、四十一年度ニ於テ決定セシ追加額平南線建設費豫定額百八十八萬六千餘圓合計二千四百四十五萬九千餘圓ニシテ其ノ内訳及支出年度割左ノ如シ

科 目	既 定	總
	額	一
	追 加	額
改 建 良 良 計	二三〇四七九二四 五三五二三〇	二三九三三九五四 五二五二三〇
支 出 年 度 割	二二五七三一四四	二四四五九一八四
	一八八六〇四〇	

科 目	四十年度	四十一年度	四十二年度	四十三年度	計
改 建 良 良 計	一〇二九四七九〇 五〇五二三〇 一〇八〇〇〇一〇	七五〇三五八〇 二〇〇〇〇	四二九八九八三 一	二八三七六〇一 一	二三九三三九五四 五二五二三〇
	七五二二五八〇	四二九八九八三			二四四五九一八四
		一八三七六〇一			
			二四四五九一八四		

(備考)平南鐵道建設繼續費ニ充當スル前表追加費額中四十一年度割額ハ二十六萬四千九百九十三圓ナリ

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 2



科 目	支出年度割 定額追加額					計
	四十 年 度	四十一 年 度	四十二 年 度	四十三 年 度		
改 良 設 計 計	一〇二九四、七九〇	七、五〇三五八〇	四、二九八、九八三	一、八三七、六〇一	二、八三七、六〇一	二、四四五九、一八四
良 費 費 費 費	五〇五、二三〇	二〇〇〇〇	四、二九八、九八三	一、八三七、六〇一	二、四四五九、一八四	二四四五九、一八四
改 建 費 費 費 費	一〇一四七、九二四	五二五、二三〇	一、八八六、〇四〇	二三、九三三、九五四	五二五、二三〇	二四四五九、一八四
(備考)平南鐵道建設繼續費ニ充當スル前表追加費額中四十一年度割額ハ二十六萬四千九百九十三圓ナリ						

(四) 資產及收支

明治四十一年度ニ於ケル韓國鐵道資產ノ増加額ハ七百七十二萬餘圓ニシテ創業以來本年度末ニ至ル資產ノ總額ハ八千六百五十五萬六千餘圓ナリ其ノ内固定財產ニ屬スルモノ八千五百二十五萬餘圓其ノ他ハ前拂金六十萬五千餘圓及用品資金七十萬圓ナリトス

本年度收益勘定ニ於ケル作業收入ノ決算額ハ四百五十萬四千餘圓ニシテ作業費ノ決算額ハ四百六十八萬五千餘圓ナルヲ以テ本年度缺損補填金決定額ハ十八萬千餘圓ニ止マリ之ヲ其ノ豫定額四十三萬三千餘圓ニ比シ差引二十五萬二千餘圓ノ減少ヲ見タリ

第三節 通 信

(一) 通信機關ノ整備

韓國ニ於ケル通信機關ノ設備ハ漸々整備ノ域ニ進ミ各道ヲ通シテ必要ナル箇所ニハ概不局所ノ設置ヲ了シ各種郵便事務ノ普及ハ勿論電信電話モ略各地發展ノ狀況ニ應シテ公衆通信ノ須要ヲ充タシ得ルノ程度ニ達セムトセリ

其ノ配置ノ密度ハ固ヨリ日本内地ニ及ハスト雖韓國ノ國勢民度ノ現状ニ對シテハ先ツ完備ニ近シト謂フヘシ

本邦移住民ノ増加及各地方發展ノ進捗ト共ニ公衆一般ノ通信力漸次強大ト爲リ加之韓國人民ノ通信機關ヲ利用スル者漸次增加セルニ因リ通信事務ノ取扱數ハ年々著シク増加セリ茲ニ注目スヘキハ郵便物ノ取扱數ニ於テ配達物數ノ引受物數ニ超過シ、郵便爲替取扱數ニ於テ振出口數及金額ノ拂渡口數及金額ニ超過セルコト是ナリ是レ韓人通信力ノ在留日本人ニ比シテ尙遙ニ微弱ナルニ由ルモノニシテ其ノ本年度ニ於ケル在留日本人ト韓人トニ於ケル郵便通信力ノ比較ヲ舉クレハ左ノ如シ

日本人	一人ニ付	一七六通	發出	受信
韓人	一人ニ付	奇零七分弱	二二二三通	

(二) 通信機關ノ現狀

明治四十一年度末現在郵便局所ノ總數ハ前年度ニ比シ三箇所ヲ減シタリ是レ郡廢合及軍隊引揚等ニ由リ下級通信機關ヲ廢止シタル結果ニ外ナラズ郵

便所以上ノ局所數ニ至リテハ前年末ニ比シ二十一箇所ノ増加ヲ見タリ郵便局所數ノ比較並通信事務擴張ノ狀況ヲ表示セハ左ノ如シ

郵便局所數比較數

年 次	種 别	四十一 年 度 末			前 年 度 末 比較 (△印ハ滅)
		通常郵便	小包郵便	爲替貯金	
四十一年度末	郵便局	四二七	二七五	一七二	
四十年度末	郵便所以上ノ局所	四三六	二六八	一四五	
比較 (△印ハ滅)	其ノ他ノ局所	△	七	二七	

郵便局所數業務取扱別表

年 次	種 别	四十一 年 度 末			前 年 度 末 比較 (△印ハ滅)
		通常郵便	小包郵便	爲替貯金	
四十一年度末	郵便局	四二七	二七五	一七二	
四十年度末	郵便所以上ノ局所	四三六	二六八	一四五	
比較 (△印ハ滅)	其ノ他ノ局所	△	七	二七	

(備考)四十一年度末電信取扱局所總數中歐文電信取扱ヲ兼ヌルモノ一一五該文電信取扱ヲ

兼ヌルモノ一一〇箇所アリ

(三) 韓人郵便貯金ノ獎勵

四十一年度中韓人郵便貯金ノ獎勵ニ關シ施設シタル主ナル事項左ノ如シ

(一) 韓文郵便貯金通帳ヲ發行シテ之ヲ韓人預入者ニ交付シタルコト

(二) 韓文郵便貯金案内ヲ印刷シテ之ヲ各地方官衙、公署、學校、新聞社、公共團體等ニ配付シタルコト

(三) 韓人ニ對シ規約貯金組合ノ設立ヲ勧誘シタルコト

四十一年度末現在韓人郵便貯金ノ狀況ヲ舉クレハ左ノ如シ

韓人郵便貯金預入金額並人員表

種 類	別 一	四十一年度末現在		前年 度末	比較 (△印滅)
		人 員	金 額		
平均一人預金額		一〇,九九九人	七五,八二三四	六,七三六人	四五,三六二日
		六八九三	△	二四,九九	

斯ノ如ク平均一人預金額ニ於テハ多少ノ減額アリタルモ預人員及預金額ニ於テハ其ノ增加ノ著シキモノアリ但シ之ヲ在留日本人ニ於ケル狀況ニ比ス

ルニ人員ニ於テ六分ノ一、金額ニ於テ二十一分ノ一ニシテ一人平均額ニ於テ三分ノ一二モ及ハサルヲ見ル

(四) 通信業務ノ成績

本年度ニ於ケル通信事業發展ノ狀況ヲ表示セハ左ノ如シ

一、郵便線路比較表

年 次	取扱局所數	郵便			線 路 數
		單 哩	哩 數	延 哩 數	
四十一年度	四二七	一七,〇三一	一一,九二二	一一,一六八	三六三,七六二
四十一年度	四三六	一四,七八七	一六〇,一七六五	一三八,五一六	三三八,〇三五

二、郵便物比較表

年 次	通 受	郵便			路 數
		常 達	小 包	袋	
四十一年度	三五,六五九,七五八	三七,六一四,九七九	三三,〇二七,七八九	三二,六四一,六九〇	三五,六五九,七五八
四十一年度	三六二,七六二	三六三,七六二	三三八,〇三五	三三八,五一六	三六二,七六二

三、郵便爲替比較表

第十三章 交 通

一四〇

年 次	取扱局所數	内國郵便爲替			外國郵便爲替		
		振出	拂	渡	振出	拂	渡
四十一年度	二七二	三三、六〇七、九九〇	一六、一二〇、三七二	三五、三七二	五五、〇四〇	一六、七五、六五八	八〇、五八七
四十年度	二五八	一四、三八三、八三〇	九、五七五、〇〇一	二〇、四九七	五三、一六七	一一、五九、五五八	五九、八三八

四、郵便貯金比較表

年 次	取扱局所數	年度末現在預金額			年度末預人員(人日共計)		
		豆	電	信	豆	電	信
四十一年度	一七二	三、二二五	七、〇四六	一、九九二、九五七	六九七、七九二	二二、八九、〇二二	八〇、五八七
四十年度	一四六	三、一九三	六、七八三	一、六八三、六四五	六五六、九四二	一一、九二三、四三六	五九、八三八

(備考) 右數字ハ韓人預入人員及金額ヲ含ム其ノ外國人ニ於テハ預入ナシ韓人預入

人員及金額ハ前出ス

五、電報信數比較表

年 次	取扱局所數	電 話 交 換 線 路			電 報 發 著 信 數		
		豆	電 長	信 延	路	豆	電 國 外
四十一年度	六四	一九八	一五九	五、四七九	四、〇五〇	三、二九六	一二、五六二、八五二
四十年度	三九	一五九	五、四七九	四、〇三二	一二、四〇七、四四〇	一一、九二三、四三六	一一、九二三、四三六

六、電話

(備考) 右ノ外四十一年度末現在自働函數二十一箇アリ前年度末ニ比シ六箇ヲ増加ス

通信事業ノ收支ハ年々逐フテ其ノ缺損額ヲ減少セリ其ノ累年比較ヲ舉レバ
左ノ如シ

通信事業收支並缺損額比較表

年 度	科 目	歳 入		歳 出		缺 損 額
		歲	歲	歲	歲	
四十二年 (豫算)		二、〇八九、八九五		二、四五八、三三六		三六八、四四一
四十一年度(決算)		一七八九、七三八		二、三〇三、七〇四		五一三、九六六
四十年度(決算)		一、五九二、〇〇六		二、一八三、六六四		五九一、六五八

通信事業ノ收支ハ年々逐フテ其ノ缺損額ヲ減少セリ其ノ累年比較ヲ舉レバ
左ノ如シ

第十三章 交 通

一四二

(六) 韓國々庫金取扱

四十一年度ニ於ケル韓國々庫金取扱高左ノ如シ

年 次	取扱局所數	歲 入	金 受	入	歲 出	金	拂 渡
四十一年度	一五〇	八五、〇六二	六、一一八、五九四	一五〇	七八、五九五	二、一七八、三八〇	一九〇、二四八三
四十 年 度	一五〇	四六、〇五二	四、七三六、二二三	三七、八七〇			

第十四章 官 業

第一節 營林廠ノ成績

明治四十年五月統監府營林廠開廳以來四十一年度末ニ至ル同廠ノ作業成績ヲ舉クレハ其ノ所管森林區域中鴨綠江流域ニ在リテハ四十年度ノ伐木數二十萬二千尺締餘、内集材、運材及流筏ノ作業ニ依リテ同廠本廳ニ着材セシモノ四萬一千八百尺締餘、四十一年度ノ伐木數十一萬四千尺締餘、同年度中流筏ノ作業ニ依リテ同廠本廳ニ着材セシモノ十四萬三千八百尺締餘ナリ本流域伐採ノ樹種ハ海松(和名テリセンゴヨウ)、清名紅松(落葉松)和名カラマツ、清名黃花松(和名オノオレカシバ)ト稱スル清國式荷馬車用ニ適スル木材ヲ交ユ豆滿江流域ニ在リテハ四十年度ノ伐木數ハ三萬尺締ニシテ同年度ハ之カ集材運材ノ作業ヲ了シタルノミニ止マリ未タ流筏ノ作業ヲ開始スルニ至ラス四十一年度ノ伐木數ハ十二萬一千九百尺締餘ニシテ同年度中流筏ノ作業ニ依リ會寧出張所ニ着材セシモノ一萬一千尺締餘ナリトス本流

域伐採ノ樹種ハ亦海松、落葉松ヲ主トシ少量ノ唐檜類(和名トウヒ、清名杉松)及雜木ヲ交ユ右ノ外四十一年中木材廠ヨリ買收セル木材二十四萬疋ニ及ヘリ營林廠木材ハ四十、四十一ノ兩年度ニ在リテハ主トシテ韓國駐劄軍兵營建築材料及關東都督府、統監府通信管理局電柱材料トシテ其ノ一部ヲ供給セリ民間ノ需要リ新ニ韓國度支部建築所ノ建築材料トシテ其ノ一部ヲ供給セリ民間ノ需要ニ對シテハ極メテ僅少ノ供給ヲ爲スニ止マリ未タ廣ク之ニ應スルニ至ラス然レニ四十二年度以降ハ龍山ニ派出所ヲ新設シテ韓國內一般ニ其ノ販路ヲ擴張スルノ計畫ヲ爲セリ尙同廠ハ一定ノ原木料ヲ徵收シテ所管森林ヨリ個人ノ伐木搬出ヲ許可スルノ方針ヲ執リ四十年度以降已ニ之ヲ實施セリ營林廠森林收入決算額ハ各翌年度繰越生產品價格ヲ除キ四十年度九萬八千餘圓、四十一年度四十三萬一千餘圓、森林作業費決算額ハ四十年度三十七萬五千餘圓、四十一年度百二十二萬四千餘圓ナリ其ノ損益勘定決算ハ四十年度ニ於テハ事業創設上ノ失費ノ爲メ四萬六千餘圓ノ缺損ニ生セシモ四十一年度ニ於テハ八萬四千餘圓ノ利益ヲ得此ノ利益金中ヨリ前年度ノ缺損ヲ補填シ尙三萬七千餘圓ノ過剩ヲ見タリ今右四十一年度利益金全額ヲ同年度末現在

資本總額百二十二萬餘圓ニ比スレハ其ノ利率六分九厘強ニ相當ス農商工部所管西北營林廠ハ單ニ其ノ名目ヲ存スルノミニシテ森林經營ノ事業ハ舉テ之ヲ統監府營林廠ニ一任セルヲ以テ該廠ノ施設ニ關シテハ記スヘキ事項ナシ

第二節 官營礦山

(二) 平壤礦業所

平壤礦業所ノ採炭事業ハ一箇年三十萬圓ヲ支出シテ六萬噸ノ無煙炭ヲ採掘スルノ計畫ヲ以テ開所以來着々其ノ經營ヲ進メタルニ四十一年下半期ニ至リ日本海軍德山煉炭製造所ヨリ其ノ炭質煉炭原料トシテ適良ナルヲ認メ四十二年度以降毎年三萬噸以上購買ノ申込ヲ爲シ又清國側ニ於テモ四十二年六月限三萬噸引渡ノ賣買契約ヲ締結スルニ至リ其ノ販路漸ク確定セルヲ以テ銳意採掘ヲ續行スルト同時ニ將來豎坑ヲ開鑿スルノ方針ヲ執リ試錐機ヲ据付ケ礦區各所ニ於ケル採鑛ニ從事セシメタリ同所四十一年中ノ採掘高ハ四萬六千四百餘噸ナリシモ四十二年ニ於テハ採炭豫算高五萬五千噸ニ對シ

同年上半期ニ於テ既ニ三萬二千噸ヲ採掘セリ

(二) 黄海道鐵礦

黄海道殷栗、長連、載寧三郡ノ鐵山ハ政府ニ於テ實地調査ノ結果百萬噸以上ノ
鑛量ヲ含ミ其ノ品質モ優良ナルヲ認メ明治四十年十二月ヨリ農商工部ノ直
營トシ鎮南浦ニ鑛務局出張所ヲ置キ四十一年三月其ノ採掘ニ着手セリ爾來
採鑛成績漸次好良ニシテ同年中日本枝光製鐵所ニ對スル契約高全部卽ナ五
萬餘噸ノ鑛石引渡シテ了シ將來枝光製鐵所々要鑛石高ノ約三分ノ一ハ之ヲ
本鑛山ノ供給ニ依頼スルヲ得ルニ至レリ尙四十一年ニ於テハ同製鐵所ト
ノ間ニ六萬噸供給ノ契約ヲ締結シ本鑛山採掘事業ハ益々順境ニ進ミツア
リ

第三節 印刷局

印刷局ハ明治四十一年一月度支部改正官制實施ノ際一ノ獨立官廳トナリ爾
來諸般ノ事務ヲ整理シ販賣事務ヲ擴張シ活版母型ノ整備、寫眞及歐文印刷等
ノ設備擴張ヲ遂ケ收入印紙ノ改造、小切手用紙ノ製造曆書ノ印刷等ニ着手シ
ニアリ

同局擴張工事ハ本年ニ於テ工場用建物全部及新諸機械ノ裝置並發電所用建
物及滾罐、發電機ノ設置ヲ完了シ給水工事モ略完成ヲ告ケタリ四十一年末現
計同局資本額四十一萬五千餘圓、内固定資本三十七萬五千餘圓流動資本四萬
圓收支勘定作業收入八萬二千餘圓、作業費十五萬七千餘圓ニシテ收支未タ相
償フニ至ラサルヲ以テ四十二年豫算ニ於テモ本年ト同シク七萬圓ノ政府支
出金ヲ計上セリ

第四節 建築所

建築所ハ度支部ノ所管ニ屬シ明治三十九年九月ノ創設ニ係リ主トシテ韓國
政府ニ屬スル各官衙廳舍及官舍ノ營繕ニ關スル事務ヲ管掌セルモ稅關工事
ニ關スル事務ハ特ニ之ヲ臨時稅關工事部ノ掌理ニ屬セシメタルカ同政府ハ
四十一年八月勅令ヲ以テ建築所官制ヲ改正シ同時ニ臨時稅關工事部ヲ廢シ

テ之ヲ建築所ニ合併シ同政府ニ屬スル諸建築工事ハ總テ之ヲ同所ノ所管ニ屬セシメタリ由テ同所ハ仁川、釜山、元山、鎮南浦、清津ノ各地ニ於ケル臨時稅關工事部出張所ヲ建築所出張所ニ變更シ群山木浦ノ兩出張所ハ稅關工事竣工ト共ニ之ヲ閉廳セリ

同所ハ既定繼續工事ノ外更ニ四十一年ヨリ四十二年ニ至ル二箇年繼續事業トシテ營繕費二百六十五萬餘圓ノ配付ヲ受ケ廳舍及官舍新營ノ計畫ヲ立てタリ本年ニ於テ同所管掌ノ下ニ建築中ニ屬スル主ナル建築物ハ内閣、各部、病院、學校、裁判所、警察署及財務署等ノ各廳舍並工場及官舍等ニシテ其ノ内本年末迄ニ工程ヲ竣了セシ主ナルモノハ大韓醫院、度支部本廳、大審院、印刷局、工業傳習所及群山、鎮南浦兩稅關ノ各廳舍並稅關附屬ノ諸官舍ナリトス而シテ四十二年ニ於テ新ニ着手セシ工事ノ數ハ二百五件ニ及ヘリ

第五節 煉瓦製造所

本所ニ於ケル煉瓦製造建設工事ハ前年末迄ニ大體完成ヲ告ケ明治四十一年十月更ニ第一銀行韓國總支店委託ノ煉瓦製造建設工事ノ竣工スルニ及ヒ其

ノ生產力益增加シ隨テ其ノ出荷高モ亦著シク增大セリ其ノ結果四十一年ニ於ケル煉瓦製造作業ハ生產高約五百五十萬本、內供給高約四百九萬本ニ達シ之ヲ前年ニ比スルニ生產高ニ於テ約二倍以上、供給高ニ於テ約七割ノ増加ヲ示セリ同年ニ於ケル同所附屬事業ノ成績ハ土管製造高四萬一千餘本、內供給高約一萬一千本、瓦製造高四十萬七千餘枚、內供給高十七萬七千餘枚ニシテ之ヲ前年ニ比スルニ土管四倍半強、瓦三倍強ノ増加ヲ示セリ四十一年末現在同所資本總額二十三萬四千圓、內固定資本二十萬九千圓、流動資本二萬五千圓ナリトス

第六節 製鹽業

(一) 鹽業行政ノ轉管

韓國製鹽業ニ關スル一般行政ハ從來農商工部水產局ノ管掌スル所ナリシモ明治四十二年二月鹽業一切ノ行政事務ヲ度支部ノ主管ニ轉屬セシメ之ト同時ニ水產局ニ於テハ鹽務、調查ノ二課ヲ廢シタリ

(二) 鹽業試驗場ノ成績

明治四十一年中鹽業試驗場ニ於ケル製鹽成績ハ頗ル良好ニシテ朱安鹽業試驗場ハ夏期中降雨曇天例年ヨリモ多カリシニ拘ラス其ノ製鹽高ハ豫定額ニ及ハサルコト比較的僅少ニシテ同年十一月十日即ナ同年ノ天日製鹽期ノ終迄ニ十三萬二千餘斤ニ達セリ之レヲ同年ノ採鹽總日數百十一日及鹽田面積一町五反歩ニ割當ツレハ一町步當一日平均採鹽高七百九十四斤強ニ當茲ニ始テ韓國ニ於ケル天日製鹽ノ有無ナルコトヲ實證セリ又煎熬式製鹽法ヲ採用セル龍湖鹽業試驗場ハ本年中降雨曇天多カリシ爲鹹水採取高豫定額ノ八分以内ニ減少シ採鹹高總計六千四百四十二石採鹹日數一日平均高二十八石二斗四升ニ過キス今之ヲ該場ニ併用試驗セル日本折衷韓國ノ三式ニ分類比較スレハ各式鹽田持濱一町步當一箇月平均(六月乃至十二月)採鹹量ハ日本式五十八石九斗餘折衷式四十石八斗餘韓國式四十二石八斗餘ニシテ日本式ノ採鹹量最多ナルヲ見ル同場本年ノ煎熬日數ハ百八十八日煎熬製鹽高三十六萬四千五百九斤之ニ要セシ鹹水量五千七百四十八石四斗製鹽高百斤ニ對スル所要鹹水量各月平均一石五斗八升餘ナリトス朱安試驗場ノ天日製鹽ハ其ノ品質清國及臺灣ノ同製品ニ比シ遙ニ優良ニシテ其ノ下等鹽ト雖殆ト

臺灣一等鹽ニ近ク龍湖試驗場ノ煎熬鹽ハ其ノ品質日本ノ四等鹽ニ相當セリ

(三) 鹽田增築

朱安鹽業試驗場ハ四十一年ニ於テ更ニ天日製鹽田六町三反歩ノ增築ヲ計畫シ七月之カ工事ニ着手セリ既設天日製鹽田ハ主トシテ範ヲ臺灣ニ取りシモ增築ノ鹽田ハ清國及西洋諸國ノ築造法ヲ參酌シ韓國ノ氣候風土ニ鑑ミ特殊ノ改良ヲ加ヘタリ

天日製鹽法ハ前年來試驗ノ結果韓國ノ氣候風土ニ適スルコト明白ナルノミナラス同國ニ於ケル天日製鹽ハ其ノ生產高及品質ニ於テ優ニ清國、臺灣等ノ同製品ヲ凌駕シ其ノ價格モ韓國在來ノ煎熬鹽ノ半額以下ニ低下シ得ルノ見込アルヲ以テ度支部ハ天日製鹽業ヲ官營トナスノ方針ヲ定メ天日製鹽ニ適スル干瀉地ノ實地調査ヲ遂ケ先ツ平安南道廣梁灣ニ於テ四十二年以降三箇年繼續事業トシテ天日製鹽田一千町步築造ノ計畫ヲ立テ四十二年中ニ百十五町步修築ノ豫定ヲ以テ同年五月之ヲ起工セリ

第十五章 教育

第一節 官公立學校

(二) 女子教育ノ創始

一 高等女學校ノ創設

輓近韓國ニ於ケル女子教育ノ機運漸ク勃興スルニ至リタルヲ以テ學部ハ明治四十一年四月勅令ヲ以テ新ニ高等女學校令ヲ公布シ同時ニ京城ニ官立漢城高等女學校ヲ設立セリ同校修業年限ハ本科三箇年、豫科二箇年ニシテ其ノ學科及程度ハ日本ノ小學校ト高等女學校トヲ折衷シ之ニ各種ノ技藝ヲ加ヘタルモノニ相當シ本年七月ヨリ其ノ授業ヲ開始セリ生徒數ハ最初六十名ナリシカ本年末ニ至リ八十八名ニ増加セリ職員ハ四十一年末現在數日本人三名韓人四名ナリトス

二 普通學校女子部ノ創設

韓國ニ於テハ男女學生坐席ヲ同フルヲ得サルノ習慣今尙其ノ跡ヲ絶タス隨テ女子ノ學生ニ對シテハ教室ヲ隔離シ學級ヲ特設セサルヲ得サルヲ以テ

官公立普通學校ニ於テモ從來未タ女子學童ヲ收容スルニ至ラサリシカ明治四十一年中大邱、咸興、群山、驪州ノ四公立普通學校ニ於テ始テ女子學級ヲ創設シ尋テ四十二年ニ於テ更ニ官立於義洞、公立平壤開城、江華、木浦、全州、馬山ノ七普通學校ニ各一學級ノ女子部ヲ新設セリ

(二) 普通學校ノ增設

官公立普通學校數ハ明治四十年末現在官立九、公立四十一、合計五十校ナリシカ四十一年ニ於テハ更ニ京畿道江華、驪州、忠淸南道溫陽、慶尙南道密陽、統營、全羅南道靈巖、全羅北道古阜、平安北道宣川及間島ノ九箇所ニ各一校ノ公立普通學校(右ノ内間島ハ私立ノ名義ナリ)ヲ新設シ同年末ニ於テハ總數五十九校トナレリ此ノ外公立乙種普通學校三十九校アリ各普通學校ニ於テハ普通學校令ノ規定ニ依リ教育ノ指導監督ニ任セシメムカ爲各校一名ノ日本人教監ヲ配置セリ

四十一年末現在官公立普通學校生徒數ハ乙種普通學校ヲ除キ總計八千三百四十餘名ニシテ前年末ニ比シ三千七百三十餘名ヲ増加シ又四十二年五月末總數ハ一萬三千百二十餘人ニシテ四十一年末ニ比シ更ニ四千七百七十餘名ヲ增加セリ

(三) 外國語學校

明治四十一年一月學部改正官制實施ト同時ニ從來ノ官立日語學校、同英語學校、同法語學校、同德語學校及同漢語學校ノ五校ヲ合併シテ一校トナシ之ヲ官立漢城外國語學校ト改稱シ同年三月京城各所ニ散在セル各語學校ヲ悉ク日語學校隣接地ニ移轉合同セシメタリ近年日語ノ必要益增加シ來リタルヲ以テ同校ハ同年五月新ニ修業年限一箇年ノ日語速成科ヲ特設シ之カ授業ヲ開始セリ

四十一年末現在同校學級數ハ本科十五、速成科一、合計十六、生徒數ハ本科四百六十八、速成科五十三、合計五百二十一、之ヲ前年末現在ニ比スレハ學級數二、生徒數八十二ヲ增加セリ

元同校ノ支校ニシテ其ノ後獨立セシ官立仁川日語學校及官立平壤日語學校ノ兩校ハ四十二年三月孰レモ其ノ組織ヲ變更シテ前者ハ之ヲ實業學校トナシ後者ハ之ヲ高等學校トナシ官立仁川實業學校、官立平壤高等學校ト改稱セリ

(四) 師範學校

明治四十一年九月學部ハ官公立普通學校教員速成ノ必要ヲ認メ師範學校講習科規程ヲ公布シ其ノ定員ヲ五十人、修業年限ヲ六箇月、義務年限ヲ二箇年ト定メ同月之ヲ漢城師範學校内ニ開設セリ

同年三月ニ於ケル同校卒業生ハ本科二十九名、教員速成科三十名ニシテ後者ハ主トシテ通譯教員ニ充ツル目的ヲ以テ養成セラレタルモノトス近年師範教育ニ對スル學生ノ希望ハ頓ニ旺盛ヲ加ヘ同年四月同校本科生徒四十名ノ募集ニ對シ應募者六百十餘名、同年九月同校講習科生徒五十名ノ募集ニ對シ應募者四百二十餘名ニ及ヘリ

四十一年末現在官立師範學校ハ學校數一、學級數本科二、速成科一、講習科一、合計四生徒數本科七十三、速成科三十、講習科三十七、合計百四十二ニシテ前年末ニ比シ學級數一、生徒數三十二ヲ增加セリ

(五) 高等學校

官立漢城高等學校ハ明治四十一年五月高等學校令施行規則改正ノ結果隨意科目トシテ英語科ヲ加設シ同學年第二學期ヨリ其ノ授業ヲ開始セリ

四十一年末現在官立高等學校ハ學校數一、學級數五、生徒數百七十二ニシテ前

年末ニ比シ學校及學級數ニ於テハ増減ナク生徒數ニ於テハ四十ナ增加セリ因ニ四十一年末現在學部所管官公立各種學校生徒總數ハ九千四百七十餘人ニシテ前年末ニ比シ四千餘人即チ約八割ナ增加セリ

第二節 學部所管以外ノ教育機關

(一) 農林學校

農林學校ハ明治四十一年三月新ニ獸醫速成科ヲ加設シ四十二年六月本科修業年限二箇年ヲ三箇年ニ改メ學科課程ニ新ニ國語及地理ノ科目ヲ加ヘ隨テ本科生徒ノ定員八十名ヲ百二十名ニ増加シ入學志願者ノ資格中學力ヲ普通學校以上ト定メタリ四十一年末現在同校生徒數ハ本科五十二名、獸醫速成科二十名、計七十二名ニシテ四十二年四月本科卒業生、獸醫速成科修業生各二十名ヲ出タセリ同校入學志願者ハ年々著シク增加シ四十一年ニ於テハ其ノ數百七十餘名ナリシニ四十二年ニ於テハ六百七十餘名トナレリ

(二) 工業傳習所

工業傳習所ハ開設日尙淺キモ入所志願者極メテ多ク明治四十一年ニ於テハ

八十五名ノ募集ニ對シ六百二十餘名、四十二年ニ於テハ百名ノ募集ニ對シ千二百八十餘名ノ應募者ヲ見ルニ至レリ同所ハ四十一年四月一箇年課程ノ專攻科ヲ加設シ四十二年四月第一回卒業生四十六名ヲ出タセリ卒業生ノ内譯ハ染織科八名、陶器科九名、金工科七名、木工科七名、應用化學科三名、土木科七名、土木專攻科五名ナリトス四十二年六月末現在同所生徒數ハ各科ヲ通シテ百八十七名ニシテ生徒ノ技巧ハ其ノ進歩年ヲ逐フテ顯著ナルヲ見ル

第三節 舊式教育機關ノ改善

(一) 成均館ノ改革

成均館ハ文廟ヲ虔奉シ經學ヲ肄習スル韓國唯一ノ教育機關ニシテ沿革頗ル古ク久シク變革ヲ加ヘサリシカ明治四十一年六月韓國皇帝文廟ニ親臨シテ同館改革ノ勅語アリシヨリ組織變更ノ端緒漸ク開ケ韓國政府ハ同年十月勅令ヲ以テ成均館官制ヲ改正シ同時ニ成均館學則ノ改定ヲ行ヒ經學科ノ外ニ國語、日語、歷史、地理、數學、理科、圖畫、法制、經濟、體操ノ八學科ヲ加ヘ其ノ修業年限ヲ三箇年トシ學生定員ハ舊ニ依リ三十名トシ四十二年四月一日ヨリ之ヲ施

行セリ尙同政府ハ成均館學則改定ニ伴ヒ同館司業試選規程ヲ改正シ初考試選學科目中ニ算數學ヲ加ヘタリ

(二) 書堂ノ改良

書堂ハ昔時ノ我寺小屋ニ相當スルモノニシテ其ノ數全國ヲ通シテ一萬以上ニ達スルモ其ノ教育法ハ舊ニ依リテ專ラ千字文、童蒙先習、小學等漢籍ノ素讀ヲ事トシ教育上殆ト益スル所ナキモノナルモ韓國普通教育上ノ施設未タ完カラサルノ現狀ニ鑑ミ、學部ハ暫ク之カ存在ヲ許シ兒童教育上特ニ障害アリト認ムル事項ヲ矯正シ事情ノ許ス限り改良ヲ加ヘ以テ實用ニ適セシムルコトトシ明治四十一年八月各道府郡ニ訓令シ書堂ニ對シテ學童ノ普通學校ニ入學又ハ轉學スルヲ妨クルコトヲ禁シ、國語科ノ加設、教授法ノ改良ヲ命シ、學童ノ紀律風儀及發育、校舍ノ設備及衛生狀態等ニ特ニ注意セシムルコトニ努メシメタリ

第四節 私立學校

(一) 私立學校令

韓國ニ於ケル私立學校ハ其ノ數從來數千ノ多キニ及ヒ輓近一般教育ノ機運勃興ト共ニ其ノ設立益頻繁ナ加フルモ何レモ其ノ基礎確立セス組織不完全ヲ極メ甚シキハ之ヲ以テ利益權勢爭奪ノ具トナシ又ハ危險ナル政治思想ヲ鼓吹スルノ手段ニ供スルモノアルヲ以テ學部ハ隆熙二年即ナ明治四十一年八月勅令第六十二號ヲ以テ私立學校令ヲ公布シ之カ取締ニ著手セリ同令ハ全文十七箇條ヨリ成リ其ノ規定ノ主ナルモノハ(一)私立學校ノ設立ハ學部大臣ノ認可ヲ受クヘキコト(二)私立學校ニ於テハ修業年限、學年、學科目、學徒定員、入學資格等ニ關シ學則ヲ設定スヘキコト(三)私立學校ノ教科用圖書ハ學部ノ編纂若ハ學部大臣ノ検定又ハ認可ヲ經タルモノナルヘキコト(四)私立學校ノ設備、授業其ノ他不適當ナル事項ハ學部大臣ニ於テ變更ヲ命スルコト(五)法令又ハ學部大臣ノ命令ニ違背シ有害ト認ムル私立學校ハ學部大臣ニ於テ閉鎖ヲ命スルコト等ナリ而シテ同令ハ同年十月一日ヨリ之ヲ實施シ既設ノ私立學校ハ同令公布前既ニ設立ノ認可ヲ受ケタルト否トナ間ハス總ヲ同令施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ新ニ學部大臣ノ認可ヲ受クヘキコトトセリ

同令ハ其ノ影響スル所廣ク且急激ナルヲ以テ學部ニ於テハ該令公布ト同時

ニ各道觀察使及府尹郡守ニ訓令ヲ發シ或ハ官吏ヲ各地ニ派遣シテ其ノ方針ヲ説明セシムル等百方同令ノ周知及之ニ對スル誤解ノ解除ニ努メタリ其ノ結果同令ノ趣旨漸次一般ニ徹底シ同令公布ノ當初ヨリ四十二年六月末ニ至ル出願總數一千九百九十五件ニ達シ其ノ中設立認可ヲ與ヘタルモノ八百二十件ニ及ベリ

右出願總數中宗教ニ關係アルモノハ七百七十八件ニシテ多ク外國宣教師ノ設立ニ係レリ此等宣教師ハ當初稍韓國法令ノ適用ヲ受クルコトヲ躊躇スルノ傾向アリシモ統監府及學部ノ説明ニ依リ漸ク該令公布ノ趣旨ヲ了解シ進テ設立認可ヲ出願シ他ノ私立學校ト均シク學部ノ指揮監督ヲ受クルニ至レリ

(二) 私立學校補助規程

明治四十一年八月學部ハ各私立學校ノ設備完整ヲ獎勵スルノ目的ヲ以テ私立學校令公布ト同時ニ部令ヲ以テ私立學校補助規程ヲ公布シ其ノ補助ヲ受クヘキ資格ヲ(一)普通學校令ニ據リテ設立セシモノ、普通學校ノ教科課程ニ準據スルモノ、其ノ他學部大臣ニ於テ特ニ必要アリト認メタルモノ(二)相當ノ教

員及設備ヲ有スルモノ(三)設立後二年ヲ經テ成績佳良ナルモノ等ニ定メタリ該規程ニ依リ金員補助ヲ受クル私立學校ハ四十一年末現在數十八校ニシテ此ノ補助金年額六千九百圓ナリトス

第五節 學會令

從來韓國ニ於テハ學會ト稱スル一種ノ政治團體アリ傍ラ教育事業ニ關係シ其ノ結果學生ニ危險ナル政治思想ヲ注入スルノ虞アルノミナラス明治四十年來其ノ設立益多キヲ加ヘ設立者中或ハ名ナ教育ニ藉リテ私利ヲ營ミ或ハ漫リニ他人ノ加入ヲ強要シ或ハ租稅類似ノ賦課ヲ爲ス等秩序ヲ妨害スルモノアリ由テ學部ハ同年八月勅令第六十三號ヲ以テ學會令ヲ公布シ十月一日ヨリ之ヲ實施シ其ノ取締ニ著手リ今該令中規定ノ主ナルモノヲ舉クレハ二學會ノ設立ハ學部大臣ノ認可ヲ受クヘキコト(二)學會ハ目的、事業等ヲ明ニセル會則ヲ定ムヘキコト(三)學會ハ營利事業ヲ爲シ又ハ政治ニ關涉スルコトヲ得サルコト(四)學會ニシテ法令ニ違背シ公益ヲ害スヘキ行爲アリタルトキハ認可ヲ取消スヘキコト等ニシテ既設ノ學會ハ同令公布前設立認可ヲ受ケタルモノト否トヲ問ハス總ヘテ同令施行ノ日ヨリ二箇月以内ニ新ニ學部大

臣ノ認可ヲ受クヘキコトト爲セリ
同令實施以來設立認可ヲ出願セルモノ四十一年末迄ニ十五件、四十二年上半
期中十件、合計二十五件ニシテ其ノ内設立認可ヲ與ヘタルモノ十二件認可セ
サルモノ一件アリ

第六節 教科用圖書ノ検定及編纂

近年各種學校ノ設立漸ク多キナ加フルト共ニ粗笨杜撰ノ教科用書坊間ニ横
溢シ甚シキハ時局ヲ憤慨シ排外思想ヲ鼓吹スル等有害危險ノモノアルヲ以
テ學部ハ之カ取締ノ爲新ニ教科用圖書検定規程ヲ制定シ四十一年八月私立
學校令ト同時ニ部令ヲ以テ之ヲ公布セリ

教科用圖書編纂事業ハ學部ニ於テ編纂専門ノ日本人ヲ傭聘シ著々之カ進行
ニ努メ普通學校教科用圖書ハ四十一年末迄ニ修身、國語、日語、漢文、理科、圖畫等
六種ノ出版ヲ了シ四十二年初生徒用習字帖及教員用算術書ノ二種ヲ出版シ
唱歌體操ヲ除クノ外略之カ完備ヲ見ルニ至レリ韓國高等學校程度ノ教科用
圖書ニ關シテハ四十一年中漸ク韓國地理科用書ノ編纂ヲ了シ四十二年ニ於

テ韓國歷史科用書ノ編纂ニ着手セリ

第七節 留學生規程ノ改正

明治四十一年十二月學部ハ日本留學生規程ヲ改正シ官費留學生ハ官立高等
學校又ハ之ト同等以上ト認ムヘキ官公私立學校ノ卒業證書ヲ有スル者ニ就
キ検定ヲ行ヒテ之ヲ命シ學資年額三百六十圓以内ヲ給シ留學期間ニ均シキ
期間學部大臣ノ指定スル職務ニ從事スル義務ヲ有スルコトトシ四十二年一
月一日ヨリ之ヲ施行セリ四十一年末現在日本留學生ノ數ハ官費留學生四十一
人、補助留學生二十七人、合計七十三人ニシテ此ノ外宮内府派遣ノ留學生十
人アリ官費補助留學生一般ノ志望學科ハ近時漸ク實業教育ニ向フノ風ア
リ而シテ私費留學生ハ概數七八百名ニ上ルヘシ

第十六章 衛生

第一節 傳染病

明治四十一年中韓國ニ於ケル傳染病ハ痘瘡最モ多ク腸窒扶斯、赤痢、虎列刺之ニ次ケリ其ノ統計左ノ如シ

明治四十一年中韓國傳染病患者死亡表		明治四十一年十二月三十一日調		
		種別 人 別 名 病	病 名 虎 列 刺	胸窒扶斯
者 患 者 計	日 韓 人 人	五 二 〇	五 八	二 〇
亡 死 人 人 計	四 七	一 一 〇	一 一 〇	一 一 〇
日 人	三 四	二 二 〇	一 七 四	一 三 〇
韓 人	二 三 〇	一 二 一	一 四 三	一 一 〇
計	八 一	八 四	八 四	八 四
		四 七 八	一 〇 一	二 一 〇
		一 五 一	二 一 〇	三 一 〇
		二 一 〇	九 一 〇	二 一 〇
		六 〇 三	三 三 〇	一 一 〇
		二 九 五	二 一 〇	二 一 〇
		八 九 八	一 九 〇	二 二 一

防疫上ノ措置ニ就テハ内部衛生局ニ於テ日本傳染病豫防法ノ規定ヲ斟酌シ臨機應急ノ手段ヲ執レリ

第二節 種痘

韓國ニ於テハ痘瘡ノ流行年々猖獗ヲ極メ明治四十一年ニハ該患者總數一千八百餘名内死者四百七十餘名ニ上レリ故ニ痘瘡ノ豫防ハ韓國防疫上最モ緊急ノ事ニ屬ス由テ内部ハ四十一年一月警視總監及各道觀察使ニ種痘ノ勵行ヲ訓達シ各道種痘事務委員二十八名、種痘認許員千六百十二名及警察醫囑託(日本人)五十二名ヲシラ之カ普及施術ノ任ニ膺タラシメ婦女子ノ種痘ニ對シテハ特ニ婦人認許員員ヲ養成配置セリ本年ノ痘苗ハ悉皆大韓醫院衛生試驗部痘苗製造科ノ製出ニ係リ内部ニ於テ其ノ無代配付ヲ爲シ本年中ノ痘苗配付總數十一萬二千七百餘具ニ達シ種痘總人員五十四萬四千餘名ノ多キニ及ヘリ

第三節 漢城衛生會

漢城衛生會ハ明治四十一年二月其ノ事業ノ第一著手トシテ京城内外ノ除穢事業ヲ施行スルコトニ決シ同時ニ我皇太子殿下御下賜ノ京城衛生費三萬圓

ヲ其ノ基本金ニ編入シ韓國政府ヨリ金六萬七千圓ノ補助ヲ受ケ三月法律ニ依リ同會事業施行費トシテ京城在住者ヨリ一定ノ賦課金ヲ徵收スルノ權能ヲ附與セラレ其ノ基礎漸ク確立スルニ至レリ同年四月警視廳ノ發令ニ係ル除穢規則ニ依リ事業施行ノ準備トシテ京城韓人居宅ノ排水及除穢設備ノ改造ヲ勵行シ九月除穢事業ノ實行ヲ開始セリ事業開始當時ヨリ本年末ニ至ル成績ハ事業日數一百七日、除穢延戸數韓人居宅二萬九千七百餘戸、日本人居宅一萬八千二百餘戸此ノ費用四萬五千九百圓ニ達セリ本年中同會收入ハ前記基本金及補助金ヲ合シテ十一萬八千餘圓此ノ支出九萬五千餘圓ナリトス

第四節 大韓醫院

大韓醫院ハ明治四十一年一月其ノ所管ヲ内部ニ移シ舊ニ依リテ治療部、醫育部及衛生試驗部ヲ置キ同院廳舍中新築既成ノ部分ニ於テ其ノ事務ヲ執リ本年十月同院廳舍全部竣工ヲ告クルニ及ヒ同月二十四日其ノ開院式ヲ舉ケタリ是ニ於テ其ノ設備ノ完整ト醫術ノ精華トハ其ノ輪奐ノ美ト相俟ツテ韓國醫療界ニ一新紀元ヲ劃スルニ至レリ本年中ニ於ケル同院醫療成績ハ延人員

私費入院患者一萬六千九百餘名、同外來患者四萬六千二百餘名、施療入院患者八千五百餘名、同外來患者二萬一千四百餘名ニシテ韓人ノ新醫術ヲ信賴スルノ念益厚キサ加ヘタリ同院衛生試驗部ニ於テ製出セシ痘苗數ハ十一萬三千具ニ達シ其ノ品質精良ニシテ韓國ニ於ケル痘苗需用高ノ全部ヲ供給スルヲ得タリ

第五節 醫育機關

韓國ニ於ケル醫育機關ハ大韓醫院醫育部ノ外大邱及平壤同仁病院ニ於テ小規模ノ經營ヲ爲スモノ及米國人ノ設立ニ係ル世富蘭德病院附屬醫學校アルニ過キス
大韓醫院醫育部ニ於テハ明治四十一年七月卒業生五名ヲ出シ之ヲ同部ノ前身タル京城醫學校創設以來ノ卒業生ニ合スレハ總數五十四名ニシテ內醫術ヲ開業セルモノ二十四名、軍醫教官又ハ醫員、助手トシテ醫術ニ從事セルモノ十七名アリ

前記世富蘭德病院附屬醫學校ハ本年六月ニ至リ韓人卒業生七名ヲ出シタル

第十六章 衛生

一六八

ナ以テ其ノ實力ヲ考查シ特ニ醫術開業認許狀ヲ交付セリ韓國ニ於テ韓人ヲ
醫師ニ公認シタルハ之ヲ以テ嚆矢トス由來韓國ニ於テハ醫師規則ナルモノ
アルモ未タ曾テ之ヲ實際ニ適用シタルコトナキヲ以テ韓人ニシテ自カラ醫
師ト稱シ現ニ其ノ業ヲ營ミツツアルモノ前條記載ノモノヲ除キ其ノ數二千
六百餘人ニ及フト雖何レモ何等公認ヲ與ヘラレタルモノニアラス

第六節 水道

明治四十年來内部土木局ニ於テ施工中ニ屬スル仁川、平壤、釜山ノ三水道工事
ハ四十一年中降雨出水等ノ爲多少不意ノ障害ヲ受ケタルニ拘ラス概不豫定
ノ工程ヲ進捗セシメタリ四十二年六月末現在ノ工程左ノ如シ

工種	水道名	仁川	平壤	釜山
沈澱池築造	仁川	一〇〇	一〇〇	一〇〇
灌漑池築造	平壤	一〇〇	一〇〇	一〇〇
唧筒室築造及唧筒据付工事	釜山	一〇〇	一〇〇	一〇〇
	程	(一〇〇ニ對スル)		
	九〇	九〇	九〇	九〇
	八〇	八〇	八〇	八〇
	七〇	七〇	七〇	七〇
	六〇	六〇	六〇	六〇
	五〇	五〇	五〇	五〇
	四〇	四〇	四〇	四〇
	三〇	三〇	三〇	三〇
	二〇	一〇	一〇	一〇
	一〇	一〇	一〇	一〇

豫定竣工期	豫定給水量	鐵管建築工事	諸水管建築工事	蓄水源改築工事	配水池建築工事	貯水池建築工事	水資源工事
四十三年十二月	七萬人	一〇〇	九〇	九〇	四五	一〇〇	
四十二年十二月	六萬人	一〇〇	九〇	九〇	一〇〇	一〇〇	
四十三年九月	五萬五千人	一〇〇	九〇	八〇	七〇〇	一〇〇	伏兵山ノ分

(備考) 右ノ内釜山水道ハ韓國政府ト釜山居留民團トノ共同經營ニ係ル

此ノ外木浦ニ於テモ四十一年度ヨリ居留民團事業トシテ韓國政府ノ補助ヲ
受ケ水道工事ニ著手セリ京城ニ於テハ三十九年米人設立ノ會社ニ特許ヲ與
ヘテ給水量二十二萬人ノ水道敷設ニ著手セシメ本年八月工事竣成ヲ告ケ其
ノ給水ヲ開始セリ。

第十七章 居留帝國民ニ對スル施設

第一節 施 設

(二) 居留民團法施行規則ノ改正

從來ノ居留民團法施行規則ハ一般官吏ニ居留民會議員被選舉權ヲ與ヘサルノ規定ナリシモ明治四十一年五月府令第十五號ヲ以テ之ヲ改正シ理事廳ノ官吏ヲ除ク外ノハ一般官吏ニモ被選舉權ヲ與フルコトトシ又舊規定ニ據レハ民長ハ居留民會ニ於テ之ヲ選舉シ統監ノ認可ヲ受ケルノ制ナリシモ同年七月府令第二十三號ヲ以テ之ヲ改正シ統監之ヲ任免スルコトトシ同時ニ民長任期ノ制限ヲ廢シ官吏ニシテ民長ニ任命セラレタルモノヲ無給トシ同令施行ノ際現ニ民長タルモノハ從來ノ規定ニ據リ任期ノ終了スル迄在職セシムルコトトシ以テ民長官選ノ制ヲ開キタリ

(三) 民長官選制度實施ノ結果

我韓國居留民團ハ何レモ近ク十數年來ノ移住者多數ヲ占ムルヲ以テ其ノ公共團體タル統制概未タ圓熟セス隨テ民長公選制度ノ如キ猶民團ノ實情ニ

適セサルモノアルノミナラス或ハ權勢爭奪ノ具トナリ或ハ人物ノ選擇ヲ誤ル等種々ノ弊竇ヲ釀成シ延テ民團施政ノ振張ヲ阻害スルモノアリ之レ民長ノ公選制度ヲ廢シテ官選制度ニ改メタル主タル理由ニシテ該改正令ヲ發布スルヤ一部ノ居留民間ニ於テ一時反對ノ聲アリシモ多數ノ居留民ハ寧ロ之ヲ歓迎セリ其ノ後一二民長ノ官選アルヤ當該民團居留民ニ於テ何等反感ヲ挾マサルノミナラス之カ爲各民團ヲ通シテ財務、公共事業ノ經營其ノ他諸般事務ノ整理刷新ヲ促進シ其ノ多クハ施政ノ成績漸次面目ヲ改メムトスルニ至レリ

本年度ニ於テ民長公選制度廢止後民長官選ヲ實際ニ施行シタルハ元山及新義州ノ兩居留民團ニシテ前者ニ在リテハ本年九月居留民團助役ヲ後者ニ在リテハ四十二年二月民團居留民會議長ヲ孰レモ民長ニ任命セリ

(三) 新聞紙規則ノ制定

在留邦人ノ發展ニ伴ヒ新聞雜誌ヲ發行スルモノ日ヲ逐フテ續出シ之カ取締ヲ一層嚴密ニスルノ必要益切實ナ加フルト共ニ前年保安規則中ニ追加セル新聞紙取締ニ關スル規定ノ漸ク時態ニ適合セサルニ至リタルヲ認メ明治四

十一年四月府令第十二號ヲ以テ新ニ新聞紙規則ヲ制定公布セリ同規則ニ據レハ新聞紙發行者ハ所定ノ事項ヲ届出テ理事官ノ認可ヲ受ケ一定ノ保證金ヲ理事廳ニ納付スルコトヲ要シ理事官ハ該規則ノ規定ニ違犯シテ發行セル新聞紙ニ對シ其ノ發賣頒布ヲ禁止シテ之ヲ差押ヘ又ハ其ノ發行ヲ禁止若ハ停止シ又規則違反者ニ對シテハ一箇年以下ノ輕禁錮又ハ二百圓以下ノ罰金ニ處スルヲ得ルコトト爲レリ尙同規則ハ雑誌通信ノ類ニモ之ヲ準用ス

(四) 教育事業獎勵

居留民教育事業獎勵ノ爲本府ヨリ居留本邦人設立ノ學校へ支給セル補助金明細左ノ如シ

年 度	一時 補 助			經 常 補 助			計
	校 數	金 額	校 數	金 額	校 數	金 額	
四十一年度(決算)	三二	五六一五	四〇〇〇	六四	二四、三八五	三〇、〇〇〇	
四十二年度(豫算)	三〇	五、六一五	八七	三六、〇〇〇	四〇、〇〇〇		

(備考) 一時補助金ハ學校建築費又ハ設備費ニ充テ經常補助金ハ教員ノ給與費ニ充ツルモノトス

第二節 現況

(二) 民團經營ノ事業

一、水道敷設 居留民團ノ經營ニ係ル上水道工事ハ現ニ釜山木浦兩民團ニ於テ敷設中ニ屬スルモノアルノミナルカ釜山水道工事ハ明治四十年度ヨリ四十三度ニ至ル四箇年繼續事業ニシテ同民團ト韓國政府トノ共同經營ニ係リ其ノ工費豫算總額一百五十二萬圓ノ内三十五萬圓ハ韓國政府ノ出資ニ屬シ其ノ殘額ハ同民團ニ於テ起債ノ認可ヲ受ケテ之ヲ支辨シ工事竣工ノ上ハ人口五萬五千人ニ給水シ得ルノ計畫ニシテ四十一年度ニ於テ其ノ約二分ノ一ノ工程ヲ竣ヘタリ

木浦水道工事ハ之ヲ四十一年度ヨリ四十二年度ニ至ル二箇年繼續事業トシ人口五千人ニ給水ノ計畫ヲ立テ總工費豫算十五萬圓ノ内三萬圓ハ韓國政府ヨリ無利息貸下ヲ受クルコトトシテ同民團ニ於テ之カ經營ニ著手セリ

二、病院 居留民團ノ經營ニ係ル各種病院ハ京城居留民團ニ於テ普通病院一、傳染病院一、驅微院一、此ノ本年度經費決算高五萬六千餘圓、仁川居留民團ニ於テ普通病院一、此ノ本年度經費決算高五萬六千餘圓、釜山居留民團ニ於テ普通病院一、此ノ本年度經費決算高壹萬五千餘圓、其ノ他元山、平壤、龍山、群山及木浦

第十七章 居留帝國民ニ對スル施設

一七四

ノ居留民團ニ於テ各一箇所ノ病院ヲ經營セリ
三、新市街經營 釜山居留民團ニテハ同地將來ノ膨脹ニ鑑ミ同地專管居留地
以西ノ空地ニ新市街ヲ經營スルコトトシ事業費二萬圓ヲ起債シテ該地面ノ
整理及道路溝渠ノ施設ニ著手シ同時ニ經費概算十三萬餘圓ヲ投シ明治四十
一年度ヨリ四十五年度ニ至ル五箇年繼續事業トシテ現在市街ノ市區改正事
業ニ著手シ尙別ニ事業費總額七萬圓ヲ起債シ四十一、四十二兩年度ノ繼續事
業トシテ新遊廓敷地ノ買收及經營ヲ開始セリ其ノ他平壤、新義州兩民團ニ於
テモ所要土地ノ買收ヲ遂ケ新市街地並遊廓地ノ經營ニ著手セリ

(二) 財政

明治四十二年度居留民團歲入出豫算並四十一年度豫算ニ對スル比較左ノ如
シ

區分 臨時部 計	歲 四十二年度		歲 前年比較增減	歲 四十二年度	歲 前年比較增減	(△印ハ減)
	九六七、一六八	九六七、一九五		九三、八四七	九三、八四九	
	△	△	△	△	△	△

(備考)

兩年度共十二民團一般會計本豫算額ノ總計ニシテ特別會計歲入出ヲ含マス

四十二年度歲入臨時部ノ減少極メテ著シキハ主トシテ民團債年割額ノ減少ニ因ルモ

ノトス尙同年度歲出入科目ハ前年度ニ大差ナキヲ以テ之ヲ略ス

居留民團ノ經費ハ主トシテ教育、土木、衛生其ノ他諸般ノ公共的施設ニ支出ス
ルモノニシテ四十二年度歲出豫算ニ於テハ教育事業ニ支出スルモノノ最多額
ヲ占メ其ノ總計三十四萬圓ヲ超エ衛生事業ニ支出スルモノ九萬餘圓、土木事
業ニ支出スルモノ五萬餘圓警備ノ爲支出スルモノ約二萬圓ナリトス同年度
歲入豫算ノ經常收入ニ於テハ居留民團稅其ノ最多額ヲ占メ總額六十一萬餘
圓ニ達セリ

(三) 居留民公共團體ノ增加

明治四十一年度中帝國居留民公共團體ノ增設セラレタルモノハ日本人會十
三箇所ニシテ居留民團其ノ他ノ團體ニ於テハ増減ナシ今之ヲ既設ノ各種居
留民公共團體ニ合スレハ其ノ本年度末現在總數七十九箇所トナレリ今日本
人會增設地區ヲ舉クレハ左ノ如シ

京城理事廳管内 平澤 天安

仁川理事廳管内	於青島
群山理事廳管内	論山
馬山理事廳管内	固城
釜山理事廳管内	迎日
元山理事廳管内	新浦
平壤理事廳管内	沙里院
大邱理事廳管内	永同
計十三箇所	尙州

(四) 戶 口

明治四十一年中日本人ノ渡韓ハ各地方ニ於ケル暴徒騒擾ノ爲メ一時停滯ノ觀ナキニ非ラサリシモ地方交通產業ノ發展顯著ナルト地方騒擾ノ鎮靜ニ歸シタルトニ因リ再ヒ增進ノ趨勢ヲ恢復シ同年末ニ於テハ之ヲ前年末ニ比シ戶數ニ於テ八千八百餘人口ニ於テ二萬八千餘ノ增加ヲ見ルニ至レリ今最近五箇年間ニ於ケル累年增加概數ヲ舉クレハ三十七年末ニ一千八百餘名、三十八年末ニ一萬一千餘名三十九年末ニ四萬八百餘名、四十年末ニ一萬四千餘名

四十一年末ニ於テハ前記ノ增加ヲ示セリ
更ニ四十一年末及四十二年六月末現在各理事廳所管別居留日本人戸口數ヲ表示セハ左ノ如シ

理事廳管内在留本邦人戸口表

(△印ハ減)

理事廳名	四十一月末戸口数	前年末ニ對スル増減	四十二年末戸口数	前年末ニ對スル増減
京仁群木馬釜元大清城	一〇七九九	△	一〇七九九	△
城川山浦山山山山山津津	三四四九	△	三四四九	△
馬釜元大清城	一九六六	△	一九六六	△
釜元山山山山山	一五七九	△	一五七九	△
山山山山山	一八九一	△	一八九一	△
山山山山山	六五六一	△	六五六一	△
山山山山山	一九九〇	△	一九九〇	△
山山山山山	一八七二	△	一八七二	△
山山山山山	一三三二	△	一三三二	△
山山山山山	一五二	△	一五二	△
山山山山山	三一八五	△	三一八五	△
山山山山山	三一八五	△	三一八五	△
山山山山山	二一六三	△	二一六三	△
山山山山山	三四七二	△	三四七二	△
山山山山山	二一六一	△	二一六一	△
山山山山山	一九八五	△	一九八五	△
山山山山山	二一九一	△	二一九一	△
山山山山山	二五四四	△	二五四四	△
山山山山山	六七八五	△	六七八五	△
山山山山山	二一九一	△	二一九一	△
山山山山山	三六九	△	三六九	△
山山山山山	三五七	△	三五七	△
山山山山山	六〇四	△	六〇四	△
山山山山山	二三二	△	二三二	△
山山山山山	七二	△	七二	△
山山山山山	二六	△	二六	△
山山山山山	三六	△	三六	△
山山山山山	二二六	△	二二六	△
山山山山山	一六三	△	一六三	△
山山山山山	三四七二	△	三四七二	△
山山山山山	二八七	△	二八七	△
山山山山山	一二三	△	一二三	△
山山山山山	六七三	△	六七三	△
山山山山山	一四七	△	一四七	△
山山山山山	二六四	△	二六四	△
山山山山山	二三四	△	二三四	△
山山山山山	三〇〇	△	三〇〇	△
山山山山山	二七五	△	二七五	△
山山山山山	二〇三	△	二〇三	△
山山山山山	六二八六	△	六二八六	△
山山山山山	五五三〇	△	五五三〇	△
山山山山山	六八五六	△	六八五六	△
山山山山山	六一三九	△	六一三九	△
山山山山山	六二六九	△	六二六九	△
山山山山山	三九三三	△	三九三三	△
山山山山山	四二五	△	四二五	△
山山山山山	一〇七四七	△	一〇七四七	△
山山山山山	一一二四	△	一一二四	△
山山山山山	五六	△	五六	△
山山山山山	二一七〇	△	二一七〇	△
山山山山山	一九八八	△	一九八八	△
山山山山山	四八〇〇	△	四八〇〇	△
山山山山山	一、五三三	△	一、五三三	△
山山山山山	五四九	△	五四九	△
山山山山山	一、三四三	△	一、三四三	△
山山山山山	一二五	△	一二五	△
山山山山山	四〇七二八	△	四〇七二八	△
山山山山山	一二五一三	△	一二五一三	△
山山山山山	一二五七	△	一二五七	△
山山山山山	三五三一六	△	三五三一六	△
山山山山山	六二八六	△	六二八六	△
山山山山山	一、一二一	△	一、一二一	△
山山山山山	一〇八六	△	一〇八六	△
山山山山山	八七二	△	八七二	△
山山山山山	七四八	△	七四八	△
山山山山山	六四〇二	△	六四〇二	△
山山山山山	七九四二	△	七九四二	△
山山山山山	二五、六四五	△	二五、六四五	△
山山山山山	七、一二七	△	七、一二七	△
山山山山山	六、九三八	△	六、九三八	△
山山山山山	六、三八五	△	六、三八五	△
山山山山山	四七九	△	四七九	△
山山山山山	一二八三九	△	一二八三九	△
山山山山山	六四	△	六四	△
山山山山山	一〇九二	△	一〇九二	△

第十七章 居留帝國民ニ對スル施設		二七八
新 鎮	八九三	六五
義 南	一四七三	九七二
州 淄	二五	七九
合 計	三七、二二三	三、一〇三
	八八四二	二八二
	四一、三四	三、六九五
	四、二二一	五九二
	一二六、一六八	五〇四
	二八、一六七	五七一
	一四一、七一二	四、九八五
	一五、五四四	五九二

(備考) 清津理事廳管内ニ於テ四十一年末現在戸口ノ增加比較的著大ナルハ羅南兵營建築ノ爲多數ノ労働者ノ移住セシニ由ル

(五) 學 校

居留民團日本人會其ノ他居留日本人團體ニ於テ明治四十一年度中新ニ開設セル學校數ハ小學校二十二(内一校ハ個人)高等女學校一合計二十三校ニシテ外ニハ幼稚園二箇ノ增設ナ見タリ今四十一年度末現在各種學校總數並生徒教員學級數ノ増減ヲ示サハ小學校ハ總數七十六校ニシテ其ノ生徒數九千九百二十五名前年度末ヨリ增加スルコト二千四百二十三名、教員數二百八十九名前年度末ヨリ增加スルコト六十四名學級數二百四十六前年度末ヨリ增加スルコト五十九ナリ高等女學校ハ總數四校(内一校ハ私立女學校)ニシテ其ノ生徒數二百九十三名前年度末ヨリ增加スルコト百二十二名教員數三十九名前年度末ヨリ增加スルコト七名學級數十三前年度末ヨリ增加スルコト四ナリ幼稚園ハ總

數七園ニシテ幼兒數五百十名前年度末ヨリ增加スルコト五十三名ナリ其ノ他商業學校專門學校ハ校數各一校ニシテ前年度ニ比シ増減ナク生徒數ハ孰レセ多少ノ減少ヲ示セリ右ノ外晝間修學ノ餘暇ナキ居留日本青年ノ爲京城ニ善隣商業學校夜學專習科及仁川ニ仁川商業夜學校ノ開設ナ見タリ如上學校總數中在外指定ノ特典ヲ有スルモノ小學校十五校、高等女學校二校及商業學校一校ナリトス

(六) 銀 行

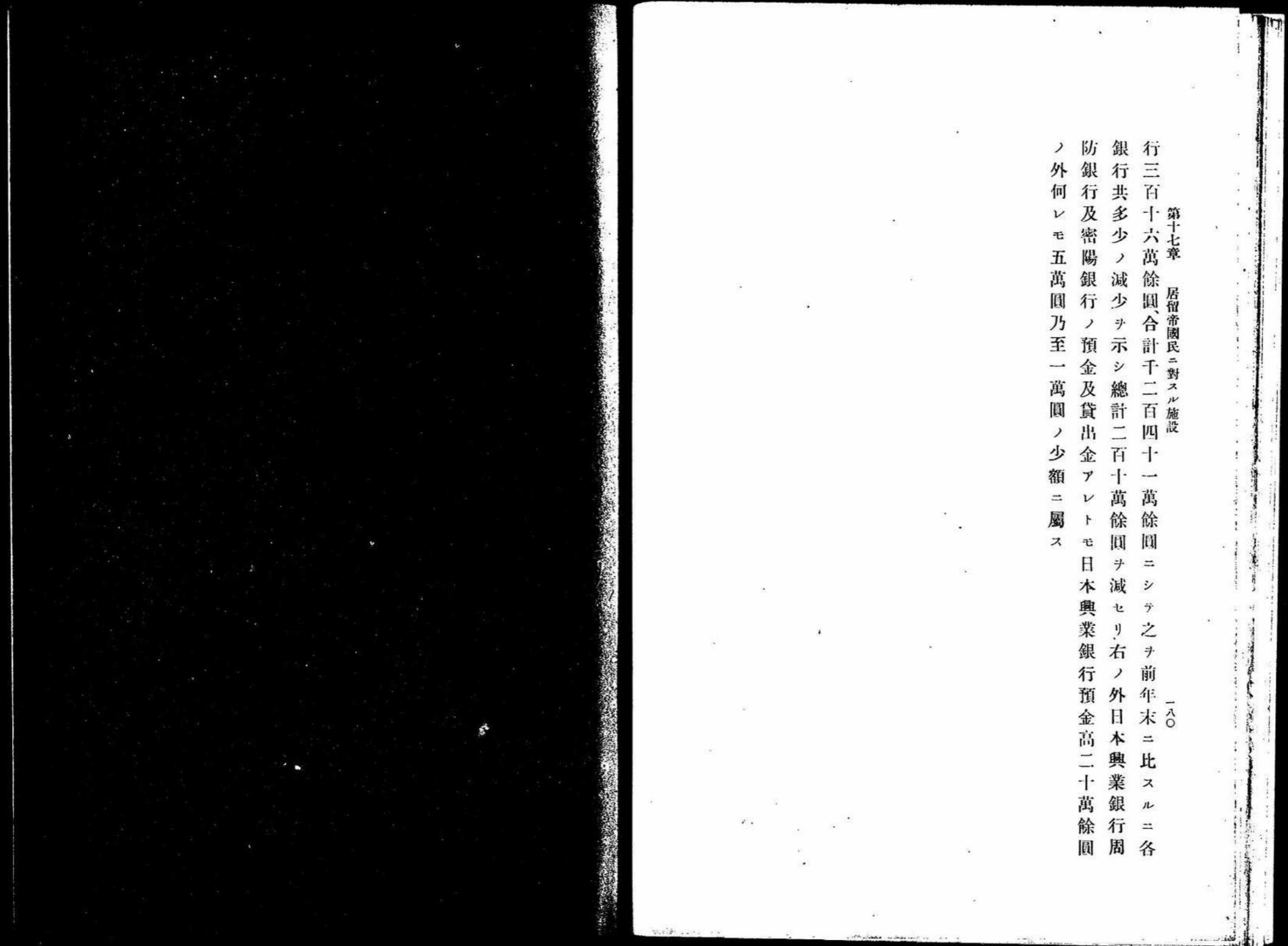
明治四十一年末ニ於ケル日本人經營ノ在韓金融機關ハ同年七月株式會社周防銀行釜山支店ノ開業アリタル外前年末ト同一ニシテ其ノ資本金額、支店出張所々在地等何等異動ナシ

今各銀行金融狀況ノ一班ヲ概觀スル爲其ノ預金高並貸出金高ノ概數ヲ舉クレハ預金高ニ於テ第一銀行九百四十九萬餘圓、第十八銀行百七十二萬餘圓、第五十八銀行百四十五萬餘圓、合計千二百六十七萬餘圓ニシテ之ヲ前年末ニ比スルニ各銀行共二割内外ノ減少ヲ示シ總計二百五十餘萬圓ヲ減シ貸出金高ニ於テ第一銀行六百六十一萬餘圓、第十八銀行二百六十三萬餘圓、第五十八銀

第十七章 居留帝國民ニ對スル施設

一八〇

行三百十六萬餘圓、合計一千二百四十一萬餘圓ニシテ之ヲ前年末ニ比スルニ各銀行共多少ノ減少ヲ示シ、總計二百十萬餘圓ヲ減セリ。右ノ外日本興業銀行、周防銀行及密陽銀行ノ預金及貸出金アレトモ日本興業銀行預金高二十萬餘圓ノ外何レモ五萬圓乃至一萬圓ノ少額ニ屬ス。



露光量違いにより重複撮影

第十七章 告別帝國民の君主と建設
行三百十六萬餘圓、合計一千二百四十萬等圓。之之前年未、比斯等、各
銀行共多少、減少。示る總計二百十萬餘圓、減る右、外日本興業銀行、周
防銀行及密陽銀行預金及貸出金アリ。日本興業銀行預金高三十萬餘圓
、外何、セ五萬圓乃至一萬圓、少額、屬。

附 錄

附錄目次

(二) 條約及協定書

一時貸附金ニ關スル契約 一
韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約 一
日韓兩國漁業協定 一

在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關スル日韓協定 三

(二) 法 律

東洋拓殖株式會社法 一

(三) 官 制

統監府臨時間島派出所官制 八

統監府特許局官制 八

(四) 勅 令

韓國特許令 九

韓國意匠令 一〇

目 次

韓國商標令

二〇

韓國商號令

一〇

韓國著作権令

一一

關東州及帝國カ治外法權ヲ行使スルコトヲ得ル外國ニ於ケル特許權、商標及著作権ノ保護ニ關スル制

一二

(五) 府 令

新聞紙規則

一三

土地建物所有權證明規則

一四

居留規則

一六

小學校規則

一七

(六) 韓國法令

帝室債務ニ關スル件

一〇

宮内府所管及慶善宮所屬財產ノ移屬及帝室債務ノ整理ニ關スル件

一〇

地稅ニ關スル件

一一

紅參專賣法

一一

家屋稅法

一三

酒稅法

一五

煙草稅法

一六

礦業用器具機械ノ輸入稅並銅及金銀銅鑄石ノ輸出稅免除ニ關スル件

一七

森林法

一七

國有土石採取規則

二九

漁業法

三一

私立學校令

三三

學會令

三四

土地建物所有權證明規則

三五

附 錄

(二) 條約及協定書

一時貸付金ニ關スル契約

明治四十二年三月

大日本國政府及大韓國政府ハ兩國間ノ協約ニ基キ韓國施政改善ノ經費ニ充ツル爲左ノ年割及條件ニ依リ大日本國政府ヨリ大韓國政府ニ貸付金ヲ爲スノ件ニ關シ大日本國政府ハ統監公爵伊藤博文ヲ大韓國政府ハ度支部大臣高永喜ヲ各其ノ代表者ト爲シ左ノ契約ヲ締結ス

第一條 日本國政府ハ金壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓ヲ限リ左ノ年割ニ依リ韓國政府ニ貸付金ヲ爲スモノトス

一金壹百七拾六萬九千五百參圓
一金五百貳拾五萬九千五百八拾圓
一金四百六拾五萬參千五百四拾圓
一金 四 百 萬 圓
一金 四 百 萬 圓
計金壹千九百六拾八萬貳千六百貳拾參圓

第二條 前條ノ貸付金ニハ利子ヲ附セサルモノトス

第三條 右貸付金ノ償還期限ハ特ニ之ヲ協定セナルモ韓國政府ハ可成速ニ財政ノ整理ヲ遂行シ該貸付金ヲ償還スルモノトス

右證據トシテ日韓兩國文ヲ以テ本契約書各二通ヲ作成シ兩國政府ノ代表者之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十一年三月二十日

統監公爵

伊藤博文

印

隆熙二年三月二十日

度支部大臣

高永喜

印

韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約

條約

明治四十二年八月

條約第四號

朕樞密顧問ノ諮詢ヲ經テ亞米利加合衆國華盛頓ニ於テ日米兩國全權委員ノ記名調印シタル韓國ニ於ケル發明、意匠、商標及著作權ノ保護ニ關スル日米條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公

セシム

日本國皇帝陛下及亞米利加合衆國大統領ハ韓國ニ於テ其ノ臣民又ハ人民ノ發明、意匠、商標及著作權ノ保護ヲ確保セムコトヲ欲シ之カ爲條約ヲ締結スルコトニ決シ日本國皇帝陛下ハ亞米利加合衆國駐箚特命全權大使正三位勳一等男爵高平小五郎ヲ亞米利加合衆國大統領ハ其ノ國務大臣代理ロ

附 錄 條約及協定書

二

パート、ベーベン各其ノ全權委員ニ任命セリ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ委任狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ左ノ諸條ヲ協議決定セリ

第一條 日本国政府ハ發明、意匠、商標及著作権ニ關シ現ニ日本國ニ行ハルト同様ノ法令カ本條約ノ實施ト同時ニ韓國ニ於テ施行セラルガコト爲スヘシ右法令ハ韓國ニ於ケル米國人民ニ對シテモ日本國臣民及韓國臣民ニ對スルト同シク適用セラルヘキモノトストキハ韓國ニ於テ施行セラレタル法令モ亦改正法令ノ趣旨ニ依リ修正セラルヘシ

第二條 亞米利加合衆國政府ハ米國人民ニシテ韓國內ニ於テ保護ヲ受クヘキ特許發明、登錄意匠、登錄商標又ハ著作権ヲ侵害シタルモノアリタル場合ニ右米國人民カ本件ニ關シ韓國ニ於ケル日本國裁判所ノ裁判管轄權ニ專屬スヘキコトヲ約シ合衆國ノ治外法權ハ此ノ事ニ關シ之ヲ棄棄スルモノトス

第三條 亞米利加合衆國ノ所屬地ノ人民ハ本條約ノ適用上米國人民ト同一ノ取扱ヲ受クヘキモノトス

第四條 韓國臣民ニシテ合衆國ノ法令ニ定メタル手續ヲ履行スルトキハ同國內ニ於テ發明、意匠、商標及著作権ニ關シ米國人民ト同一ノ保護ヲ享受スヘシ

第五條 第一條ニ依ル法令ノ施行以前米國人民カ日本國ニ

於テ特許ヲ受ケタル發明又ハ登錄ヲ受ケタル意匠、商標若ハ著作権ハ別段ノ手續ヲ要セス日本國臣民又ハ韓國臣民同様ニ特許又ハ登錄ヲ受ケタル工業所有權又ハ著作權カ韓國内ニ於テ保護セラルト同一ノ保護ヲ本條約ニ依リ同國內ニ於テ享受スヘシ
締約國ノ一方ノ臣民若ハ人民又ハ韓國臣民カ本條約實施以前合衆國ニ於テ特許ヲ受ケタル發明又ハ登錄ヲ受ケタル意匠、商標者ハ著作權ハ其ノ前記法令ノ規定ニ依リ特許又ハ登錄ヘカラサル性質ヲ有スルモノニ非サル限り本條約實施後一年内ニ特許又ハ登錄ヲ受ケル場合ニ限り何等料金ヲ要スルコトナク韓國ニ於テ特許又ハ登錄セラルヘシ

第六條 日本國政府ハ商號ノ保護ニ付千八百八十三年三月二十日巴里ニ於テ調印セラレタル萬國工業所有權保護同盟條約ニ依リ米國人民カ日本國ノ版圖内ニ於テ受ケルト且本條約實施後一年内ニ特許又ハ登錄ヲ受ケル場合ニ限リ何等料金ヲ要スルコトナク韓國ニ於テ特許又ハ登錄セラルヘシ

第七條 本條約ハ之ヲ批准シ其ノ批准書ハ成ルヘク速ニ東京ニ於テ交換セラルヘシ
本條約ハ批准書交換ノ日ヨリ十日ヲ経タル後實施セラルヘシ
右證據トシテ各全權委員ハ之ニ記名調印スルモノナリ

明治四十一年五月十九日即西曆一千九百八年五月十九日華盛頓ニ於テ本書二通ヲ作ル

高平小五郎印

ロバート・ベーコン印

日韓兩國漁業協定

統告第一年十一月

在韓國外國人民ニ對スル警察事務
在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關シ明治四十二年三月十五日ヲ以テ統監府及韓國政府ニ於テ左ノ協定ヲ爲シタリ
在韓國外國人民ニ對スル警察事務ニ關シテハ韓國警察官ハ當該日本國官憲ノ指揮監督ヲ受クヘシ

(二) 法 律

東洋拓殖株式會社法

明治十一年八月

第一章 總 則

第一條 東洋拓殖株式會社ハ韓國ニ於テ拓殖事業ヲ營ムコトヲ目的トスル株式會社トシ其ノ本店ヲ韓國ニ置ク

第二條 東洋拓殖株式會社ノ資本ハ一千萬圓トス但シ政府ノ認可ヲ受ク之ヲ増加スルコトヲ得

第三條 東洋拓殖株式會社ノ株式ハ總テ記名式トシ日韓兩國人ニ限リ之ヲ所有スルコトヲ得

第四條 東洋拓殖株式會社ノ資本增加ハ株金全額ノ拂込アルコトヲ要セス

第五條 東洋拓殖株式會社ノ存立時期ハ設立登記ノ日ヨリ百年トス但シ政府ノ認可ヲ受ク之ヲ延長スルコトヲ得

附 錄 法 律

三

附 錄 法 律

四

第六條 東洋拓殖株式會社ハ政府ノ認可ヲ受ケ支店又ハ出張所ヲ東京其ノ他ノ地ニ置ク

第二章 役員

第七條 東洋拓殖株式會社ニ總裁一人、副總裁二人、理事四人以上、監事三人以上ヲ置ク

第八條 總裁ハ東洋拓殖株式會社ヲ代表シ其ノ業務ヲ總理ス

副總裁ハ總裁事故アルトキ其ノ職務ヲ代理シ總裁缺員ノトキ其ノ職務ヲ行フ

副總裁及理事ハ總裁ヲ補助シ東洋拓殖株式會社ノ業務ヲ分掌ス

監事ハ東洋拓殖株式會社ノ業務ヲ監査ス

第九條 總裁ハ日本人トシ政府之ヲ命ス

副總裁ハ一人ハ日本人トシ一人ハ韓國人トス

理事及監事ハ其ノ員數ノ少ナクトモ三分ノ二ハ日本人トシ其ノ他ハ韓國人トス

副總裁及理事中日本人ハ政府之ヲ命シ韓國人ハ韓國政府之ヲ命ス但シ理事ノ任命ニ付テハ株主總會ヲシテ五十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ各二倍ノ候補者ヲ選舉セシム

監事ハ株主總會ニ於テ三十株以上ヲ所有スル株主中ヨリ之ヲ選舉ス

總裁、副總裁及理事ノ任期ハ五年トシ監事ノ任期ハ二年トス

第十條 總裁副總裁及理事ハ他ノ職務又ハ商業ニ從事スルコトヲ得シ政府ノ許可ヲ受ケタルトキハ此ノ限ニ在ラス

第三章 營業

第十一條 東洋拓殖株式會社ハ左ノ業務ヲ營ムモノトス

一 農業 拓殖ノ爲必要ナル土地ノ賣買及貸借

二 拓殖ノ爲必要ナル建築物ノ築造、賣買及貸借

三 拓殖ノ爲必要ナル農民ノ募集及分配

四 移住民及韓國農業者ニ對シ拓殖上必要ナル物品ノ供給販賣其ノ生産又ハ獲得シタル物品ノ分配

五 拓殖ノ爲必要ナル資金ノ供給

六 移住民及韓國農業者ニ對シ拓殖上必要ナル物品ノ供給販賣其ノ生産又ハ獲得シタル物品ノ分配

七 拓殖上必要ナル資金ノ供給

第十二條 東洋拓殖株式會社ハ政府ノ認可ヲ受ケ附帶事業トシテ韓國ニ於テ水產業其ノ他拓殖上必要ナル事業ヲ營ムコトヲ得

第十三條 第十一條第七號ノ資金供給ハ左ノ方法ニ依リ之ヲ行フヘシ

一 日韓移住民ニ對シ二十五年以内ノ年賦償還ノ方法ニ依ル移住費ノ貸付

二 移住民及韓國農業者ニ對シ十五年以内ノ年賦償還ノ方法ニ依ル韓國ニ於ケル不動產ヲ擔保トスル貸付

三 移住民及韓國農業者ニ對シ五年以内ノ定期償還ノ方

第十九條 左ノ場合ニ於テハ償還期限前ト雖貸付金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

一 債務者カ貸付ノ目的ニ反シテ貸付金ヲ使用シタルトキハ

二 債務者カ年賦金ノ拂込ヲ遅延シ催告ヲ受クルモ尙拂込ヲ爲サルトキ

三 擔保タル不動產ノ全部又ハ一部カ公用ノ爲收用セラルトキ其ノ債務者ニ於テ收用補償金ヲ供託シ又ハ相當

ノ不動產ヲ以テ増擔保トスルトキハ此ノ限リニ在ラス

前項第三項、場合ニ於テ其ノ收用カ一部ニ止マルトキハ

ノ不動產ヲ以テ増擔保トスルトキハ此ノ限リニ在ラス

四條ノ割合ニ不足ヲ生シタルトキハ増擔保ヲ要求シ又ハ

其ノ不足ニ相當スル貸付金額ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

債務者前項ノ要求ニ應セサルトキハ償還期限前ト雖貸付

金全部ノ償還ヲ要求スルコトヲ得

第二十二條 東洋拓殖株式會社ハ營業上必要アルトキハ政

府ノ認可ヲ受ケ借入金ヲ爲スコトヲ得

第二十三條 東洋拓殖株式會社ハ拂込資本額ノ十倍ヲ限り

附 錄 法 律

六

東洋拓殖債券ヲ發行スル場合ニ於テハ商法第百九十九條ノ規定ヲ適用セス

第二十四條 東洋拓殖債券ヲ發行セムトスル場合ニ於テハ每回其ノ金額條件並發行償還ノ方法ヲ定メ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第二十五條 東洋拓殖債券ヲ發行スル場合ニ於テハ數回ニ分チ拂込ヲ爲サシムルコトヲ得

第二十六條 東洋拓殖債券ハ全額拂込ノ後ハ無記名式トス但シ應募者又ハ所有者ノ請求ニ因リ記名式トスコトヲ得

第二十七條 東洋拓殖債券ノ所有者ハ東洋拓殖株式會社ノ財產ニ付他ノ債権者ニ先ナテ自己ノ債権ノ辨済ヲ受タル權利ヲ有ス

第二十八條 東洋拓殖株式會社ハ社債借替ノ爲一時第三條ノ制限ニ依ラヌ東洋拓殖債券ヲ發行スルコトヲ得此ノ場合ニ於テハ發行後一月以内ニ其ノ社債總額ニ相當スル舊東洋拓殖債券ヲ償還ヘシ

第二十九條 東洋拓殖債券ノ据置年限ハ五年以内トシ其ノ償還期限ハ三十年以内トス

第三十條 東洋拓殖株式會社ハ政府ノ認可ヲ受ク東洋拓殖債券ノ買入消却ヲ爲スコトヲ得

第五章 準備金
第三十一條 東洋拓殖株式會社ハ毎營業期ニ準備金トシテ

資本ノ缺損ヲ補フ爲利益ノ百分ノ八以上ヲ積立テ且利益配當ヲ得セシムル爲利益ノ百分ノ二以上ヲ積立ツヘシ

第三十二條 政府ハ東洋拓殖株式會社ノ業務ヲ監督ス

第六章 政府ノ監督及補助
第三十三條 政府ハ東洋拓殖株式會社監理官ヲ置キ韓國政府ノ任命シタル監理官ト共同シテ東洋拓殖株式會社ノ業務ヲ監視セシム

東洋拓殖株式會社監理官ハ何時ニテモ東洋拓殖株式會社ノ金庫帳簿及諸般ノ文書物件ヲ検査スルコトヲ得

第三十四條 政府ハ東洋拓殖株式會社ノ業務ニ關シ監督上必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

第三十五條 東洋拓殖株式會社ノ決議又ハ役員ノ行爲法令若ハ定款ニ違反シ又ハ公益ヲ害スルモノト認ムルトキハ政府ハ其ノ決議ヲ取消シ又ハ役員ヲ解職スルコトヲ得東洋拓殖株式會社ノ役員ニ於テ監督官廳ノ命シタル事項ヲ執行セサルトキ亦同シ

第三十六條 東洋拓殖株式會社ハ政府ノ認可ヲ受クルニ非サレハ利益金ノ處分ヲ爲スコトヲ得ス

第三十七條 東洋拓殖株式會社ニ於テ移住規則其ノ他ノ規定ヲ定ムルトキハ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第三十八條 東洋拓殖株式會社ニ於テ政府ノ認可ヲ受ケタル事項ヲ變更セムトスルトキハ更ニ政府ノ認可ヲ受クヘシ

第三十九條 政府ハ東洋拓殖株式會社ニ對シ設立登記ノ日ヨリ起算シ八年間ヲ限り毎年金三十萬圓ヲ每營業期ニ割當テ補給スヘシ但シ毎營業期ニ於ケル利益配當カ拂込資本額ニ對シ年八分ノ割合ヲ超過スルトキハ其ノ超過額ニ相當スル金額ヲ補給金ノ内ヨリ控除ス

第四十條 利益配當カ拂込資本額ニ對シ年一割ノ割合ヲ超過スルトキハ其ノ超過金額ハ先ツ之ヲ前條補給金ノ償還ニ充ツヘシ前項ノ償還ヲ終ヘタルトキハ該超過金額ハ其ノ半額ヲ特別積立金トスヘシ

第七章 罰 則
第四十一條 東洋拓殖株式會社ニ於テ左ノ事犯アルトキハ總裁若ハ總裁ノ職務ヲ行ヒ又ハ代理スル副總裁ヲ百圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス其ノ事犯副總裁又ハ理事ノ分擔業務ニ係ルトキハ副總裁又ハ理事ヲ過料ニ處スルコト亦同シ

一本法ニ於テ政府ノ認可ヲ受クヘキ場合ニ其ノ認可ヲ受ケサルトキ
附 錄 法 律
第五章 準備金
第三十一條 東洋拓殖株式會社ハ毎營業期ニ準備金トシテ
總裁若ハ總裁ノ職務ヲ行ヒ又ハ代理スル副總裁ヲ百圓以上千圓以下ノ過料ニ處ス其ノ事犯副總裁又ハ理事ノ分擔業務ニ係ルトキハ副總裁又ハ理事ヲ過料ニ處スルコト亦同シ
一本法ニ於テ政府ノ認可ヲ受クヘキ場合ニ其ノ認可ヲ受ケサルトキ

第四十二條 東洋拓殖株式會社ノ總裁、副總裁又ハ理事第十條ノ規定ニ違反シタルトキハ二十圓以上二百圓以下ノ過料ニ處ス
第四十三條 前二條ニ規定セル過料ニ付テハ非訛事件手續法第二百六條乃至第二百八條ノ規定ヲ準用ス

第四十四條 政府ハ設立委員ヲ命シ韓國政府ノ命シタル設立委員ト共同シテ東洋拓殖株式會社ノ設立ニ關スル一切ノ事務ヲ處理セシム

第四十五條 設立委員ハ定款ヲ作リ政府ノ認可ヲ受ケタル後株主ヲ募集スヘシ
第四十六條 設立委員ハ株主ノ募集終リタルトキハ株式申

附錄官制

达書ヲ政府ニ差出シ東洋拓殖株式會社設立ノ認可ヲ申請

スヘシ

第47條 設立認可アリタルトキハ設立委員ハ遅滞ナク

各株ニ付第一回ノ拂込ヲ爲サンムヘシ

前項ノ拂込アリタルトキハ設立委員ハ遅滞ナク創立總會

ヲ招集スヘシ

第48條 創立總會終結シタルトキハ設立委員ハ其ノ事務ヲ東洋拓殖株式會社總裁ニ引渡スヘシ

第49條 第一期ノ理事及監事ハ株主總會ノ選舉ニ依ラ

ス之ヲ任命ス其ノ他ノ條件ニ付テハ第九條ノ例ニ依ル

(三) 官制

統監府臨時間島派出所官制

勅令第八十六年六月四日

改正 四十二年四月勅令第七十九號

第一條 統監府臨時間島派出所ハ統監ノ管理ニ屬シ間島ニ

於ケル韓國臣民ノ保護ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 統監府臨時間島派出所ニ左ノ職員ヲ置ク

所長 專任三人 奏任

事務官 専任二人 奏任

通譯官 專任二人 奏任

局長 專任二人 奏任

局

手

通シテ專任十人

判任

第三條 所長ハ統監ノ命ヲ受ケ一切ノ所務ヲ掌理ス

第四條 事務官ハ所長ノ命ヲ承ケ所務ヲ掌リ所長事故アル

トキハ臨時其ノ職務ヲ代理ス

第五條 技師ハ上官ノ命ヲ承ケ技術ヲ掌ル

第六條 局ハ上官ノ指揮ヲ承ケ庶務ニ從事ス

第七條 技師ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第八條 通譯官ハ上官ノ指揮ヲ承ケ文書翻譯及通譯ニ從事ス

附則

本令ハ明治四十一年四月十日ヨリ之ヲ施行ス

統監府特許局官制

勅令第二百二號

改正 四十二年十月勅令第三一〇號

第一條 統監府特許局ハ統監ノ管理ニ屬シ韓國ニ於ケル發明、實用新案、意匠、商標及著作権ニ關スル事務ヲ掌ル

第二條 統監府特許局ニ左ノ職員ヲ置ク

局長

韓國特許令

勅令一九八號

第一條 韓國ニ於ケル特許ニ關シテハ特許法ニ依ル但シ同法中帝國トアルハ韓國ニ、特許局トアルハ統監府特許局ニ、裁判所トアルハ理事廳及統監府法務院ニ、區裁判所トアルハ理事廳ニ、大審院トアルハ統監府法務院ニ該當ス

斯特許法第六條ノ帝國ハ本令ノ適用上日本國若ハ韓國ニ該當ス

第二條 本令ハ日韓兩國ノ臣民ニ對シ發明ニ付同様ノ保護ヲ與ヘ且韓國ニ於テ發明ノ保護ニ關シ治外法權ヲ行使セ

ケルノ特許ノ期間ニ從フ

前項ノ特許證主ハ本令施行ノ際現ニ韓國ニ於テ該發明ニ關係ル物品又ハ方法ヲ用ウル者及其ノ承繼人ニ對抗スルコトヲ得ス

第三條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 本令施行前日本國臣民、韓國臣民及米國人民カ日本國ニ於テ受ケタル特許ハ本令ニ依リ韓國ニ於テ特許ヲ受ケタルモノト看做ス但シ其ノ特許ノ期間ハ日本國ニ於

第七條 局ハ上官ノ指揮ヲ承ケ事務ニ從事ス

第八條 技手ハ上官ノ指揮ヲ承ケ技術ニ從事ス

第九條 通譯ハ上官ノ指揮ヲ受ケ通譯ニ從事ス

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

(四) 勅令

附錄 勅令

九

附 錄 勅 令

一〇

於テハ無料ニテ特許ヲ受クルコトヲ得但シ其ノ特許ノ期間ハ米國ニ於ケル其ノ特許ノ期間ニ從フ

韓國意匠令

勅令一九七號

第一條 韓國ニ於クル意匠ニ關シテハ意匠法ニ依ル但シ同法中農商務大臣トアルハ統監ニ、特許局トアルハ統監府特許局ニ、裁判所トアルハ理事廳ニ、大審院トアルハ統監府法務院ニ、區裁判所トアルハ理事廳ニ、大審院トアルハ統監府法務院ニ該當ス

特許法第六條ノ帝國ハ本令ノ適用上日本國若ハ韓國ニ該當ス

第二條 日本國若ハ韓國ノ皇室御紋章ト同一又ハ類似ノ形狀、模様ヲ有スル意匠ハ登録ヲ受クルコトヲ得ス

登録ヲ受ケタル意匠ニシテ前項ノ規定ニ違反シタルモノナルトキハ其ノ登録ヲ無効トス

登録ヲ受ケタル意匠ニシテ前項ノ規定ニ該當スルコトヲ發見シタル者ハ其ノ登録ヲ無効トスル爲統監府特許局ニ審判ヲ請求スルコトヲ得ス

第三條 本令ハ日韓兩國ノ臣民ニ對シ意匠ニ付同様ノ保護ヲ與ヘ且韓國ニ於テ意匠ノ保護ニ關シ治外法權ヲ行使セサル國ノ臣民及人民ニモ之ヲ適用ス

附 則

特許法第六條ノ帝國ハ本令ノ適用上日本國若ハ韓國ニ該當ス

韓國商標令

勅令第一九八號

第一條 韓國ニ於ケル商標ニ關シテハ商標法ニ依ル但シ同法中帝國トアルハ韓國ニ、農商務大臣トアルハ統監ニ、特許局トアルハ統監府特許局ニ、裁判所トアルハ理事廳及統監府法務院ニ、區裁判所トアルハ理事廳ニ、大審院トアルハ統監府法務院ニ該當ス

特許法第六條ノ帝國ハ本令ノ適用上日本國若ハ韓國ニ該當ス

第四條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第五條 本令施行前日本國臣民、韓國臣民又ハ米國人民カ日本國ニ於テ登録ヲ受ケタル商標ハ本令ニ依リ韓國ニ於テ登録セラレタルモノト看做ス但シ其ノ商標專用ノ期間ハ日本國ニ於テ登録ヲ受ケタル意匠ハ本令ニ依リ韓國ニ於テ登録セラレタルモノト看做ス但シ其ノ意匠專用ノ期間ハ日本國ニ於ケル其ノ意匠專用ノ期間ニ從フ

第六條 本令施行前日本國臣民、韓國臣民又ハ米國人民カ日本國ニ於テ登録ヲ受ケタル商標ニ付其ノ登録商標主カ本

合施行ノ日ヨリ一年内ニ統監府特許局ニ其ノ登録ヲ出願シタルトキハ其ノ登録ニ付テハ商標料ヲ徵收セス

韓國商號令

勅令第一九九號

第一條 韓國ニ於ケル商號ニ關シテハ商法及非訛事件手續法ニ依ル但シ同法中市町村トアルハ府郡ニ、府縣トアルハ道ニ、裁判所トアルハ理事廳及統監府法務院ニ、日本トアルハ韓國ニ、司法大臣トアルハ統監ニ該當ス

第二條 本令ハ日韓兩國臣民ノ商號ニ關シ同様ノ保護ヲ與ヘ且韓國ニ於テ商號ノ保護ニ關シ治外法權ヲ行使セサル國ノ臣民及人民ニモ之ヲ適用ス

附 則

第三條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 商法第十八條ノ規定ハ本令施行前ヨリ韓國內ニ於テ使用スル商號ニハ之ヲ適用セス

韓國著作權令

勅令二〇〇號

第一條 韩國ニ於ケル著作權ニ關シテハ著作權法ニ依ル但シ同法中帝國トアルハ韓國ニ、裁判所トアルハ理事廳及統監府法務院ニ該當ス

第二條 本令ハ日韓兩國ノ臣民ニ對シ著作權ニ付同様ノ保

附 錄 勅 令

合

一一

附 錄 勅 令

二二

謀ヲ與へ且韓國ニ於テ著作権ノ保護ニ關シ治外法権ヲ行使セサル國ノ臣民及人民ニモ之ヲ適用ス

附 則

第三條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第四條 本令施行前日本國臣民、韓國臣民又ハ米國人民ノ日本國ニ於テ享有スル著作権ハ本令ニ依リ保護セラルルモノトス

第五條 本令施行前米國ニ於テ著作権ノ登録ヲ受ケタル日本國臣民、韓國臣民又ハ米國人民ハ本令施行ノ日ヨリ一年ヲ限リ統監府特許局ニ其ノ著作権ノ無料登録ヲ出願スルコトヲ得

第六條 日本國又ハ米國ニ於テ保護セラルル日本國臣民、韓國臣民又ハ米國人民ノ著作物ヲ本令施行前韓國ニ於テ著作権者ノ承諾ナクシテ複製シタル者、翻譯シタル者若ハ興行シタル者又ハ複製、翻譯、興行ニ著作シタル者ハ本令施行後一年間ハ之ヲ完成シテ發賣頒布シ又ハ興行スルコトヲ得

第七條 前條ノ場合ニ於テハ統監府令ノ定ムル手續ヲ履行スルニ非サレハ其ノ複製物ヲ發賣頒布シ又ハ興行スルコトヲ得ス

附 則

第四條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第五條 本令施行ノ際本令ノ保護スル他人ノ商標又ハ規定ヲ適用ス

關東州及帝國カ治外法権ヲ
行使スルコトヲ得ル外國ニ

作權ノ保護ニ關スル制 改正 四年勅令三二一號

第一條 帝國臣民又ハ韓國臣民カ帝國ニ於テ享有スル特許權、意匠權、商標權、實用新案權及著作權ノ效力ハ關東州及帝國カ治外法権ヲ行使スルコトヲ得ル外國ニ在ル帝國臣民及韓國臣民ニ及フモノトス

第二條 特許法、意匠法、商標法、實用新案法及著作權法中ノ罪ニ關スル規定ハ關東州及帝國カ治外法権ヲ行使スルコトヲ得ル外國ニ在ル帝國臣民及韓國臣民ニ對シ之ヲ適用ス

第三條 日韓兩國以外ノ國ノ臣民又ハ人民カ帝國ニ於テ享有スル工業所有權及著作權ニ付テハ其ノ所屬國カ治外法権ヲ有スル外國ニ於テ日韓兩國ノ臣民ニ對シ工業所有權及著作權ノ保護ヲ與へ且韓國ニ於テ工業所有權及著作權ノ保護ニ關シ治外法権ヲ行使セサル場合ニ限り前二項ノ規定ヲ適用ス

附 則

第四條 本令ハ明治四十一年八月十六日ヨリ之ヲ施行ス

第五條 本令施行ノ際本令ノ保護スル他人ノ商標又ハ規定ヲ適用ス

類似スル商標ヲ不正ニ附シタル商品ヲ販賣ノ爲所藏スル者ハ本令施行後六月内ニ其ノ商標ヲ除去若ハ抹消スル又ハ該商品ヲ清國市場ヨリ撤去スルコトヲ要ス

第六條 日本國臣民、韓國臣民及米國人民カ帝國又ハ米國內ニ於テ著作権ヲ享有セル著作物ヲ本令施行前清國ニ於テ著作権者ノ承諾ナクシテ複製シタル者、翻譯シタル者若ハ興行シタル者又ハ複製、翻譯、興行ニ著作シタル者ハ本令施行後一年間ハ之ヲ完成シテ發賣頒布シ又ハ興行スルコトヲ得

編輯人二人以上アルトキハ主トシテ編輯事務ヲ擔當スル者ヲ記載スヘシ
認可ヲ受ケタル後第一項第一號乃至第四號ニ掲タル事項並發行人編輯人及印刷人ヲ變更セムトスルトキハ理事官ノ認可ヲ受ケ發行人編輯人及印刷人ノ住所氏名ヲ變更シタルトキハ五日以内ニ發行地ノ管轄理事官ニ届出ツヘシ第一條ノ二 發行ノ時期ヨリ五十日ヲ過キテ發行セサルトキハ認可ハ其ノ效力ヲ失フ

第二條 發行人及編輯人ハ印刷人ヲ兼スルコトヲ得ス
第三條 發行人編輯人及印刷人死去シ又ハ第五條第二號及第五條ニ該當スルトキハ七日以内ニ之ニ代ルヘキ者ヲ定メ理事官ノ認可ヲ受クヘシ
前項ノ認可ヲ受タルマテハ假擔當者ヲ定メ發行スルコトヲ得

第四條 發行ノ休止ヲ爲ストキハ豫メ其ノ期間ヲ定メ管轄

第五條 左ニ掲タル者ハ發行人編輯人及印刷人トナルコトヲ得ス

第六條 發行人ハ第一條第一項ノ認可ヲ受ケタルトキハ保證トシテ左ノ金額ヲ認可書交付ト同時ニ管轄理事官ニ納

(五) 府 令

新聞紙規則

改正 四年勅令十二號

新規則

四年勅令三三號 四年勅令三五號

第一條 新聞紙ヲ發行セムトスル者ハ左ノ事項ヲ記載シ發行地ヲ管轄スル理事官ノ認可ヲ受クヘシ
一 題 號
二 記載ノ種類
三 發行ノ時期
四 發行所及印刷所
五 發行人編輯人及印刷人ノ住所氏名年齡

附 錄

府 令

一三

附 錄 府 令

一四

- 一 京城、仁川、釜山及其ノ區域外二里以内ノ地ニ於テハ二千圓
- 二 前條ニ掲タル以外ノ理事處所在地及其ノ區域外一里以内ノ地ニ於テハ一千圓
- 三 前二號以外ノ地ニ於テハ五百圓
- 四 一箇月五回以下發行スルモノニ在リテハ前記各號ノ半額

保證金ハ時價ニ準シ前項各號ノ金額ニ相當スル公債證書ヲ以テ之ヲ代納スルコトヲ得
第七條 發行人編輯人又ハ印刷人本則ノ規定ニ違反シ裁判ヲ受ケ其ノ判決確定ノ日ヨリ七日以内ニ罰金及裁判費用ヲ納付セサルトキハ保證金ヲ以テ之ニ充ツヘシ
保證金ヲ以テ罰金及裁判費用ニ充タルトキハ發行人ハ管轄理事處ノ通知ヲ受クタル日ヨリ七日以内ニ其ノ保證金ノ缺額ヲ納付ス
第八條 新聞紙ハ每號ニ發行人編輯人印刷人ノ氏名及發行所ヲ掲載スヘシ
第九條 發行人ハ其ノ發行シタル新聞紙ヲ統監府、管轄理事處及管轄地方裁判所檢事局ニ每號各一部ヲ納付スヘシ
第十條 左ノ事項ハ新聞紙ニ掲載スルコトヲ得ス

- 一 日韓兩皇室ノ尊嚴ヲ冒涜セムトスル事項
 - 二 治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壊亂セムトスル事項
 - 三 公ニセサル官廳ノ文書及議事ニ關スル事項
 - 四 公判ニ附セサル以前ニ於ケル重罪輕罪ノ豫審ニ關スル事項及傍聽ヲ禁シタル裁判ニ關スル事項
 - 五 刑事被告人又ハ犯罪人ヲ救護シ若ハ賞恤シ又ハ犯罪ヲ庇庇スル事項
- 第十一條 理事官ハ必要ト認ムルトキハ外交軍事及秘密ヲ要スル事項ノ掲載ヲ禁止スルコトヲ得
第十二條 新聞紙ニシテ第十條ノ規定又ハ第十一條ニ依ル命令ニ違反シタル場合ニ於テハ理事官ハ其ノ發賣頒布ヲ禁止シ之ヲ差押ヘ且ツ發行ヲ停止シ又ハ認可ヲ取消ストヲ得
第十三條 理事官ハ韓國內ニ輸入スル新聞紙ニシテ治安ヲ妨害シ又ハ風俗ヲ壊亂スルモノト認ムルトキハ其ノ新聞紙ノ發賣頒布ヲ禁止シ之ヲ差押フルコトヲ得
第十四條 理事官ハ左ノ各號ニ該當スル新聞紙ハ之ヲ差押フヘシ
一 第一條第一項第三項及第三條ノ認可ヲ受ケス又ハ第一條第三項ノ届出ヲ爲スシテ發行シタルモノ
二 (削除)
三 保證金ノ缺額ヲ納付セスシテ發行シタルモノ
- 第十五條 新聞紙ニ掲載シタル事項ニ關シ本人又ハ關係者者

ヨリ取消又ハ正誤ノ爲掲載ヲ求メタル文書ハ其ノ次回若ハ第三回發行ノ紙上ニ其ノ全文ヲ掲載スヘシ
前項ノ場合ニ於テ取消書又ハ正誤書ノ字數原文ノ二倍ヲ超過スルトキハ超過字數ニ對シ其ノ新聞社ノ定メタル普通廣告料ト同一ノ代價ヲ要求スルコトヲ得
官報又ハ他ノ新聞紙ヨリ轉載若ハ抄錄シタル事項ニ關シ其ノ官報又ハ新聞紙ニ取消書又ハ正誤書ノ掲載アリタルトキハ其ノ次回若ハ第三回發行ノ紙上ニ之ヲ掲載スヘシ
取消書又ハ正誤書ハ原文ト同號ノ活字ヲ用キ同一欄内ノ首部ニ掲載スヘシ
第十六條 取消書又ハ正誤書ノ趣旨若ハ辭句ニシテ本則ニ於テ掲載ヲ禁止セラレタル事項ニ關スルトキ又ハ要求者ノ住所氏名ヲ明記セサルトキハ掲載セサルコトヲ得
第十七條 新聞紙ニ掲載シタル事項ニ關シ裁判ヲ受ケタルトキハ次回發行ノ新聞紙ニ判決書ノ全文ヲ掲載スヘシ
第十八條 編輯人ノ責任ニ關スル本則ノ規定ハ左ニ掲タル者ニ之ヲ準用ス
一 編輯人以外ニ於テ實際編輯ヲ擔當シタル者
二 掲載ノ事項ニ署名シタル者
三 取消書正誤書ノ事項ニ付テハ其ノ掲載ヲ請求シタル者
發行人編輯人及印刷人ニ關スル本則ノ規定ハ第三條第二項ノ假相當者ニ之ヲ準用ス

附錄 府令

一六

第二十七條 本則ハ明治四十一年五月一日ヨリ之ヲ施行ス
第二十八條 従來發行スル新聞紙及雑誌通信ノ類ニシテ從來ノ規定ニ依
ル保證金ヲ既ニ納付シタルモノ及本年九月三十日迄ニ之ヲ
納付シタルモノハ本令ニ依リ發行ノ認可ヲ受ケタルモノト
看做ス但シ第六條ノ保證金ハ本令施行ノ日ヨリ三箇年間ニ
之ヲ填補セシム三箇年ヲ經テ尙填補セサルトキハ認可ハ其
ノ效力ヲ失フ

附則

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

從來發行スル新聞紙及雑誌通信ノ類ニシテ從來ノ規定ニ依
ル保證金ヲ既ニ納付シタルモノ及本年九月三十日迄ニ之ヲ
納付シタルモノハ本令ニ依リ發行ノ認可ヲ受ケタルモノト
看做ス但シ第六條ノ保證金ハ本令施行ノ日ヨリ三箇年間ニ
之ヲ填補セシム三箇年ヲ經テ尙填補セサルトキハ認可ハ其
ノ效力ヲ失フ

土地建物所有權證明規則

統監府令第二四號

第一條 韓國臣民ニ非シテ左記各號ノニ該當スル者ハ
其ノ所有權ノ證明ヲ理事官ニ申請スルコトヲ得
一 土地建物證明規則施行前ニ土地又ハ建物ノ所有權ヲ
取得シタル者
二 土地建物證明規則施行後ニ賣買、贈與又ハ交換ニ依
ラシシテ土地又ハ建物ノ所有權ヲ取得シタル者
第三條 前條ノ證明ニ付テハ別ニ定ムルモノヲ除クノ外韓
國勅令土地家屋所有權證明規則及法部令土地家屋所有權

證明規則施行細則ノ規定ニ從フ

第三條 理事官カ證明ヲ爲シタルトキハ土地建物所有權證
明簿ニ記載セル要項ヲ府尹又ハ郡守ニ通知スヘシ

附則

本令ハ明治四十一年八月一日ヨリ之ヲ施行ス

居留規則

統令第四十五號

第一條 居留民ハ住居ノ日ヨリ二十日以内ニ左ノ事項ヲ記
載シ所轄理事官ニ届出ツヘシ
二 氏名
三 居留ノ場所
四 本籍及族稱
五 職業
六 戶主非戶主ノ別(非戶主ニ在リ)
七 同居スル家族ノ氏名生年月日及職業
前項各號ノ事項ニ變更ヲ生シタルトキハ二十日以内ニ届
出ツヘシ出生、死亡、失踪、國籍ノ喪失アリタルトキ亦
同シ
第二條 住居地ヲ退去スルトキハ豫メ其ノ行先ヲ明記シ所
轄理事官ニ届出ツヘシ
第三條 前二條ノ届出ハ單身者ニ在リテハ本人、家族攜帶

者ニ在リテハ戸主若ハ主宰者ヨリ之ヲ爲スヘシ但シ單身
者ニシテ死亡シ又ハ失踪シタルトキハ同居者又ハ家主若
ハ地主其ノ事實ヲ知リタル日ヨリ二十日以内ニ届出ツヘ
シ
第四條 居留民團地地區内ニ居住スル居留民ニシテ本則ニ依
リ届出ヲ爲ス場合ニ於テハ居留民團役所ヲ經由スヘシ
第五條 第一條及第二條ノ届出ヲ爲ササル者ハ十回以下ノ
過料ニ處ス

第六條 本則ハ明治四十一年十月十五日ヨリ之ヲ施行ス
本則ハ居留民團地區内及理事官ノ指定スル地區ニ限リ之
ヲ施行ス

第七條 本則施行ノ際現ニ居留スル者ニ付テハ第一條第一
項ノ届出期間ハ本則施行ノ日ヨリ之ヲ起算ス
本則施行前領事館令又ハ理事廳令ニ依リ居留ノ届出ヲ爲
シタル者ニ付テハ第一條第一項ノ規定ヲ適用セス

小學校規則

統令第三號

第一章 總則

第一條 小學校ハ兒童身體ノ發達ニ留意シテ德育教育及國
民教育ノ基礎並其ノ生活ニ必須ナル普通ノ知識技能ヲ授
クルヲ以テ本旨トス

附錄

府令

一七

第二條 小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トヲ一校ニ併置ス
尋常小學校ノ教科ト高等小學校ノ教科トヲ一校ニ併置ス
尋常高等小學校トス
第三條 対シテハ尋常小學校ノ教科ヲ授クヘ
キ部分ニ對シテハ尋常小學校ノ規定ヲ準用シ高等小學校ノ教科ヲ授クヘ
キ部分ニ對シテハ高等小學校ノ規定ヲ準用シ
第四條 本規則ニ依ラサル學校ハ小學校ト稱スルヲ得ス
第五條 小學校ヲ設立セムトヘルトキハ左ノ事項ヲ具シ理
事官ノ認可ヲ受クヘシ
一 學校ノ名稱
二 學則
三 開校ノ豫定期日
四 職員ノ履歷書
五 學校ノ位置
六 校地及校舍ノ平面圖、地名、坪數、方位、校舍ノ位
置及建築ノ概況ヲ記スヘシ
七 通學區域内ノ戶數、人口及學齡兒童學年男女別表
八 經費及維持方法
前項第一號、第二號、第五號、第六號及第八號ノ變更ハ
理事官ノ認可ヲ受クヘシ
第六條 小學校ヲ廢止セムトヘルトキハ其ノ理由、兒童及

附 錄 府 令

一八

財産ノ處分方法ヲ具シ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

第三章 教科及編制

第七條 小學校ノ修業年限、教科目、教則及編制ニ關シテハ特ニ規定スルモノ外明治三十三年勅令第三百四十四號小學校令及同年文部省令第十四號小學校令施行規則ノ定期ム所ニ依ル但シ同令中府縣知事ノ職權ハ理事官之ヲ行

前項教科目ノ外高等小學校ニ於テハ隨意科目トシテ韓語ヲ加フルコトヲ得ノ教授要旨及數學級ノ全部又ハ一部

兒童ヲ合セテ同時ニ之ヲ教授シ得ル規定ニ關シテハ英語ノ例ニ依ル

韓語ヲ加フルトキハ其ノ教授時數ハ毎週二時以下トシ毎週教授時數ノ制限内ニ於テ學校長之ヲ定ムヘシ

第八條 小學校ノ教科用圖書ハ文部省ニ於テ著作権ヲ有スルモノタルヘシ但シ修身、日本歴史地理ノ教科用圖書及國語讀本ヲ除クノ外文部大臣ノ檢定シタルモノニ就キ理事官ノ認可ヲ受ケ學校長ニ於テ之ヲ撰定スルコトヲ得補習科ノ教科用圖書ハ學校長ニ於テ之ヲ定メ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

第九條 學校長ハ酷暑又ハ嚴寒ノ時季ニ在リテハ各四十日以内ニ於テ毎日ノ教授時數ヲ減スルコトヲ得

前項ノ規定ニ依リ減スヘキ教授時數ハ學校長ニ於テ便宜各教科目ノ毎週教授時數ヲ斟酌シテ之ヲ定ムヘシ

第十條 講常高等小學校ハ之ヲ單級編制ト爲スコトヲ得ス
第四章 學校休業日及式日

第十一條 學年ハ四月一日ニ始り翌年三月三十一日ニ終ル
學年ハ分テ三學期トシ第一學期ハ四月一日ヨリ八月三十日マテ、第二學期ハ九月一日ヨリ十二月三十一日マテ

第三學期ハ翌年一月一日ヨリ三月三十一日マテトス
第十二條 每日ノ教授終始ノ時刻ハ學校長之ヲ定ムヘシ

第十三條 小學校ノ休業日ハ左ノ如シ
一 祝日大祭日

二 日曜日
三 夏季休業七月二十一日ヨリ八月三十一日マテ
四 冬季休業十二月二十六日ヨリ翌年一月七日マテ

五 學年末休業三月二十六日ヨリ同月三十日マテ
土地ノ情況ニ依リ夏季及冬季ノ休業ハ前項ノ規定ニ拘ラス兩季ヲ通シテ六十日以内ニ於テ理事官ノ認可ヲ受ケ適宜ニ之ヲ定ムルコトヲ得

前二項ノ外臨時休業ヲ要スルトキハ學校長ニ於テ其ノ事由ヲ具シ理事官ノ認可ヲ受クヘシ

天災事變ニ他ノ前項ノ認可ヲ受クル暇ナキ際ハ學校長ニ於テ休業ヲ爲スコトヲ得此ノ場合ニ於テハ直ニ理事官ス屆出ツヘシ

第十四條 紀元節、天長節及一月一日ニハ職員及兒童學校ニ參集シ左ノ式ヲ行フヘシ

一 職員及兒童「君カ代」ヲ合唱ス
二 職員及兒童ハ天皇陛下ノ御影ニ對シ奉リ最敬禮ヲ行ソ

正スヘシ

三 學校長ハ教育ニ關スル勅語ヲ奉讀ス

四 學校長ハ教育ニ關スル勅語ニ基キ聖旨ノ在ル所ヲ誨告ス

五 職員及兒童ハ其ノ祝日ニ相當スル唱歌ヲ合唱ス
御影ヲ拜戴セサル小學校ニ於テハ前項第二號ノ式ヲ闘ク

第五章 就學

第十五條 兒童ノ年齡學年開始ノ前日迄ニ滿六歲ニ達セサル者ハ其ノ學年中之ヲ小學校ニ入學セシムルコトヲ得ス

第十六條 兒童ヲ入學セシムトスルトキハ其ノ保護者ヨリ左ノ事項ヲ具シ學校管理者ニ申出ツヘシ

一 兒童並保護者ノ氏名、出生年月日、本籍地、現住所及族類

二 兒童入學前ノ經歷
三 保護者ノ職業及兒童トノ關係

學校管理者ハ前項ノ申出ニ基キ入學スヘキ兒童ヲ決定シ學校長ニ通知スヘシ

第十七條 學校長ハ入學シタル兒童ニ就キ別記第一號書式ニ依リ學籍簿ヲ編製スヘシ

第二十條 小學校教員ニハ小學校教員免許狀ヲ有スル者ヲ採用スヘシ

特別ノ事情アルトキハ免許狀ヲ有セサル者ヲ以テ教員トナスコトヲ得
第二十一條 小學校教員ニハ小學校教員免許狀ヲシテ之ヲ兼ネシムヘシ

第二十二條 學校長及教員ノ採用解職ハ特に規定スルモノノ外學校管理者ノ申請ニ依リ理事實官之ヲ行フ

第二十三條 學校長及教員ノ採用解職ハ特に規定スルモノノ外學校管理者ノ申請ニ依リ理事實官之ヲ行フ

第二十四條 學校長及教員ノ懲戒ハ特に規定スルモノノ外學校管理者ノ申請ニ依リ理事實官之ヲ行フ

第二十五條 小學校ニ於テ授業料ヲ徵收スルトキハ講常小學籍簿ヲ編製スヘシ

第七章 授業料

一九

附錄 韓國法令

學校ニ在リテハ一箇月四十錢以下高等小學校ニ在リテハ
一箇月八十錢以下ニ於テ其ノ金額ヲ定ムヘシ
特別ノ事情アルトキハ當該小學校經費ヲ負擔スヘキ地域
以外ニ住居スル者ノ兒童ニ限リ理事官ノ認可ヲ受ケ前項
ノ制限ヲ超ヘタル授業料ヲ徵收スルコトヲ得

附則

本規則ハ明治四十二年四月一日ヨリ之ヲ施行ス
現在ノ小學校ハ本規則施行日ヨリ一箇月以内ニ第五條ノ
手續ヲ爲スヘシ

現在ノ在外指定學校ハ本規則ニ依リ設立セルモノト看做ス

但シ其ノ學則中本規則ニ抵觸スルモノハ直ニ變更ノ手續ヲ
爲スヘシ

(書式省略)

(六) 韓國法令

帝室債務ニ關スル件

隆熙二年卽明治四十年五月
法律第四十九號

第一條 帝室債務ニ關シテハ開國五百四年法律第二號會計

法第二十九條ノ規定ヲ準用ス

第二條 前條ノ規定ハ本法施行前に生シタル帝室債務ニ關
シテモ亦之ヲ準用ス

第三條 本法施行前に生シタル帝室債務ニ付テハ隆熙二年
九月三十日迄ニ債權者ハ宮内府大臣ニ請求スヘシ但シ其
ノ請求スヘキ期限未タ到來セサルモノニ在リテハ其ノ事
由ヲ申告スヘシ
前項ノ期限内ニ請求又ハ申告ナキトキハ債權ハ其ノ效力
ヲ失フ

本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

附則

第一條 宮内府所管及慶善宮所屬ノ不動產ハ之ヲ國ニ移屬
ス但シ宮殿、太廟ノ基址及本朝ノ陵、園、墓ノ内核字内
ハ此ノ限ニ在ラス

第二條 漁磯、淤稅其ノ他宮内府ニ於テ從來徵收スル諸稅
ハ之ヲ國ニ移屬ス

第三條 帝室債務ノ整理ニ關スル事務ハ度支部大臣之ヲ掌
理ス

附則

產ノ移屬及帝室債務ノ整理
ニ關スル件

隆熙二年卽明治四十九號
勅令第三十九號

本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

地稅ニ關スル件

隆熙二年卽明治四十年六月
法律第四十一年號

第一條 地稅ハ結價ニ依リ土地所有者ヨリ之ヲ徵收ス但シ
地方ノ習慣又ハ契約ニ依リ小作人其ノ他土地使用者ニ於
テ納稅スヘキ場合ニ在リテハ先ツ其ノ使用者ヨリ徵收シ
其ノ使用者滯納ノ場合ニ在リテハ土地所有者ヨリ之ヲ徵
收ス

第二條 地稅ハ結價ハ新貨幣ニ換算低減シ全國ノ通シテ別
表ノ如ク之ヲ定ム

第三條 未定價及未定數ノ地稅ニ在リテハ從來元ヲ以テ定
メタルモノハ一元ニ付金五十錢、兩ソ以テ定メタルモノ
ハ一兩ニ付金十錢ノ比例ニ換算シテ之ヲ徵收ス但シ錢位
未滿ノ端數ヲ生シタルトキハ之ヲ切捨ツルモノトス

附則

本令ハ隆熙二年戊申條地稅ヨリ之ヲ施行ス

(別表)

舊結價

八〇〇〇

六・六〇〇

一三・三三四

一〇・六六六

五・三〇〇

九・〇六六	八・八九〇〇	八・五三四	八・〇〇〇	七・四六六	七・一〇〇	六・四〇〇	三・七〇〇	四・〇〇〇	四・二〇〇
三・七三三	三・六六六	三・二二〇	二・一四四	二・〇八〇	二・〇八〇	一・八六六	一・一三四	一・〇〇〇	一・三〇〇
一・三三四	一・二二〇	一・一三四	一・一三三						
五三四	五三四	五三四	五三四	五三四	五三四	五三四	五三四	五三四	五三四
	二〇〇								

紅蓼專賣法

隆熙二年卽明治四十年七月
法律第十四號

第一條 紅蓼ノ製造ハ政府ニ專屬ス
第二條 紅蓼ハ政府又ハ政府ノ命ヲ受ケタル者ニ非サレハ
之ヲ販賣シ又ハ輸出スルコトヲ得ス

第三條 人蔘ハ政府ノ免許ヲ得タル者ニ非サレハ之ヲ耕作

附錄 韓國法令

附錄 韓國法令

スルコトヲ得ス

第四條 紅蓼製造ノ原料タルヘキ水蓼ハ政府之ヲ收納ス

第五條 政府ハ紅蓼製造ノ原料ニ充ツヘキ人蓼ノ特別耕作

區域ヲ指定スルコトヲ得

第六條 人蓼耕作者ハ毎年左ノ事項ニ付政府ニ申請シテ許

可フ受クヘシ之ヲ變更シ又ハ耕作ヲ廢止セムトスルトキ

亦同シ

一 蓼圃ノ位置、間數

二 成苗ヲ定植スヘキ蓼圃ノ位置、間數及成苗ノ根數

三 收穫スヘキ蓼圃ノ位置、間數及人蓼ノ根數

第七條 相續ニ因ルノ外人蓼ノ耕作ヲ承繼セムトスル者ハ

政府ノ免許ヲ受クヘシ

相續ニ因リ人蓼ノ耕作ヲ承繼シタル者ハ政府ニ申告スヘシ

第八條 政府ハ收穫前ニ水蓼ノ收穫量目及根數ヲ査定ス

人蓼耕作者ハ政府ノ許可ヲ受クルニ非サレハ前條

ノ査定前ニ人蓼ヲ收穫スルコトヲ得ス

第十條 人蓼耕作者ノ收穫シタル水蓼ハ總テ之ヲ政府ニ納

付スヘシ納付ノ期日及場所ハ政府之ヲ定ム

前項ニ依リ人蓼耕作者ノ納付シタル水蓼ニシテ政府ノ收

納ニ適セサルモノハ紅蓼ヲ製造スヘカラサル措置ヲ施シ

之ヲ元納付者ニ還附ス

第十一條 政府ハ其ノ收納シタル水蓼ニ對シ賠償金ヲ交付

二二

賭債價格ハ政府之ヲ定メ豫メ之ヲ公示ス

第十二條 人蓼耕作者正當ノ事由ナクシテ政府ノ査定シタル量目又ハ根數以上ノ水蓼ヲ納付セサルトキハ政府ハ其ノ不足額ニ對シ第十三條第二項ノ規定ニ準シ算定シタル金額ノ八倍ヲ納付セシムルコトヲ得

第十三條 人蓼耕作者私ニ耕作間數ヲ減少シ又ハ耕作ヲ廢止シタルトキハ政府ハ其ノ減作地又ハ廢作地ニ生産スヘキ水蓼ノ價格ニ相當スル金額ヲ納付セシムルコトヲ得

前項水蓼ノ價格ハ其ノ年ニ於ケル近傍類似蓼圃ノ水蓼收納額及之ニ對スル賭債金額ヲ標準トシテ之ヲ算定ス

第十四條 第六條及第八條乃至第十三條ノ規定ハ特別耕作地域内ニテ人蓼ヲ耕作スル者ニ限り之ヲ適用ス

第十五條 人蓼耕作者本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令ニ違反シタルトキハ政府ハ耕作ノ免許ヲ取消スコトヲ得

第十六條 政府ハ蓼圃、乾燥場、貯藏場其ノ他必要ト認ムル場所ニ立入り物件ヲ検査シ又ハ監督上必要ナル處置ヲ行フコトヲ得

第十七條 左ノ各號ノ一ニ該當スル者ハ十園以上五百園以下ノ罰金ニ處シ其ノ犯罪ニ係ル現品ハ之ヲ沒收ス

一 第二條ニ違背シ紅蓼ヲ販賣シ又ハ輸出シタル者

二 第三條ニ違背シ免許ヲ受ケシテ人蓼ヲ耕作シタル者

三 第六條、第七條及第九條ニ違背シタル者

第二十三條 犯人前條ノ通告ヲ履行シタルトキハ同一事件ニ對シ訴訟ヲ受クルコトナシ

第二十四條 人蓼耕作者ハ其ノ代理人、家族、同居者、雇人其ノ他ノ從業者ニシテ其ノ業務ニ關シ本法又ハ本法ニ基キ發スル命令ニ違反シタルトキハ自己ノ指揮ニ出テサルノ故ヲ以テ處罰ヲ免カルコトヲ得ス第二條ノ規定ニ違反シ紅蓼ヲ販賣シ又ハ輸出スル者ニ對シテモ亦同シ

第二十五條 本法施行ノ爲必要ナル細則ハ度支部大臣之ヲ定ム

第二十六條 本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

本法施行ノ際人蓼ヲ耕作スル者ハ本法施行ノ日ヨリ三箇月内ニ政府ニ申告スヘシ
第一條 市街地ニ在ル家屋ヲ所有スル者ニハ本法ニ依リ家屋税ヲ課ス
本法施行地域ニハ戸税ヲ課セス
第一項市街地ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

第二條 本法ニ於テ家屋ト稱スルハ永久使用ノ目的ヲ以テ
第二十二條 當該官吏本法ノ犯罪ヲ調査シ其ノ心證ヲ得タルトキハ犯人ニ對シ罰金追徴ニ相當スル金額沒收ニ該當スル物品及書類送達其ノ他附帶ノ費用ヲ指定ノ場所ニ納付スヘキ旨ノ通告ヲスコトヲ得
第二十一條 當該官吏ノ尋問ニ對シ虛偽ノ答辯ヲ爲シ又ハ其ノ職務ノ執行ヲ妨害シタル者ハ十園以上百園以下ノ罰金ニ處ス

第二十條 本法ノ犯罪ニ係ル現品ヲ他ニ譲渡シ若ハ消費シタルトキ又ハ其ノ現品ニシテ他ニ所有者アル爲没收スルコトヲ得サルトキハ其ノ價格ニ相當スル金額ヲ追徴ス

前項ノ通告ニハ期間ヲ指定シ該期間ニ履行セサルトキハ告發スヘキ旨ヲ記載スヘシ

家屋稅法

隆熙三年即明治四十二年二月
法律 第二號

第一條 市街地ニ在ル家屋ヲ所有スル者ニハ本法ニ依リ家屋稅ヲ課ス
本法施行地域ニハ戸稅ヲ課セス
第一項市街地ハ勅令ヲ以テ之ヲ指定ス

附錄 韓國法令

二四

第三條 家屋稅ハ一構毎ニ左ノ等級、課稅標準及稅率ニ依リ毎年之ヲ賦課ス

等級 課稅標準及稅率

一等 三十間以上 甲種金八圓
乙種金五圓

二等 十間以上 甲種金二圓
乙種金一圓三十錢

三等 四間以上 甲種金四十錢
乙種金八十錢

四等 四間未満 甲種金四十錢
乙種金三十錢

甲種トハ石造、煉瓦造又ハ瓦葺ノ家屋ヲ謂ヒ乙種トハ甲種ニ屬セサル家屋ヲ謂フ

屑上ノ間數ハ二間タ一間トシ計算ス

間ヲ以テ計算シ難キ構造ノ家屋ハ方六尺ノ一間トシ計算ス

一間未滿ノ端數ハ之ヲ切捨ツ

第四條 左ニ掲タル家屋ニハ家屋稅ヲ課セス

一 帝室有家屋

二 官有家屋

三 道、郡、面、村、里、洞其ノ他公共團體ニ於テ公用

又ハ公共ノ用ニ供スル家屋但シ家貸ヲ收ムル家屋ハ此

ノ限ニ在ラス

四 收利ヲ目的トセス直接祭祀、宗教、慈善、教育又ハ

學藝ノ用ニ供スル家屋

第五條 家屋稅ハ毎年四月現在家屋ニ依リ之ヲ賦課ス

第六條 家屋稅ハ左ノ二期ニ分納スヘシ
第一期 五月三十一日限 稅額二分ノ一
第二期 十一月三十日限 稅額二分ノ一

第七條 左ノ場合ニ在リテハ家屋稅ヲ減免スルコトヲ得但シ既納ノ稅金ハ之ヲ還付セス

一 極貧ニシテ納稅ノ資力ナシト認メタルトキ

二 家屋ノ全部又ハ一部滅失シタルトキ

三 家屋ノ構造若ハ間數ヲ變更シ又ハ家屋ヲ新築、滅失シ若ハ讓受ケタルトキハ其ノ旨ヲ家屋所在地ヲ管轄スル財務署ニ申告スヘシ

四 財務官吏ノ職務執行ヲ拒ミ若ハ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ其ノ脫稅金ヲ一時ニ徵收ス

五 前條ノ申告ヲ爲シ又ハ虛偽ノ申告ヲ爲シタル者ハ二間以上

六 市街地ニ在リテ每年之ヲ納付スヘシ

七 市街地ニ在リテ每年之ヲ納付スヘシ

第八條 財務官吏ハ家屋稅ノ調査上必要アルトキハ納稅義務者ト認ムル者ニ對シ訊問ヲ爲シ又ハ家屋内ニ臨檢スルコトヲ得

第九條 家屋ノ構造若ハ間數ヲ變更シ又ハ家屋ヲ新築、滅失シ若ハ讓受ケタルトキハ其ノ旨ヲ家屋所在地ヲ管轄スル財務署ニ申告スヘシ

第十條 前條ノ申告ヲ爲ス、虛偽ノ申告若ハ答辯ヲ爲シ又ハ財務官吏ノ職務執行ヲ拒ミ若ハ之ニ支障ヲ加ヘタル者ハ其ノ脫稅金ヲ一時ニ徵收ス

十一 附則

本法ハ隆熙三年分ヨリ之ヲ施行ス
市街地ニ在リテ每年之ヲ納付スヘシ

別ニ從ヒ毎年之ヲ納付スヘシ

第一類 蘭成酒

五十石迄

金一圓

十石迄

金二圓

二十石迄

金四圓

五十石迄

金十圓

百石迄

金二十圓

百石ヲ超過スルモノハ五十石迄ヲ増ス每ニ金十圓ヲ加

フ

第二類 蒸餾酒

二石迄

金一圓

二石迄

金二圓

五石迄

金五圓

十石迄

金十圓

二十石迄

金二十圓

五十石ヲ超過スルモノハ三十石迄ヲ增ス每ニ金三十圓ヲ加

フ

第三類 混成酒

二石迄

金六圓

五石迄

金十五圓

十石迄

金三十圓

二五

第一類 蘭成酒	第二類 蒸餾酒	第三類 混成酒
五十石迄	金一圓	醸成酒又ハ蒸餾酒ニ他物ヲ混和製成シタル酒類其ノ他醸成酒又ハ蒸餾酒ニ非サル酒精含有飲料
一百石迄	金二圓	第三條 酒類ヲ製造セムトスル者ハ製造場一箇所毎ニ政府ノ免許ヲ受クヘシ其ノ製造ヲ廢止セムトスルトキハ免許ノ取消ヲ求ムヘシ
五百石迄	金五圓	前項ニ依リ免許ヲ與ヘタル者ニハ證票ヲ交付スヘシ
一千石迄	金十圓	第四條 酒類製造者ハ製造場見易ギ所ニ常ニ證票ヲ掲ケ置クヘシ
二千石迄	金二十圓	第五條 酒類製造者ハ毎年十一月末日迄ニ翌年ニ製造スヘキ酒類及造石數ヲ定メ製造場ヲ管轄スル財務署ニ申告スヘシ

附錄 韓國法令

二六

二十石迄 金六十圓
五十石迄 金百五十圓
五十石ヲ超過スルモノハ三十石迄ヲ増ス毎ニ金九十圓

第七條 酒稅ノ納期ヲ左ノ二期トス
第一期 五月 稅額二分ノ一
第二期 十一月 稅額三分ノ一

第八條 證票ヲ受クル者ハ證票料金十錢ヲ納付スヘシ
證票ノ再交付ヲ受クルトキ亦同シ

第九條 財務官吏ハ酒類製造者又ハ酒類販賣者ノ所持ニ係
ル酒類、其ノ製造出入ニ關スル一切ノ帳簿書類及酒類製
造又ハ販賣上必要ナル建築物、材料、器械其ノ他ノ物件
ヲ検査シ、訊問ヲ爲シ又ハ逋稅ノ虞アリト認メタルトキ
ハ監督上必要ノ處分ヲ爲スコトヲ得

第十條 第三條ノ免許ヲ受ケヌシテ酒類ヲ製造シタル者ハ
二圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十一條 酒類製造者カ其ノ製造石數ヲ詐ハリ其ノ他不正
ノ行爲ヲ以テ脱稅シ若ハ脱稅セハトシタルトキハ其ノ金
額ノ二倍ニ相當スル罰金ニ處ス

第十二條 前二條ニ該當スル者ニ對シテハ脱稅ニ係ル稅金
ハ納期ニ拘ラス即時徵收スルコトヲ得

第十三條 酒類製造者財務官吏ノ職務執行ヲ拒ミ又ハ忌避
スルカ若ハ之ニ支障ヲ加ヘタルトキハ二圓以上二十圓以
下ノ罰金ニ處ス

下ノ罰金ニ處ス但シ其ノ刑法大全ニ正條アルモノハ該規
定ニ依ル

附則

本法ハ隆熙三年分ヨリ之ヲ施行ス
本法施行前ヨリ繼續シテ酒類ヲ製造スル者ハ本法公布ノ日
ヨリ九十日以内ニ本法ニ依リ免許ヲ受クヘシ

煙草稅法 法律 第四號
本法公布ノ日ヨリ九十日以内ニ本法ニ依リ免許ヲ受クヘシ

第一條 煙草耕作者又ハ煙草販賣業者ハ政府ノ免許ヲ受ク
其ノ耕作又ハ販賣業ヲ廢止セムトスルトキハ免許ノ取消
ヲ求ムヘシ

第二條 煙草稅ヲ分チ煙草耕作稅及煙草販賣稅ノ二種トス
第三條 煙草耕作稅ハ左ノ種別ニ從ヒ煙草耕作者ヨリ之ヲ
徵收ス

第一種耕作(植付根數九百以下ノモノ)一箇年金五十錢
第二種耕作(植付根數九百ヲ超過スルモノ)一箇年金二圓

第四條 煙草販賣稅ハ左ノ種別ニ從ヒ煙草販賣業者ヨリ之
ヲ徵收ス

第一種販賣(卸賣スル者)一箇年金十圓
第二種販賣(小賣スル者)一箇年金二圓

シ
ハ本法公布ノ日ヨリ九十日以内ニ本法ニ依リ免許ヲ受クヘ
シ
第五條 煙草稅ハ每年左ノ納期ニ徵收ス
一、煙草耕作稅 十一月
一、煙草販賣稅 一月

第六條 證票ヲ受クル者ハ證票料金十錢ヲ納付スヘシ
證票ノ再交付ヲ受クルトキ亦同シ

第七條 證票ハ店前其ノ他見易キ所ニ常ニ掲ヶ置クヘシ
第八條 財務官吏ハ煙草耕作地又ハ煙草販賣業者ノ店舗ニ
入り訊問又ハ検査ヲ爲スコトヲ得

第九條 免許ヲ受ケヌシテ煙草ヲ耕作シ又ハ煙草ノ販賣ヲ
爲シタル者ハ一圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス

第十條 煙草耕作者又ハ煙草販賣業者第三條又ハ第四條ノ
種別ヲ詐ハリ其ノ他不正ノ行爲ヲ以テ脱稅シ若ハ脱稅セ
ムトシタルトキハ其ノ金額ノ二倍ニ相當スル罰金ニ處ス

第十一條 前二條ニ該當スル者ニ對シテハ脱稅ニ係ル稅金
ハ納期ニ拘ラス即時徵收スルコトヲ得

第十二條 煙草耕作者又ハ煙草販賣業者財務官吏ノ職務執
行ヲ拒ミ又ハ之ニ支障ヲ加ヘタルトキハ二圓以上二十圓
規定ニ依ル

附則
本法ハ隆熙三年分ヨリ之ヲ施行ス但シ隆熙三年分煙草販賣
稅ハ免許ノ際之ヲ徵收ス
本法施行前ヨリ繼續シテ煙草ヲ耕作シ又ハ販賣業ヲ營ム者

附則
本法ハ隆熙三年分ヨリ之ヲ施行ス但シ隆熙三年分煙草販賣
稅ハ免許ノ際之ヲ徵收ス
本法施行前ヨリ繼續シテ煙草ヲ耕作シ又ハ販賣業ヲ營ム者

附則
本法ハ隆熙三年分ヨリ之ヲ施行ス但シ隆熙三年分煙草販賣
稅ハ免許ノ際之ヲ徵收ス
本法施行前ヨリ繼續シテ煙草ヲ耕作シ又ハ販賣業ヲ營ム者

第一條 森林ハ其ノ所有者ニ依リ之ヲ分チテ帝室林、國有
林、公有林及私有林トス
山野ハ森林ニ準シテ本法ヲ適用ス
第二條 國有森林山野ノ賣却、讓與、交換又ハ貸付及國有
森林產物ノ賣却ニ關スル規定ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

附錄 韓國法令

二七

附錄 韓國法令

二八

- 國土保安又ハ國有林野ノ經營上國有保存ノ必要アル森林
山野ハ之ヲ賣却、讓與、交換又ハ貸付スルコトヲ得ス
第三條 農商工部大臣ハ造林者ト其ノ收益ヲ分收スルノ條件ヲ以テ國有森林山野ニ部分林ヲ設定スルコトヲ得
第四條 部分林ノ樹木ハ國ト造林者トノ共有トシ其ノ持分
ハ收益分收ノ部分ニ均シキモノトス
部分林設定前ヨリ生存スル樹木ハ國ノ所有トス
第五條 農商工部大臣ハ左ニ記載スル箇所ヲ保安林ニ編入
スルコトヲ得
一 土地壊崩流出ノ防備ニ必要ナル箇所
二 飛砂ノ防備ニ必要ナル箇所
三 水害、風害、潮害ノ防備ニ必要ナル箇所
四 頽雪、墜石ノ危險ヲ防止スルニ必要ナル箇所
五 水源ノ涵養ニ必要ナル箇所
六 魚附ニ必要ナル箇所
七 航行ノ目標ニ必要ナル箇所
八 公衆ノ衛生ニ必要ナル箇所
九 墓、廟、社、殿、宮、陵、園又ハ名所或ハ舊跡風致
ニ必要ナル箇所
第六條 保安林ハ皆伐シ又ハ開墾スルコトヲ得ス
第七條 農商工部大臣ハ保安林ノ伐木ヲ禁止シ又ハ制限スルコトヲ得
第八條 保安林ニ編入セラレタル爲損害ヲ蒙リタル森林所

- 第十一條 森林ニ害蟲發生シ又ハ發生ノ虞アルトキハ其ノ
森林所有者ハ直ニ之ヲ驅除豫防スヘシ
前項ノ場合ニ於テ農商工部大臣ハ害蟲ノ驅除又ハ豫防ノ
爲必要ナル處置ヲ該森林所有者ニ命令スルコトヲ得
所有者前項ノ命令ニ從ハサルトキハ農商工部大臣之ヲ行
ヒ其ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得
第十二條 農商工部大臣ノ許可ナクシテ森林山野ヲ開墾ス
ルコトヲ得ス
第十三條 所有者ノ許諾ヲ受クルニ非サレハ森林山野ニ墳
定ヲ適用ス
- 第十一條 森林ニ害蟲發生シ又ハ發生ノ虞アルトキハ其ノ
森林所有者ハ直ニ之ヲ驅除豫防スヘシ
前項ノ場合ニ於テ農商工部大臣ハ害蟲ノ驅除又ハ豫防ノ
爲必要ナル處置ヲ該森林所有者ニ命令スルコトヲ得
所有者前項ノ命令ニ從ハサルトキハ農商工部大臣之ヲ行
ヒ其ノ費用ヲ徵收スルコトヲ得
第十二條 農商工部大臣ノ許可ナクシテ森林山野ヲ開墾ス
ルコトヲ得ス
第十三條 所有者ノ許諾ヲ受クルニ非サレハ森林山野ニ墳
定ヲ適用ス
- 前項ノ期日内ニ請願セサルトキハ植樹ノ許可ハ其ノ效力
ヲ失フ
- 第二十一條 森林法發布以前ニ於テ國有森林山野ノ伐木若
ハ森林山野賣下ノ許可ヲ受ケ其ノ效力ノ尙存續スルモノ
ハ本法施行ノ日ヨリ一箇年以内ニ農商工部大臣ニ請願シ
テ認證ヲ受クヘシ
前項ノ期日内ニ出願セサルトキハ伐木又ハ貨下ノ許可ハ
其ノ效力ヲ失フ
- 第二十二條 本法ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス

- 墓ヲ設クルコトヲ得ス
第十四條 地方官又ハ警察官吏ノ許可ヲ受クルニ非サレハ
森林山野ニ火入ヲ爲スコトヲ得ス
第十五條 森林ニ於テ其ノ主副產物ヲ窃取シタル者ハ刑法
第六百二條及第六百三條ニ準シ處罰ス
第十六條 他人ノ森林山野ヲ開墾シ又ハ之ニ放火シタル者
ハ刑法第六百六十九條但書ニ準シ處罰ス
第十七條 他人ノ所有ニ屬スル森林ノ樹木ヲ傷害シタル者
森林ノ爲設ケタル標識ヲ移轉シ又ハ毀壞シタル者及第六
條第十二條乃至第十四條ノ規定又ハ第七條ノ命令ニ違背
シタル者ハ禁歎又ハ一圓以上二百圓以下ノ罰金ニ處ス
第十八條 本法ヲ施行スルニ必要ナル命令ハ農商工部大臣
之ヲ定ム
- 附 則
- 第十九條 森林山野ノ所有者ハ本法施行ノ日ヨリ三年以内
ニ森林山野ノ地籍及面積ノ見取圖ヲ添付シ農商工部大
臣ニ届出ツヘシ期限内ニ届出ナキモノハ總テ國有ト看做
ス
- 第二十條 森林法發布以前ニ於テ國有森林山野ニ植樹ノ許
可ヲ受ケ其ノ效力尙存續スルモノハ本法施行ノ日ヨリ一
箇年以内ニ部分林ノ設定ヲ農商工部大臣ニ請願シ認證ヲ
受ケタルトキハ第四條ノ規定ニ依リ部分林ヲ設定シタル
モノト看做ス

附 錄 韓國法令

二九

- 國有土石採取規則
- 第一條 國有ノ森林、山野其ノ他ノ土地ニ於ケル寶石類、
雲母、矽礦、石材、泥炭、粘土等ノ土石採取ノ許可ヲ受
ケムトスル者ハ農商工部大臣ニ出願スヘシ
- 第二條 前條ノ出願ヲ爲サムトスル者ハ左ノ事項ヲ記載セ
ル願書ニ採取地ノ圖面ヲ添附シ地方長官ヲ經由シテ差出
スヘシ
- 一 採取地ノ位置及面積
- 二 採取セムトスル土石ノ種類
- 三 採取セムトスル土石ノ見積量及其ノ採取料見込額
- 四 採取期間
- 五 採取方法ノ概要

附錄 韓國法令

三〇

- 六 採取地及其ノ附近ノ狀況
圖面ニハ前項第一號及第六號ノ事項及採取地ノ區域ヲ明示スヘシ
第三條 左ニ掲タル場所ニ於テハ土石採取ヲ爲シ又ハ土石採取業ノ爲之ヲ使用スルコトヲ得ス但シ農商工部大臣ハ危害ナク又景致ヲ損傷セサルモノト認ムル場合ニハ第三號及第四號ノ箇所ニ對シ特ニ土石ノ採取許可ヲ爲スコトヲ得
一 皇城及離宮ノ周圍三百間以内
一 皇陵、園、墓、墳ノ火葬場以内
一 陸海軍所轄ノ城堡、要港、火藥庫、彈藥庫及官廳、歷代殿陵ノ周圍三百間以内
一 鐵道、軌道、道路、運河、河湖、沼池、堤塘、莊寺境內地、公園地、墳墓及建物ノ周圍五十間以内
第四條 土石採取ノ許可ヲ受ケタル者ハ土石採取料ヲ納付スヘシ
第五條 農商工部大臣ハ公用又ハ公益事業ノ爲要スル土石採取料ノ金額ハ農商工部大臣之ヲ定ム
ノ採取ニ付テハ採取料ヲ免除スルコトヲ得
第六條 土石採取權ハ相續、讓渡及抵當ノ目的ト爲スコトヲ得
一 土石採取權ノ讓渡又ハ抵當ハ農商工部ニ申請シ登録ヲ受クルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス

- 第七條 土石採取權者ハ其ノ作業ノ爲生スヘキ危險ニ對シ豫防ヲ爲スヘシ
農商工部大臣ハ前項ノ危險豫防ノ爲必要ナル事項ヲ命令スルコトヲ得
第八條 左ノ場合ニ於テハ農商工部大臣ハ土石採取權ヲ取消スコトヲ得
一 錯誤ニ因リ許可ヲ與ヘタルコトヲ發見シタルトキ
二 正當ナル事由ナクシテ一箇年以上休業シ又ハ許可ヲ受ケタル日ヨリ一箇年以内ニ事業ニ著手セサルトキ
三 採取料ヲ指定ノ期間内ニ納付セナルトキ
四 前條第二項ノ命令ヲ遵守セサルトキ
五 許可ノ條件ニ違背シタルトキ
六 作業カ公益ヲ害スト認ムルトキ
農商工部大臣前項ノ規定ニ依リ土石採取權ヲ取消シタルトキハ既納ノ採取料ノ全部又ハ一部ヲ還付スルコトヲ得農商工部大臣ハ第一項第三號ノ事由ニ因リ土石採取權ヲ納入ヲ命シ又ハ其ノ價格ヲ追徵スルコトヲ得
第九條 農商工部大臣ハ本令ニ基ク權限ノ一部ヲ地方長官ニ委任スルコトヲ得
附則
本令ハ發布ノ日ヨリ之ヲ施行ス
本令施行前ニ土石採取ノ許可ヲ得タル者ハ本令施行ノ日ヨリ此算入セス
第四條 同一ノ漁場ニ於テハ同一漁期ニ於テ同一種類ノ漁業ヲ免許セス但シ第二條第一項第三號及第四號ノ漁業ハハ漁業者ノ請願ニ依リ農商工部大臣ハ漁業免許ヲ與ヘ之ヲ保護スルコトヲ得
第三條 漁業ノ免許期間ハ十箇年以内トス但シ農商工部大臣ハ漁業權者ノ申請ニ依リ期間ヲ更新スルコトヲ得
第六條 ニ依リ漁業權ノ停止ヲ命シタル期間ハ前項ノ期間ニ算入セス
第五條 漁業權ハ相續、讓渡、共有、擔保及貸付ノ目的ト爲スコトヲ得但シ農商工部ノ登録ヲ受クルニ非サレハ其ノ效力ヲ生セス
第六條 農商工部大臣ハ水產動植物ノ繁殖其ノ他公益上必
要アリト認ムルトキハ漁業權ヲ制限シ又ハ停止ヲ命シ又ハ之ニ條件ヲ附スルコトヲ得
第七條 左ノ場合ニ於テハ農商工部大臣ハ漁業權ヲ取消スコトヲ得
一 正當ノ理由ナクシテ漁業ノ免許ヲ受ケタル日ヨリ一箇年内ニ著手セス又ハ連續シテ二箇年以上休業シタ
ルトキ
二 本法又ハ本法ニ基キテ發スル命令又ハ處分ニ違背シ

リ五箇月以内ニ地方長官ヲ經由シ農商工部大臣ノ認證ヲ申請スヘシ其ノ認證ヲ受ケタルトキハ本令ニ依リ許可ヲ受ケタルモノト看做ス但シ國有森林山野及產物處分規則ニ依リ賣下ノ許可ヲ得タル者及本令施行前ニ漁業權ノ特許ト共ニ土石採取ノ特許ヲ得タル外國人ハ認證ヲ要セス本令ニ依リ許可シタルモノト看做ス

漁業法

（隆熙二年即明治四十二年十一月
法律 第二十九號）

- 第一條 本法ニ於テ漁業ト稱スルハ營利ノ目的ヲ以テ水產動植物ノ採捕又ハ養殖ヲ業トスル謂ヒ漁業權ト稱スルハ第二條ニ依リ免許ヲ受ケ漁業ヲ爲スノ權利ヲ謂フ
第二條 左ノ種類ノ漁業ヲ爲サムトスルモノハ農商工部大臣ノ免許ヲ受クヘシ
一 定ノ水面ニ漁具ヲ建設又ハ敷設シ一定ノ漁期間定置シテ爲ス漁業（第一種免許漁業）
二 一定ノ區域内ニ於テ捕具、探摸又ハ養殖ヲ爲ス漁業（第二種免許漁業）
三 陸地又ハ巖礁等ニ地點ヲ一定シ漁網ヲ曳揚ケ又ハ曳寄スル場所トシ一定ノ漁期間縛返シ使用スル漁業（第三種免許漁業）
四 一定ノ水面ヲ漁網ノ建設又ハ敷設ノ場所トシ一定ノ漁期間縛返シ使用スル漁業（第四種免許漁業）

附錄 韓國法令

三一

附錄 韓國法令

三二

タルトキ

前條ノ事由アルトキ

漁業権ノ制限又ハ條件ニ違背シタルトキ

法定又ハ指定ノ期間内ニ漁業税又ハ罰金ヲ納入セサルトキ

漁業権ノ貸付ヲ受ケタル者ノ所爲ハ漁業権者ノ所爲ト看做シ前項ノ規定ヲ適用ス

漁業者間ニ争論アルトキハ利害關係者ノ申請ニ依リ農商工部大臣之ヲ裁決ス

第九條 左ノ種類ノ漁業ハ農商工部大臣ノ許可ヲ受クルニ非サレハ之ヲ爲スコトヲ得ス

一 陸地又ハ巖礁等ニ漁網ヲ曳揚ケ又ハ曳寄スル漁業ニシテ第二條第一項第三號ノ漁業ニ屬セナルモノ

二 風力、浪力又ハ潮流ニ依リ漁網ヲ水中ニ引曳スル漁業

三 人力ニ依リ又ハ機力ヲ應用シ漁網ヲ以テ魚類ヲ圍繞シ漁船ニ經揚クル漁業

四 潜水機械ヲ使用スル漁業

五 第二條第二項ノ漁業ニシテ免許ヲ受ケサルモノ

第十條 第二條第一項及前條ニ規定シタル漁業以外ノ漁業ヲ爲サムトスル者ハ郡守又ハ府尹ニ申告シテ鑑札ヲ受クヘシ但シ漁業ヲ爲サムトスル者カ日本ナルトキハ日本理事官ニ申告シテ鑑札ヲ受クヘシ

附則

第十一條 農商工部大臣ハ水産動植物ノ蕃殖保護又ハ漁業ノ取締ニ關シ必要ナル命令ヲ發スルコトヲ得

第十二條 漁業権ニ依ラスシテ第二條第一項ニ規定シタル漁業ヲ爲シ又ハ第九條第十條ノ規定ニ違背シタル者ハ百圓以下ノ罰金ニ處シ探捕物又ハ所有漁具ハ何人ノ所屬ヲ問ハス之ヲ沒收ス既ニ探捕物ヲ譲渡シ又ハ消費シタルトキハ其ノ代價ヲ追徴ス

漁業権ノ停止中又ハ免許若ハ許可ノ條件ニ違背シテ漁業ヲ爲シタル者ハ罰前項ニ同シ

第十三條 使用人及漁夫其ノ他從事者ノ所爲ハ漁業者ノ所爲ト看做シ前條ノ罰則ハ之ヲ漁業者ニ適用ス

第十四條 本法施行ニ必要ナル細則ハ農商工部大臣之ヲ定ム

第十五條 本法ノ施行期日ハ勅令ヲ以テ之ヲ定ム

第十六條 如何ナル名義タルヲ問ハス本法施行前ニ受ケタル漁業ノ免許又ハ從來ノ慣行ニ因リ第二條第一項ニ規定シタル漁業ヲ爲ス者ハ本法施行ノ日ヨリ一箇年内ニ第二條ノ規定ニ依リ免許ヲ請願スベシ

本法施行前ニ漁業鑑札ノ下附ヲ受ケタル者ハ本法施行後ト雖其ノ鑑札ノ有效期間内ハ第九條又ハ第十條ニ規定シタル漁業ヲ爲スコトヲ得

前項ニ規定シタル者ニ非ラスシテ第九條又ハ第十條ニ規

定シタル漁業ヲ爲ス者ハ本法施行ノ日ヨリ三箇月内ニ第九條又ハ第十條ノ規定ニ依リ漁業ノ許可ヲ請願又ハ申告スヘシ第一項又ハ第三項ノ漁業者ハ請願許否ノ處分ヲ受クル迄又ハ申告ニ依リ漁業鑑札ノ下附ヲ受クル迄從前ノ例ニ依リ漁業ヲ爲スコトヲ得

私立學校令

勅令二年(明治四十二年八月
第六十ニ號)

ハ履歴書ヲ添附スヘシ
私立學校ノ開校及廢止ハ設立者ニ於テ學部大臣ニ報告スヘシ
第三條 前條ノ學則ニハ左ノ事項ヲ規定スヘシ
第一修業年限及學年ニ關スル事項
二 學科目及其ノ程度並毎週教授時數ニ關スル事項
三 學員若ハ學徒ノ定員
四 入學者ノ資格其ノ他入學退學ニ關スル事項
五 授業料及入學料等ニ關スル事項
六 其ノ他學校ニ於テ必要ト認ムル事項

第四條 私立學校ハ其ノ名稱ノ上ニ私立ノ二字ヲ冠スヘシ
第五條 私立學校ニハ學校長ヲ置クヘシ
學校長ハ學校ヲ代表シ校務ヲ掌理ス
第六條 私立學校ニ於テ用ギ爾教科用圖書ハ學部ノ編纂シタルモノ又ハ學部大臣ノ檢定ヲ經タルモノノ中ヨリ之ヲ擇フヘシ
第七條 私立學校ニハ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
ムトスルトキハ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
第八條 左ノ各號ノ一二該當スル者ハ私立學校ノ設立者、學校長又ハ教員タルコトヲ得ス

前項第四號ヲ除クノ外各號ノ事項ニ異動ヲ生シタルトキハ學部大臣ニ報告スヘシ但シ承繼者又ハ新任者ノ報告ニハ學部大臣ニ報告スヘシ但シ承繼者又ハ新任者ノ報告ニ

附錄 韓國法令

三三

附錄 韓國法令

三四

- 一 禁獄以上ノ刑ニ處セラレタル者但シ特赦復權シタル者ハ此ノ限ニ在ラス
- 二 懲戒處分ニ依リ免官ニ處セラレ二箇年ヲ經ナル者但シ懲戒ヲ免セラレタル者ハ此ノ限ニ在ラス
- 三 教員許狀還收ノ處分ヲ受ケ二箇年ヲ經ナル者
- 四 性行不良ト認ムヘキ者
- 第五條 私立學校ノ設備、授業及其ノ他ノ事項ニシテ不適當ナリト認ムルトキハ學部大臣ハ之カ變更ヲ命スルコトヲ得
- 第十條 左ノ場合ニハ學部大臣ハ私立學校ノ閉鎖ヲ命スルコトヲ得
- 一 法令ノ規程ニ違反シタルトキ
- 二 安寧秩序ヲ紊亂シ又ハ風俗ヲ壊亂スル虞アルトキ
- 三 六箇月以上規定ノ授業ヲ爲ササバトキ
- 四 第九條ニ依リ學部大臣ノ與ヘタル命令ニ違反シタルトキ
- 第十一條 設立認可ヲ受ケシテ學校ノ事業ヲ爲ス者ニ對シテハ學部大臣ハ其ノ事業ノ禁止ヲ命スヘシ
- 第十二條 私立學校長ハ毎年五月末日現在ニ依リ職員姓名、擔當學科目、學年別學員學徒在籍者數及出席者數、教科用圖書名及會計ノ狀況ニ關スル報告書ヲ調製シ翌月中ニ學部大臣ニ報告スヘシ
- 第十三條 地方官ハ學部大臣ノ指揮ヲ承ケ其ノ所管内ノ私

立學校ヲ監督ス

第十四條 本令ニ依リ學部大臣ニ提出スル文書ハ所轄地方官ヲ經由スヘシ

第十五條 本令ハ書堂ニ之ヲ適用セス

第十六條 本令ハ隆熙二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス
第十七條 既設ノ私立學校ハ其ノ設立認可ヲ受ケタルト否ヲ問ハス總テ本令施行ノ日ヨリ六箇月以内ニ本令ノ規定ニ準シ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

學會令 隆熙二年即明治四十二年八月
勅令第十六號
第一條 本令ニ學會ト稱スルハ名稱ノ如何ヲ問ハス教育學藝ノ普及發達ヲ圖ルヲ目的トスル團體ヲ謂フ
第二條 學會ヲ設立セムトスル者ハ其ノ願書ニ設立者ノ履歷書及左ノ事項ヲ記載シタル會則ヲ添附シ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
一 目的
二 名稱
三 事業
四 事務所ノ位置
五 會員ノ資格
六 入會及退會ニ關スル事項

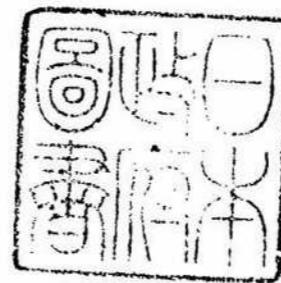
督
第十一條 本令ニ依リ學部大臣ニ提出スル文書ハ事務所所在地ノ所轄地方官ヲ經由スヘシ
地方長官前項ノ文書ヲ受ケタルトキハ意見ヲ附シテ之ヲ進達スヘシ
附 則
第十二條 本令ハ隆熙二年十月一日ヨリ之ヲ施行ス
第十三條 既設ノ學會ハ其ノ設立認可ヲ受ケタルト否トヲ問ハス總テ本令施行ノ日ヨリ二箇月以内ニ本令ノ規定ニ準シ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ

- 七 役員選定ニ關スル事項
- 八 經費ノ收支及資產ニ關スル事項
- 九 支會ヲ設タルモノハ名稱、位置其ノ他支會ニ關スル事項
- 十 學會ノ解散シタルトキハ直ニ學部大臣ニ報告スヘシ
- 第十一條 會則ヲ變更セムトスルトキハ學部大臣ノ認可ヲ受クヘシ
- 第十二條 學會ニハ會長ヲ置クヘシ
- 第十三條 會長ハ學會ヲ代表シ會務ヲ掌理スルモノトス
會長ノ新任及退任ハ其ノ都度學部大臣ニ報告スヘシ但シ新任者ノ報告ニハ履歷書ヲ添附スヘシ
- 第十四條 學會ニハ營利事業ヲ爲シ又ハ政治ニ關涉スルコトヲ得ス
第十五條 學會ハ其ノ事務所ニ會員名簿及資產原簿ヲ備ヘ會員ノ異動及財產ノ狀況ヲ明記スヘシ
- 第十六條 學會ハ每年一月其ノ前年ノ財產及會務ノ狀況並會員ノ數ヲ學部大臣ニ報告スヘシ
- 第十七條 學會ニ於テ本令又ハ設立認可ノ條件ニ違反シ其ノ他公益ヲ害スルトキハ學部大臣ハ其ノ認可ヲ取消スコトヲ得
- 第十八條 設立認可ヲ受ケシテ學會ト認ムヘキ事業ヲ爲スモノニ對シテハ學部大臣ハ其ノ禁止ヲ命スヘシ
- 第十九條 地方官ハ學部大臣ノ指揮ヲ承ケ所管内ノ學會ヲ監

附錄 韓國法令

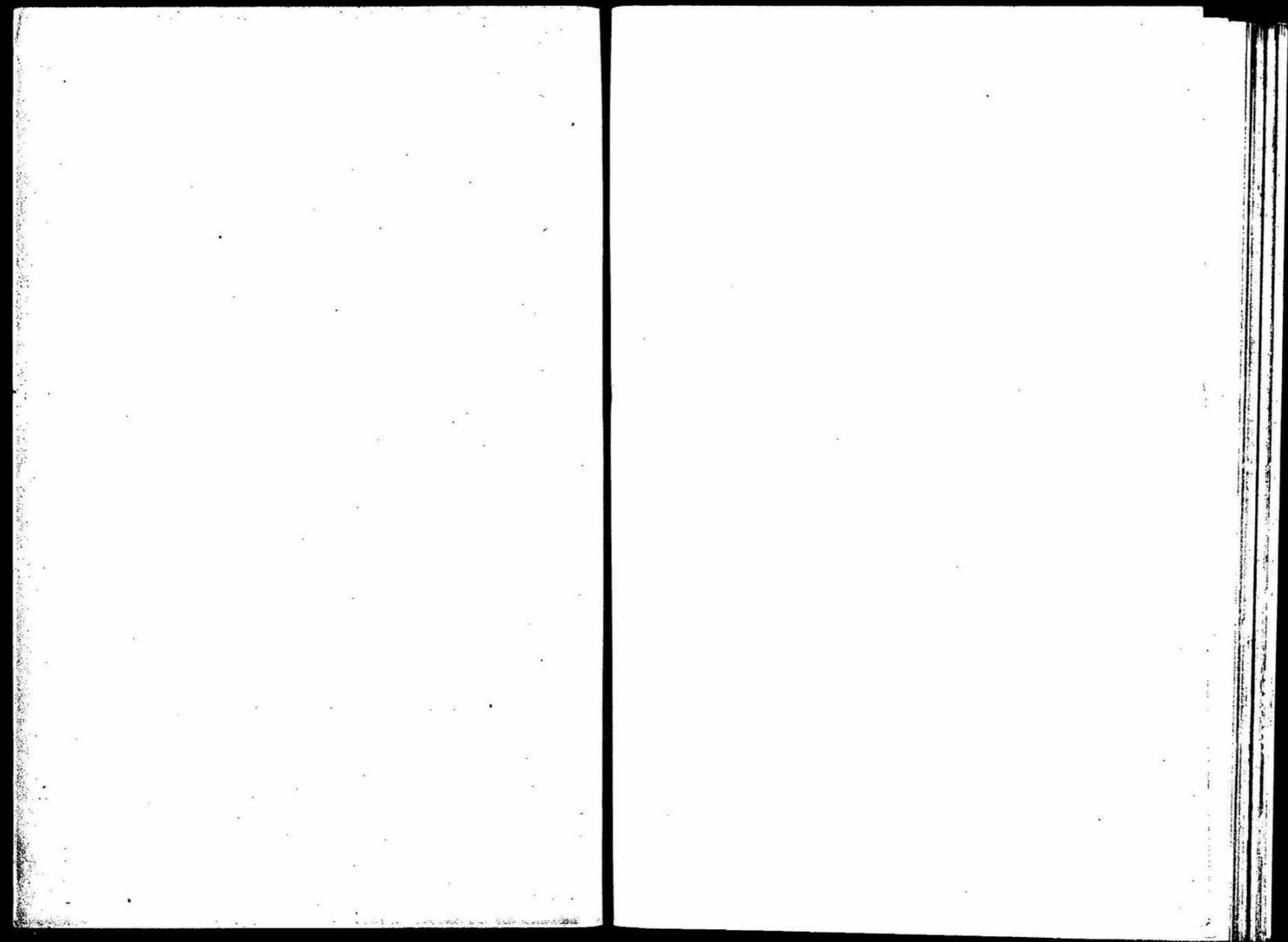
三六

ヲ日本理事官ニ申請スヘシ
第四條 本令施行ニ關スル細則ハ法部大臣之ヲ定ム
附則 本令ハ隆熙二年八月一日ヨリ之ヲ施行ス



明治四十三年四月十二日印刷
明治四十三年四月十五日發行

龍山印局印
統監府



一一一	同	一一一	一〇四	頁	
六二二		一一〇	六二	一	行
五		六	二		正
七	未	未	二		誤
六	行	行			表
貿	或	概	五		
貿	各	府	十		
港	開	二	月		
地	港	二	ニ		
		簡	二		
			簡		
二	各	政	五	一	
字	沿	府	十	月	
寄	岸	概	〇	七	
	開	シ	テ	〇	
	港	十	七	〇	
	地	簡	簡	〇	